

(形態) 隅丸方形 (規模) $2.5 \times 1.69 \times 0.69\text{m}$ (主軸方向) N- 10° -W (構造) 覆土は主に茶褐色土、ロームブロックが堆積していた。壁中位に段を持ち、なだらかに立ち上がる。墳底は緩く西壁側へ傾斜している。(遺物) 条痕文、黒浜式土器小片が出土している。

G 6 グリッド (第68図)

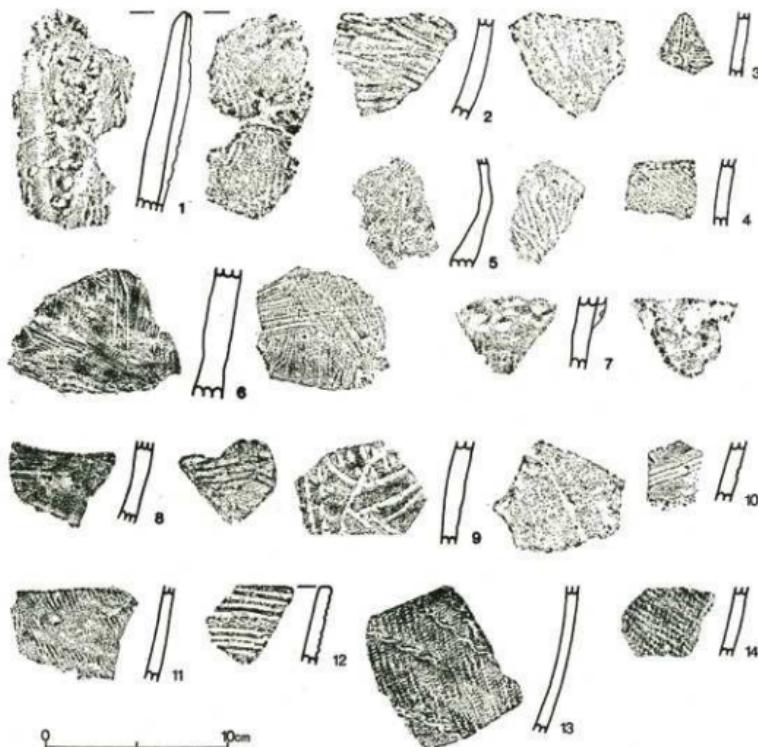
2号竪穴跡北側の緩傾斜面に位置し、5基の土壙が炉穴と混在して検出されている。

1号土壙

(形態) 円形 (規模) $1.32 \times 1.19 \times 0.44\text{m}$ (主軸方向) N- 36° -E (構造) 東及び南壁は角度を持ち、他の壁はなだらかに立ち上がり、墳底は北壁側へ傾斜している。覆土は黒褐色土、茶褐色土が厚く堆積していた。(遺物) 黒褐色土中より条痕文が2片出土している。

土器 (第69図5、6)

5は雑な整形で凹凸が目立つ深鉢尖底部。条痕は外面浅く、内面が深く施文されている。6は細めの条痕が内外面に浅く施文されている。两者とも胎土には少量の纖維を含む。焼成は良好、茶褐



第69図 F 5・F 7・G 6・G 7・H 7 グリッド土壙出土土器

色を呈している。

2号土壙

(形態) 不整円形 (規模) $1.73 \times 1 \times 0.29m$ (主軸方向) N—88°—W (構造) 浅い皿状を呈している。墳底は凹凸が目立つ。覆土はロームブロックを含む黒褐色土が堆積していた。(遺物) 条痕文細片が出土している。

3号土壙

(形態) 長梢円形 (規模) $1.3 \times 0.66 \times 0.3m$ (主軸方向) N—60°—E 4号土壙の南側に近接した浅い皿状の土壙。堅くしまった暗茶褐色土が主に堆積していた。墳底は中央部がやや低く、西壁側へ傾斜している。(遺物) 出土していない。

4号土壙

(形態) 円形 (規模) $1.48 \times 1.34 \times 0.31m$ (主軸方向) N—11°—E (構造) 浅い皿状を呈し、壁は極くなだらかに立ち上がる。墳底も平坦で凹凸もない。(遺物) 墳底直上より条痕文が1片出している。

土器(第69図7)

地文に条痕文を持ち、隆帯上に竹管による刺突文が施文され、内面は無文の深鉢胴部。胎土には多量の繊維と砂粒を含み、表面がザラついている。焼成不良で脆く、赤褐色を呈する。

5号土壙

(形態) 楕円形 (規模) $1.62 \times 0.89 \times 0.33m$ (主軸方向) N—10°—E (構造) 北壁はほぼ垂直に他の壁はなだらかに立ち上がり、墳底も平坦。(遺物) 南壁下の墳底上より黒浜式土器小片と覆土中より条痕文土器が出土している。

土器(第69図9、10)

9は垂下する2条の刺突列点文と沈線による区画内に刺突文で充填されたもの。胎土には少量の繊維と多量の雲母が含まれ、焼成良好、赤褐色。10は平行沈線と爪形文で構成されている。胎土には少量の繊維を含む。焼成良好、黒褐色。

G 7 グリッド(第70、71図)

2号竪穴跡と2号住居跡に囲まれた緩傾斜面から、G 8 グリッドを含め19基の土壙が、長径12mの楕円形状に分布して検出されている。

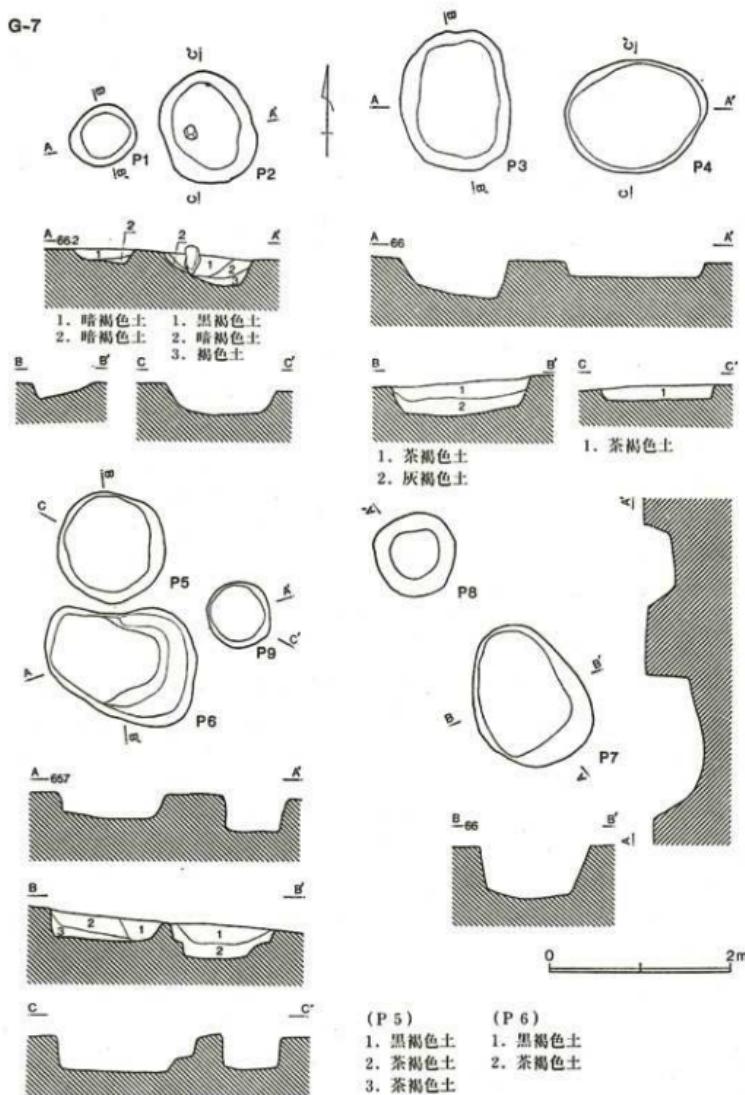
1号土壙

(形態) 円形 (規模) $0.72 \times 0.64 \times 0.16m$ (主軸方向) N—54°—E (構造) 2号土壙に近接し、極く浅い皿状を呈する土壙。墳底は北壁側へ強く傾斜している。(遺物) 出土していない。

2号土壙

(形態) 楕円形 (規模) $1.21 \times 1.02 \times 0.31m$ (主軸方向) N—41°—W (構造) 覆土は炭化物を含む黒褐色土が主に堆積していた。土壙中央部の西壁寄りに、径16cm、長さ36cmの下部がやや細くなる大きな自然疊が、直立して据え置かれた状態で検出された。疊の下部は土壙底まで達している。壁はなだらかに立ち上がり、墳底は東壁側へ強く傾斜している。(遺物) 諸謫a式土器が1片出土している。

G-7



第70図 G-7 グリッド土壤

土器（第69図11）

一部施文されない部分もあるが、細い単節P Lの繩文が浅く施文されている。内面は丁寧に磨かれている。胎土には大粒の砂粒を含む。焼成は良好で堅く、茶褐色を呈している。

3号土壙

（形態）隅丸方形 （規模） $1.55 \times 1.2 \times 0.41m$ （主軸方向）N—9°—W （構造）4号土壙に近接している。東壁は角度を持ち、他の壁はなだらかに立ち上がる。墳底は南東コーナー側へ強く傾斜している。（遺物）出土していない。

4号土壙

（形態）楕円形 （規模） $1.56 \times 1.23 \times 0.14m$ （主軸方向）N—89°—W （構造）極く浅い皿状を呈する土壙。覆土は少量のロームブロックを含む茶褐色土であった。墳底は平坦である。

（遺物）条痕文が1片と有孔砥石が出土している。

土器（第69図8）

内外面とも浅い条痕が横位に施文された深鉢胴部片。胎土には少量の繊維を含む。焼成良好で堅く、茶褐色を呈する。

石器（第62図6）

尾部の一部を欠損した有孔砥石。緑山遺跡では唯一の資料である。両面中央部に「U」字状を呈する溝が観られる。片面は直線的に、他面は弧状の溝に直交した溝が観られる。粒子が粗く脆い砂岩を利用している。重さ61g。

5号土壙

（形態）円形 （規模） $1.23 \times 1.2 \times 0.39m$ （主軸方向）N—5°—W （構造）6・9号土壙と非常に近接して検出された。覆土は黒色土、茶褐色土が堆積していた。北壁はほぼ垂直に、他の壁も角度を持って立ち上がる。墳底は東壁側へ緩く傾斜している。

6号土壙

（形態）隅丸方形 （規模） $1.7 \times 1.24 \times 0.35m$ （主軸方向）N—74°—W （構造）覆土は少量の炭化物を含む黒褐色土、茶褐色土が観られた。土壙東半部の壁は、中位に段を持ち、なだらかに立ち上がる。墳底は凹凸もなく平坦である。（遺物）出土していない。

7号土壙

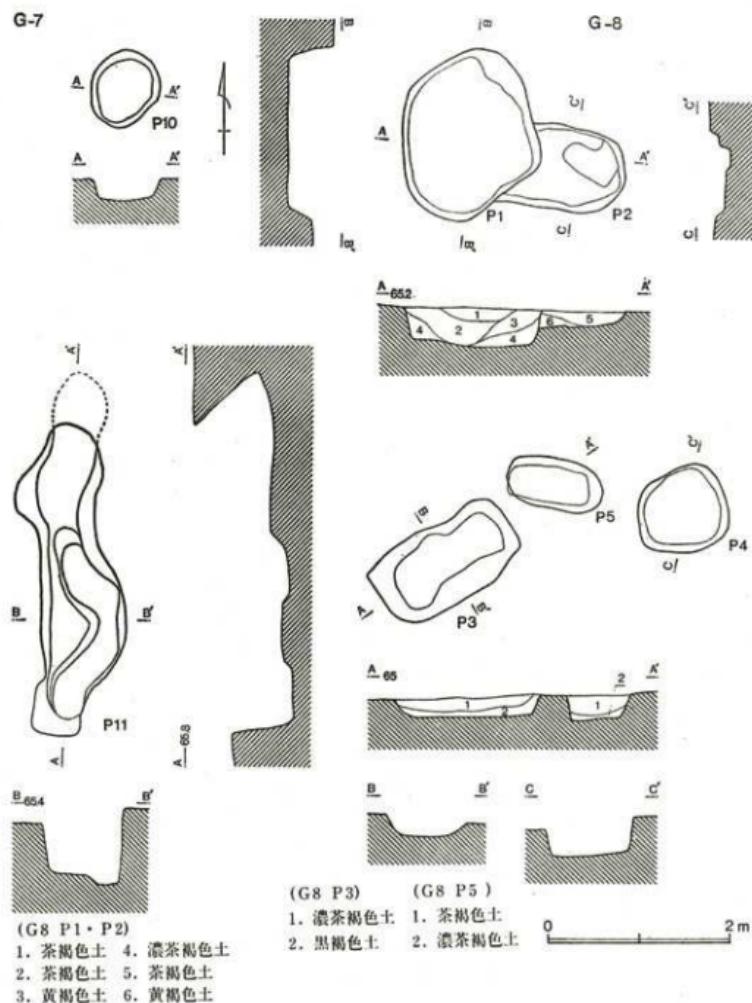
（形態）楕円形 （規模） $1.58 \times 1.24 \times 0.6m$ （主軸方向）N—39°—W （構造）北壁及び西壁は垂直に、他の壁も角度を持って立ち上がる。墳底は中央部がやや深い弧状を呈している。（遺物）墳底より条痕文が出土している。

8号土壙

（形態）円形 （規模） $0.92 \times 0.88 \times 0.31m$ （主軸方向）N—37°—W （構造）7号土壙に近接して検出された小形の土壙。浅い皿状を呈し、壁はなだらかに立ち上がる。墳底は緩く南壁側へ傾斜している。（遺物）出土していない。

9号土壙

（形態）円形 （規模） $0.74 \times 0.71 \times 0.38m$ （主軸方向）N—61°—W （構造）5・6号土



第71図 G 7・G 8 グリット土壤

墳の東側に近接している小形で掘り込みの深い土壙。壁は垂直に立ち上がり、墳底は平坦である。
(遺物) 出土していない。

10号土壙

(形態) 円形 (規模) $0.86 \times 0.75 \times 0.25m$ (主軸方向) N— 21° —E (構造) 浅い皿状を呈する小形の土壙。墳底も平坦で凹凸もない。(遺物) 出土していない。

11号土壙

(形態) 長梢円形 (規模) $3.98 \times 0.93 \times 0.9m$ (主軸方向) N— 2° —E (構造) 北壁はオーバーハングを呈し60cm程度突出している。他の壁はほぼ垂直に立ち上がる。墳底は平坦であるが中央から東壁直下が15cm前後一段深く掘り込まれている。(遺物) 出土していない。

G 8 グリッド(第71図)

隣接するG 7 グリッドの土壙群に連続して、5基の土壙が検出されている。

1号土壙

(形態) 楕丸方形 (規模) $1.92 \times 1.53 \times 0.42m$ (主軸方向) N— 5° —E (構造) 2号土壙の西半部を切り掘り込まれている。覆土は茶褐色土、少量の炭化物を含む濃茶褐色土が主体に堆積していた。壁は垂直に近く立ち上がり、墳底は東壁側へなだらかに傾斜している。(遺物) 条痕文細片が出土している。

2号土壙

(形態) 楕円形 (規模) $1.4 \times 0.94 \times 0.21m$ (主軸方向) N— 84° —W (構造) 1号土壙に西半部を切られ全体は不明である。浅い皿状を呈する土壙と思われる。覆土は茶褐色土が主体をなし、壁はなだらかに立ち上がる。墳底は平坦であるが北東コーナー部にピットが存在している。

(遺物) 出土していない。

3号土壙

(形態) 楕丸方形 (規模) $1.64 \times 0.89 \times 0.23m$ (主軸方向) N— 56° —E (構造) 浅い皿状を呈し、壁はなだらかに立ち上がる。覆土は焼土、炭化物を含む濃茶褐色土、黒褐色土である。墳底は平坦。(遺物) 条痕文の細片と黒浜式土器が出土している。

4号土壙

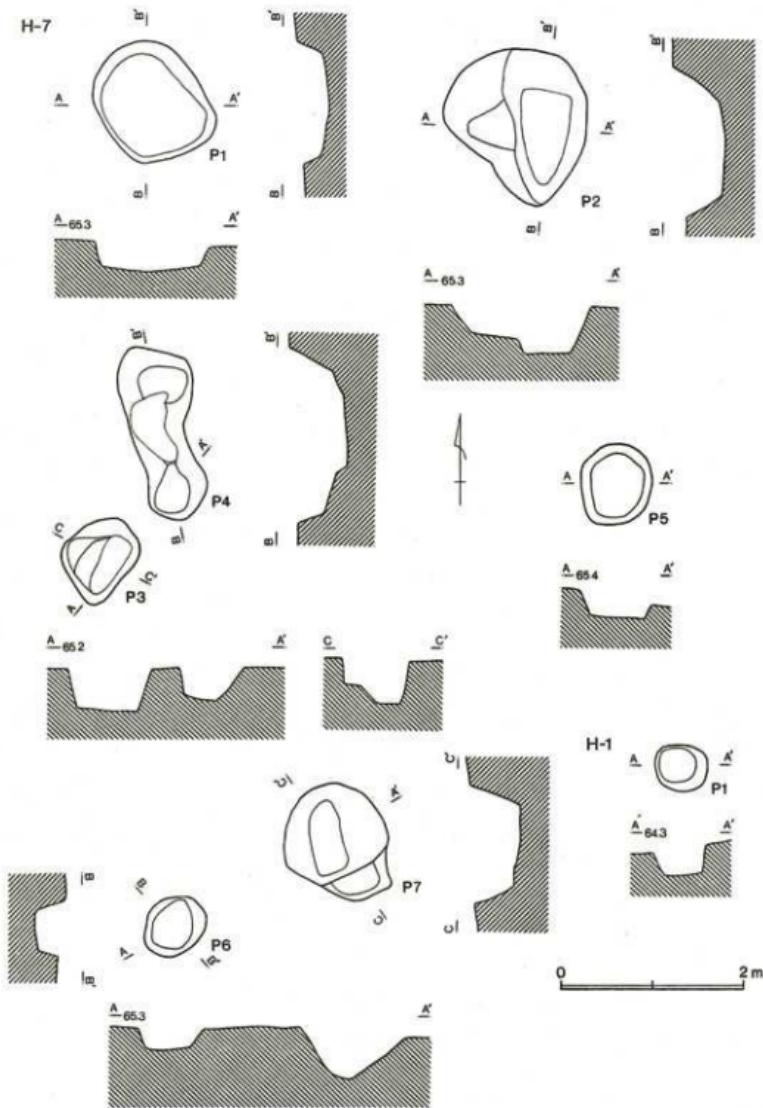
(形態) 不整円形 (規模) $1.07 \times 0.57 \times 0.26m$ (主軸方向) N— 78° —W (構造) 北壁は垂直に、他の壁はなだらかに立ち上がる。墳底は西壁側へなだらかに傾斜している。(遺物) 出土していない。

5号土壙

(形態) 楕丸方形 (規模) $1 \times 0.98 \times 0.35m$ (主軸方向) N— 81° —W (構造) 3・4号土壙に挟まれて検出された。覆土は炭化物を含む茶褐色土、濃茶褐色土が堆積していた。壁はほぼ垂直に立ち上がり、南西コーナーはオーバーハングを呈している。墳底は中央がやや盛り上がっていいる。(遺物) 出土していない。

H 1 グリッド(第72図)

1号土壙



第72図 H 1 ~ H 7 グリッド土壤

(形態) 円形 (規模) $0.57 \times 0.52 \times 0.3m$ (主軸方向) N— 89° —W (構造) 小形で掘り込みの深い土壙。壁は角度を持って立ち上がり、墳底は西壁側へなだらかに傾斜している。(遺物) 出土していない。

H 7 グリッド (第72図)

2号住居跡東南の緩傾斜面から、6基の土壙が長径6mの梢円形に分布して検出されている。遺跡の東南端部に位置している。

1号土壙

(形態) 半円形 (規模) $1.39 \times 1.13 \times 0.31m$ (主軸方向) N— 38° —W (構造) 浅い皿状を呈する。覆土は少量の炭化物を含む黒褐色土であった。壁はなだらかに立ち上がる。墳底は中央部がやや低い。(遺物) 諸磯a式土器細片と打製石斧が出土している。

石器 (第62図3)

頭部を欠損する打製石斧。片面に自然面を大きく残し、主剥離面側は側刃より粗い調整加工が施されている。刃部は主剥離面側は細かく、自然面側は粗く調整され鈍角に仕上げられている。重さ96g。石材は細粒砂岩。

2号土壙

(形態) 不整円形 (規模) $1.72 \times 1.55 \times 0.53m$ (主軸方向) N— 10° —W (構造) 壁は角度を持ち立ち上がる。墳底中央には土壙を2分する段差があり、東壁側が深く掘り込まれている。覆土観察では重複は認められなかった。(遺物) 出土していない。

3号土壙

(形態) 不整円形 (規模) $0.89 \times 0.64 \times 0.51m$ (主軸方向) N— 12° —W (構造) 4号土壙の西南に近接している。小形で掘り込みが深く、壁は垂直に近く立ち上がる。墳底にはやや凸凹が観られる。(遺物) 出土していない。

4号土壙

(形態) 長梢円形 (規模) $1.9 \times 0.57 \times 0.58m$ (主軸方向) N— 12° —W (構造) 東壁はなだらかに、他の壁は角度を持ち立ち上がる。墳底は凹凸が観られ、北壁及び南壁側が浅く、中央部が一段深く掘り込まれている。(遺物) 諸磯a式土器が出土している。

土器 (第69図12)

繩文を地文に、半截竹管による平行沈文線のモチーフをもつ深鉢口縁部。口唇部及び内面は丁寧に撫でられ滑沢を呈している。胎土には砂粒を含み、焼成良好で堅緻。茶褐色を呈している。

5号土壙

(形態) 円形 (規模) $0.92 \times 0.82 \times 0.23m$ (主軸方向) N— 30° —E (構造) 小規模な浅い皿状を呈する土壙。墳底は東壁側へなだらかに傾斜している。(遺物) 出土していない。

6号土壙

(形態) 楕円形 (規模) $0.73 \times 0.61 \times 0.28m$ (主軸方向) N— 51° —E (構造) 7号土壙に近接して検出された小規模な土壙。浅い皿状を呈している。墳底は平坦である。(遺物) 墳底上より諸磯a式土器が2片出土している。

土器（第69図13、14）

単節R Lの細い縄文が全面に施され、13には綴縫文が観られる。縄文の施文は浅い。内面は磨かれ滑沢を呈している。胎土には砂粒を含むが焼成は良好で堅い土器である。色調は13が赤褐色、14は黒褐色を呈する。

7号土壙

（形態）不整円形 （規模） $1.32 \times 1.15 \times 0.53$ m （主軸方向）N—28°—W （構造）東壁及び西壁はなだらかに、他の壁は角度を持ち立ち上がる。壙底は南壁寄りに段を持ち、北壁側が一段深く掘り込まれている。（遺物）出土していない。

緑山遺跡土壙

土壤名	図 No	形 狀	規 模 (m)	主軸方向	出 土 遺 物	時 期	備 考
D 3	56	長方形	$1.29 \times 0.79 \times 0.61$	N—67°—E	野島式・条痕文	野島式	
P 1		不整円形	$0.55 \times 0.49 \times 0.34$	N—43°—E			
D 5	56	長楕円	$3.04 \times 1.39 \times 0.90$	N—27°—E	条痕文	縄文早期	
P 2		不整円形	$1.05 \times 0.68 \times 0.24$	N—2°—E	条痕文	〃	
P 3		不整円形	$0.91 \times 0.76 \times 0.27$	N—50°—E	条痕文	〃	
D 6	56	椭円形	$1.23 \times 0.68 \times 0.18$	N—18°—E	条痕文	〃	
E 2	58	不整円形	$0.95 \times 0.89 \times 0.22$	N—45°—W	条痕文・打製石斧	〃	
P 2		不整円形	$0.99 \times 0.49 \times 0.13$	N—44°—W	条痕文	〃	
P 3		長楕円形	$1.25 \times 2.52 \times 0.56$	N—17°—W			
E 3	58	椭円形	$1.00 \times 0.70 \times 0.74$	N—22°—E	条痕文	〃	
E 4	6	椭円形	$1.49 \times 1.05 \times 0.77$	N—87°—E			
E 5	58	不整円形	$2.12 \times 1.50 \times 0.71$	N—35°—E	花漬下層式	花漬下層式	
P 2		長楕円形	$1.58 \times 0.79 \times 0.76$	N—81°—W	諸磯 a式	諸磯 a式	
P 3		隅丸方形	$0.94 \times 0.66 \times 0.11$	N—29°—W	条痕文	縄文早期	
P 4		円形	$0.63 \times 0.46 \times 0.19$	N—90°—W	条痕文	〃	
P 5		円形	$0.61 \times 0.52 \times 0.22$	N—5°—E	条痕文		
P 6		不整円形	$1.29 \times 1.44 \times 1.24$	N—38°—W			
E 6	59	不整円形	$2.59 \times 1.81 \times 0.50$	N—66°—E	条痕文	縄文早期	
P 2		長楕円形	$1.90 \times 0.80 \times 1.00$	N—10°—W	条痕文・諸磯 a式	諸磯 a式	
P 3		長楕円形	$1.81 \times 1.04 \times 0.51$	N—10°—E			
P 4		長楕円形	$1.15 \times 0.44 \times 0.16$	N—80°—W			
F 1	60	隅丸方形	$2.88 \times 1.44 \times 1.11$	N—21°—E	条痕文・打製石斧	縄文早期	
P 2		不整円形	$2.74 \times 1.25 \times 0.79$	N—70°—W	条痕文	〃	
P 3		不整円形	$1.62 \times 1.34 \times 0.45$	N—4°—W	条痕文	〃	
4		円形	$0.74 \times 0.69 \times 0.18$	N—4°—E			

土壤No	図 No	形 細	規 模 (mm)	主軸方向	出 土 遺 物	時 期	備 考
F 2	63						
P 1		円形	1.42 × 1.30 × 0.60	N—5°—E	条痕文・打製石斧	縄文早期	
P 2		不整円形	2.74 × 2.15 × 0.51	N—22°—E	条痕文	〃	
F 4	64						
P 1		円形	0.50 × 0.47 × 0.14	N—30°—W	黒浜式・打製石斧・磨石	黒浜式	
F 5	66						
P 1		隅丸方形	1.42 × 0.80 × 0.42	N—80°—E	花模下層式・ナイフ型石器	花模下層式	
P 2		不整円形	1.80 × 1.48 × 0.38	N—16°—E	黒浜式	黒浜式	
P 3		隅丸方形	2.79 × 2.26 × 0.69	N—8°—W	条痕文・諸磯 a 式	諸磯 a 式	
P 4		隅丸方形	1.78 × 0.86 × 0.68	N—50°—E	条痕文	縄文早期	
P 5		椭円形	1.42 × 0.66 × 0.46	N—25°—W	条痕文・黒浜式	黒浜式	
P 6		不整円形	0.83 × 0.60 × 0.51	N—64°—E			
F 6	64						
P 1		円形	0.89 × 0.95 × 0.96	N—87°—E	土師盤・塊・甕	奈良時代	
P 2		円形	0.96 × 0.93 × 0.36	N—32°—E	須恵窯	奈良時代	
F 7	66						
P 1		長椭円形	1.89 × 0.72 × 0.29	N—2°—E	条痕文・諸磯 a 式	諸磯 a 式	
P 2		隅丸方形	1.90 × 0.74 × 0.47	N—69°—W			
F 8	64						
P 1		長方形	1.34 × 0.85 × 0.53	N—47°—E	条痕文	縄文早期	
P 2		円形	1.37 × 1.27 × 0.59	N—46°—W			
G 5	68						
P 1		隅丸方形	2.50 × 1.69 × 0.69	N—10°—W	条痕文・黒浜式	黒浜式	
G 6	68						
P 1		円形	1.32 × 1.19 × 0.44	N—36°—E	条痕文	縄文早期	
P 2		不整円形	1.73 × 1.00 × 0.29	N—88°—W	条痕文	〃	
P 3		長椭円形	1.30 × 0.66 × 0.30	N—60°—E			
P 4		円形	1.48 × 1.34 × 0.31	N—11°—E	条痕文	〃	
P 5		椭円形	1.62 × 0.89 × 0.33	N—10°—E	条痕文・黒浜式	黒浜式	
G 7	70 + 71						
P 1		円形	0.72 × 0.64 × 0.16	N—54°—E			
P 2		椭円形	1.21 × 1.02 × 0.31	N—41°—W	諸磯 a 式	諸磯 a 式	
P 2		隅丸方形	1.55 × 1.20 × 0.41	N—9°—W			
P 4		椭円形	1.56 × 1.23 × 0.14	N—89°—W	黒浜式・砾石	黒浜式	
P 5		円形	1.23 × 1.20 × 0.39	N—5°—W	条痕文	縄文早期	
P 6		隅丸方形	1.70 × 1.24 × 0.35	N—74°—W			
P 7		椭円形	1.58 × 1.24 × 0.60	N—39°—W	条痕文	縄文早期	
P 8		円形	0.92 × 0.88 × 0.31	N—37°—W			
P 9		円形	0.74 × 0.71 × 0.38	N—61°—W			
P 10		円形	0.86 × 0.75 × 0.25	N—21°—E			
P 11		長椭円形	3.98 × 0.93 × 0.90	N—2°—E			
G 8	71						
P 1		隅丸方形	1.92 × 1.53 × 0.42	N—5°—E	条痕文	縄文早期	
P 2		椭円形	1.40 × 0.94 × 0.21	N—84°—W			
P 3		隅丸方形	1.64 × 0.89 × 0.23	N—56°—E	条痕文・黒浜式	黒浜式	
P 4		不整円形	1.07 × 0.57 × 0.26	N—78°—W			
P 5		隅丸方形	1.00 × 0.98 × 0.35	N—81°—W			
H 1	72						

土壤No	図 No	形 細	規 模 (m)	主軸方向	出 土 遺 物	時 期	備 考
P 1 H 7	72	円形	0.57 × 0.52 × 0.30	N-89°-W			
P 1		隅丸方形	1.39 × 1.13 × 0.31	N-38°-W	諸磯 a式・打製石斧	諸磯 a式	
P 2		不整円形	1.72 × 1.55 × 0.53	N-10°-W			
P 3		不整円形	0.89 × 0.64 × 0.51	N-12°-W	諸磯 a式	諸磯 a式	
P 4		長椭円形	1.90 × 0.57 × 0.58	N-12°-W			
P 5		円形	0.92 × 0.82 × 0.23	N-30°-E			
P 6		椭円形	0.73 × 0.61 × 0.28	N-51°-E	諸磯 a式	諸磯 a式	
P 7		不整円形	1.32 × 1.15 × 0.53	N-28°-W			

土壌出土石器

図 番	種 別	長 さ (cm)	幅 さ (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (g)	石 質	出 土 土 壤	備 考
62-1	打製石斧	10.0	5.1	2.8	182	ホルンフェルス	F 2 P 1	完形
2	打製石斧	9.7	5.9	2.3	122	粗粒砂岩	F 4 P 1	完形
3	打製石斧	7.4	6.1	1.8	96	細粒砂岩	H 7 P 1	頭部欠損
4	打製石斧	9.5	3.8	1.4	116	硬質砂質頁岩	E 2 P 1	完形
5	打製石斧	5.3	5.9	1.5	92	千枚岩	F 1 P 1	1/2以上欠損
6	砥 石	6.6	4.5	2.1	61	砂 岩	G 7 P 4	尾部欠損
7	磨 石	9.8	8.4	4.6	576	安山岩	F 4 P 1	1/2以上欠損

5 集 石

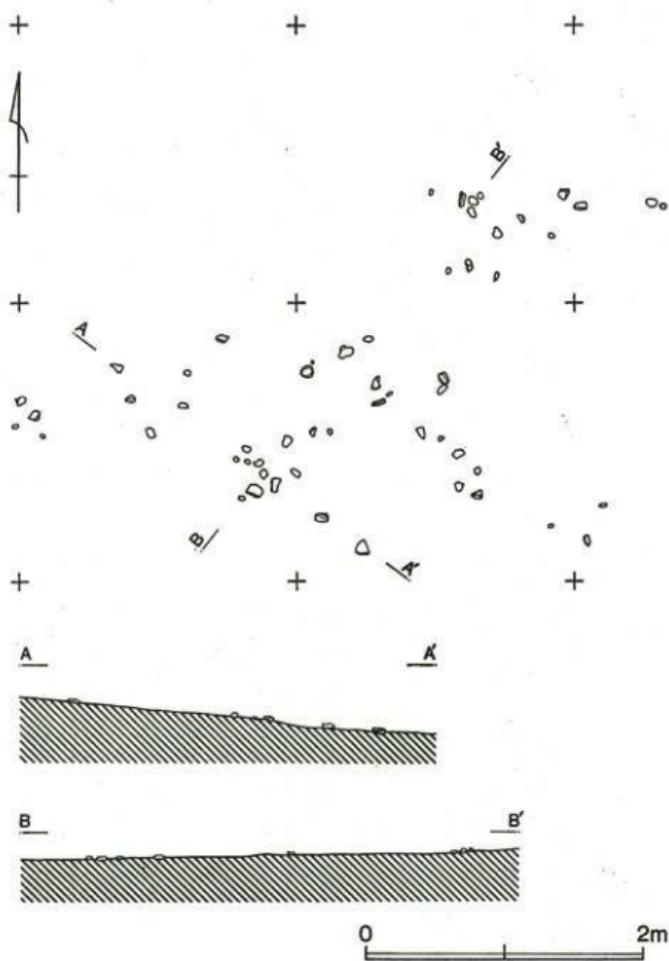
1号集石（第73図）

2号住居跡北西の緩傾斜面に位置しているH 6及びH 7グリッドにかけて検出されている。周囲には炉穴、土壌などの遺構は無く、単独に存在している。

約10m × 8mの規模を持ち、東西に細長い集石である。集石の中央部分に拳大の礫が集中する部分が観られる。周辺部には5cm前後の小さな礫が散在している。

石材には、現在でも丘陵内の各所にある物見山疊層の露頭より採取される砂岩、頁岩、ホルンフェルス等が使われている。自然礫もあるが、割れた礫も観られる。

集石内を精査したが、焼土や落ち込みなどは確認できなかった。遺物は、拳大の礫が集中する地点から、礫と同一レベルで条痕文の細片が出土している。



第73圖 1号集石

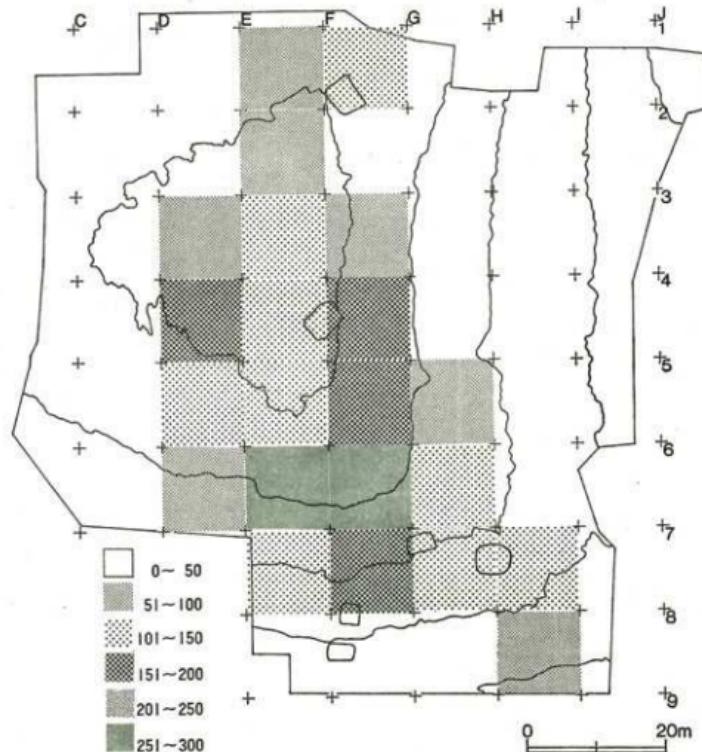
6 グリッド出土遺物

(1) 繩文時代の遺物

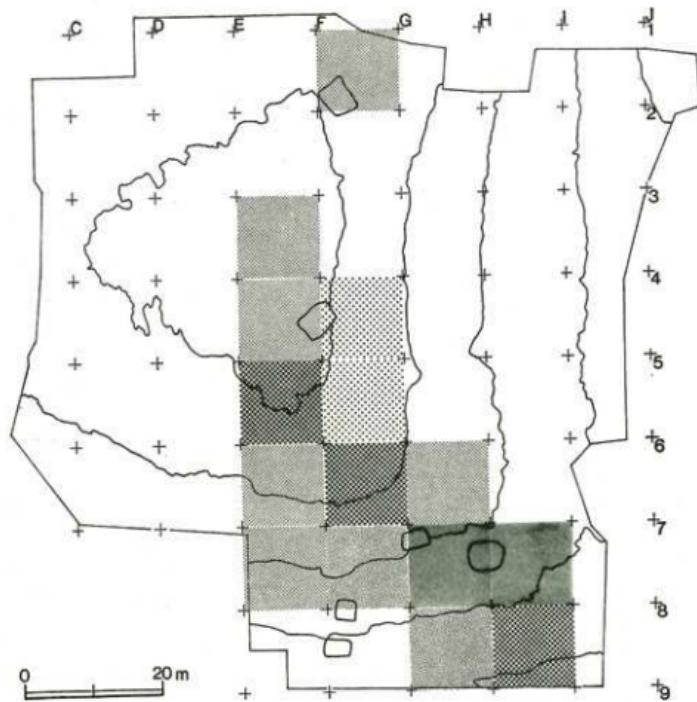
1 土器

繩文式土器は主に台地平坦面から南側緩傾斜面にかけてのグリッドで、茶褐色土（表土）下部から明茶褐色土、茶褐色土（第3層）中から出土している。時期は早期沈線文系土器から中期五領ヶ台式にわたるが、主体は早期貝殻条痕文系土器群と前期黒浜式及び諸磯a式土器である。

貝殻条痕文系土器の分布（第74図）は、竪穴跡及び炉穴が存在する台地平坦面から南側緩傾斜面に多く、特にE6, F6グリッドに集中が認められる。前期の黒浜式、諸磯a式土器（第75図）は、黒浜期の1号住居跡周辺、南側緩傾斜面に位置する諸磯a式期の2号住居跡周辺のG7, H7グリッドに特に集中し、遺構との有機的な関連があるものと思われる。



第74図 グリッド出土土器分布図（早期）



第75図 グリップ出土土器分布図（前期）

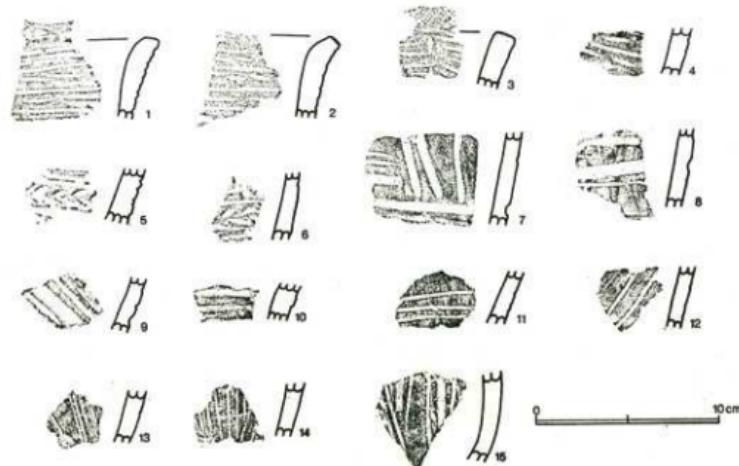
以下、時期、型式を主な分類基準として報告する。

I群（第76図） 早期前半の沈線文系土器を本群とする。

a種（1～4） 横走する沈線文と短沈線文で文様が構成されるもの。1はやや外反する口縁部口唇部が平坦に整形された角頭状を呈し、口唇上には綾杉状の沈線文が施されている。2は1と同じ文様構成を持つが、著しく外反している。横走する沈線文間に1条乃至2条の短沈線文が連続施文されている。3は肥厚した角頭状を呈する口縁部片、縦位の短沈線文で横走する沈線文を区画している。4は1と同一個体と思われる胴部片。縦て肉厚で、内面は丁寧に磨かれている。胎土は細かな砂粒を含むが緻密である。焼成は良好で堅く、茶褐色を呈している。

b種（5、6） 横位の沈線文と綾杉状の短沈線文で文様が構成されるもの。5、6は同一個体と思われ、深く施文された2条の沈線文間に右に開く綾杉状の短沈線文が施文されている。内面は丁寧に磨かれ、胎土は細かな砂粒を含むが緻密である。焼成は良く堅い。濃茶褐色を呈している。

C種（7～10） 太い沈線文と細い沈線文で文様が構成されるもの。7は竹管による縦位及び横位の太沈線文を区画文として、太・細沈線文で充填している。8～10は太沈線文と細沈線文が交互に



第76図 グリッド出土土器(1)

施文されている。何れも内面は磨かれ胎土は砂粒を含むが緻密であり、焼成は良好、7は赤褐色、他は茶褐色。

d種 (11~15) 細い沈線文で文様が構成されるもの。11は横位に、他はいずれも胴下半部片であり斜位に施文されている。施文具は竹管工具と思われる。總て胎土には、細かな砂粒を含むが、焼成良好で堅い。色調は14が赤褐色、他は茶褐色を呈している。本群は田戸下層式に比定される。

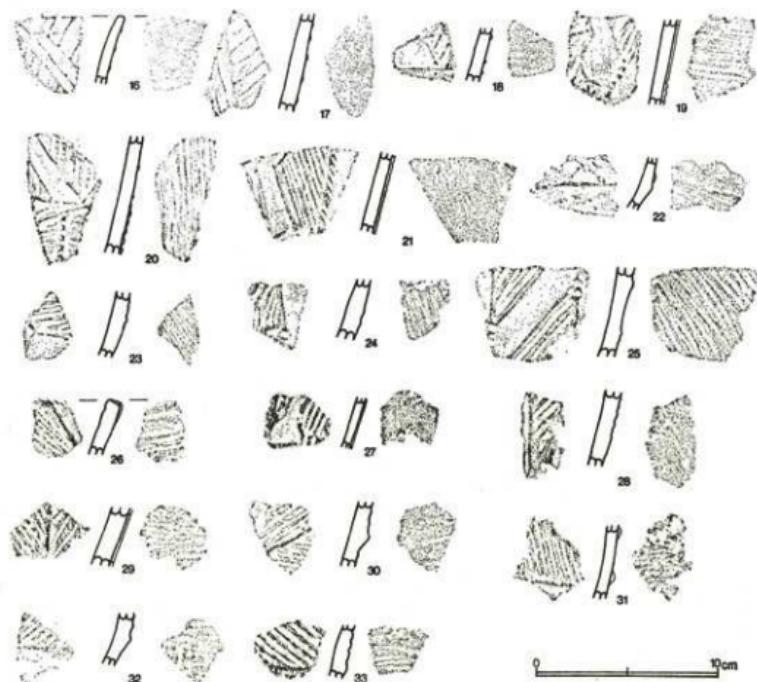
Ⅱ群 早期後半の貝殻条痕文系土器を一括する。總点数3033点が出土し、緑山遺跡の一つの中心を成す土器群である。

1類 総点数17点と少ないが、区画文のあり方から2種に分類できる。

a種 (16~13) 細隆起線を区画文として、区画内を細隆起線で充填するもの。

16、17は3条の細隆起線を区画文とし、同じ細隆起線で区画内を充填している。16はこの種の口縁部。器肉は薄くやや外反する。口唇部は撫でられ平坦に仕上げられている。細隆起線は總て粘土紐の貼り付けで行なわれ、内面には器面調整時の横走する浅い条痕が観られる。胎土には極く少量の纖維と細かな砂粒を多量に含み、器面が荒れている。焼成は普通で、18が赤褐色、他は茶褐色を呈する。

b種 (19~33) 細隆起線を区画文とし、区画内を沈線で充填するもの。19~20は刻み目を持つ細隆起線と刻み目を持たない細隆起線を併用して幾何学的な区画を描出し、区画内を沈線文で充填している。24、25は同一個体と思われ、幅広く残された細隆起線間が丁寧に撫でられ無文化している。沈線の施文も浅く雑である。26はこの種の口縁部である。口唇部がやや肥厚し、口唇上面には竹管状工具による刻み目が施されている。区画文となる細隆起線は口唇部より施されている。何れ



第77図 グリッド出土土器(2)

も胎土にはa種同様に、極く少量の纖維と多量の砂粒を含み器面が荒れたものが多い。内面には条痕が深く観られるもの(24、25、29)と浅いものが観られる。焼成は普通～良好である。色調は赤褐色～茶褐色を呈している。本類は野島式に比定される。

2類 鶴ヶ島台式に比定されるものを本類とする。文様構成により2種に分類される。

a種(34～37) 隆起線を区画文とし区画内を押し引き状の沈線で充填している。何れも括れ部片で、隆起線上には斜方向より押捺された円形刺突が加えられている。内面には器壁調整時の横位の条痕が観られる。胎土には少量の纖維と大粒の砂粒が含まれ、器面がザラついている。焼成はやや不良で脆い土器である。色調は赤褐色を呈している。

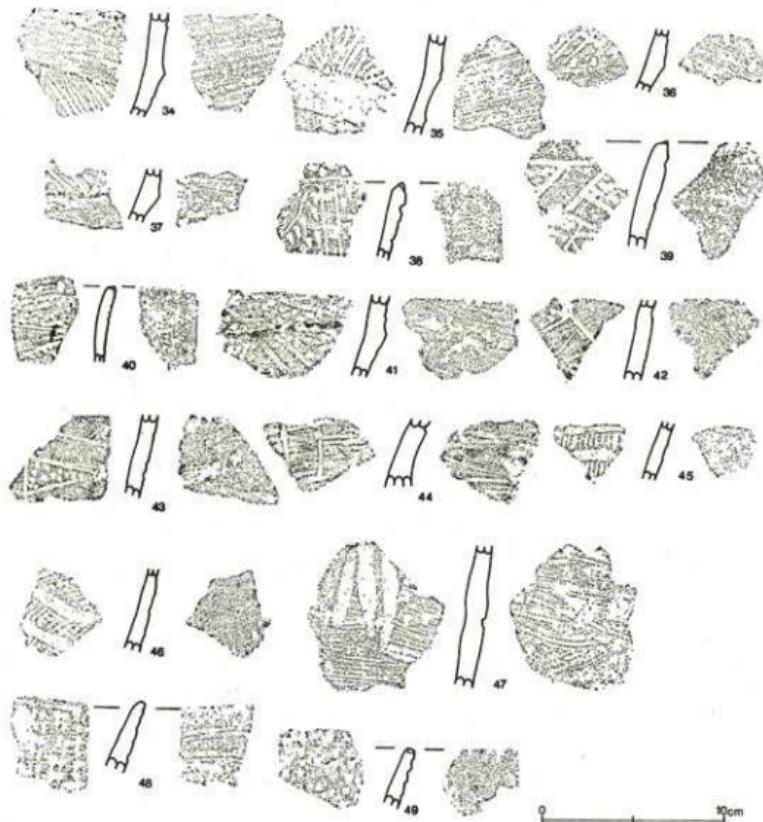
b種(38～44) 沈線で幾何学的方区画をし、区画内を刺突文で充填しているもの。38～40はこの種の口縁部片。口唇上には竹管工具による刻み目が施されている。40は器内の薄いもので区画内に充填される刺突は器壁に対して右下斜め方向から施文されている。41は括れ部片、浅い沈線区画内に雜な刺突が加えられている。總て内面には明瞭な条痕が認められず、細い擦痕が観られる。胎土には少量の纖維と多量の砂粒を含む。焼成はやや不良で、赤褐色を呈するものが多い。

3類 茅山下層式に比定されるもので、有文土器は5点と少ない。文様により2種に分類される。

a種 (45~47) 凹線文を区画文とするもの。45・46は同一個体のもので、凹線文区画内に3条の沈線と1条の刺突を交互に施文している。47は3条の垂下する凹線文に直交する列点文が施され条痕を地文としている。45、46には条痕文は認められない。胎土には少量の纖維を含み、焼成は45、46良好、47は不良で脆い。赤褐色を呈する。

b種 (48, 49) 刺突文が施文されたもの。48は内剥ぎ状を呈する口縁部片、竹管工具の腹部を利用した刺突文が口唇直下より施文されている。内面には横位の浅い条痕が認められる。49の口唇部には外面の刺突文と同じ工具による刻み目が加えられている。两者とも胎土には少量の纖維と砂粒を含む。焼成はやや甘く、48が赤褐色、49は茶褐色を呈している。

4類 茅山上層式に比定されるもので、条痕文系土器群中の主体となるものである。文様構成により2種に分類される。



第78図 グリッド出土土器(3)

a種（50～71） 刺突列点文で文様構成されるもの。50～53は波状口縁を呈する深鉢の口縁部。50は条痕の地文上に刺突列点文の施された隆帯が波頂部より垂下している。52の口唇部は内剥ぎ状を呈し、口唇上には刻み目が施されている。何れも胎土には多量の繊維と砂粒を含み、表面がザラつき、空洞が激しい。焼成は不良で脆く、赤褐色を呈している。54は平縁を呈する深鉢口縁。口唇部は内剥ぎ状を呈し、口唇上は竹管による刻み目が施されている。細い条痕の地文上に竹管による刺突列点文で文様構成されている。55～60は平坦な口唇上には刻み目が施され、口縁部に沿って1条の刺突列点文が巡る。胎土は少量の繊維と細かな砂粒を多量に含み器面が荒れている。焼成は良く、茶褐色を呈する。59、60は刺突列点文を持つ隆帯が観られるもので、繊維を多量に含むためか空洞が目立ち脆い土器である。61～68は刺突列点文が施文されている胸部片。61～68は地文に条痕を持つが、何れも施文は浅く、内面には観られないものもある。68は僅かに擦痕が認められる。總て胎土には少量の繊維と砂粒を含み、器面が荒れている。焼成は不良なものが多く脆い。色調は赤褐色～茶褐色である。69は刺突列点文下に波状の沈線文が加えられている。70、71は竹管工具による刺突文が観られ、地文は無い。多量の繊維を胎土に含むため空洞が目立つ。茶褐色を呈する脆い土器。

b種（72～74） 繩文を有するもの。72は茅山上層式に多く観られる皿状突起を持つ深鉢口縁部である。外面には燃りの緩いRLの繩が施文され、内面は横位の条痕が深く施文されている。73は口唇上にも外面と同じRLの繩文が押捺されている。74は原体の燃りは不明であるが、絡状体の側面圧痕文が格子状に施され、平坦な口唇上にも同じ原体で押捺されている。地文に僅か条痕が認められる。72、73は繊維多量に含むが、74の繊維含有量は僅かである。焼成はやや不良で、色調は72が茶褐色、73、74は赤褐色を呈している。

5類 条痕文土器を一括し本類とする。口縁部・胸部・底部に分類し、順次説明を加えてゆく。

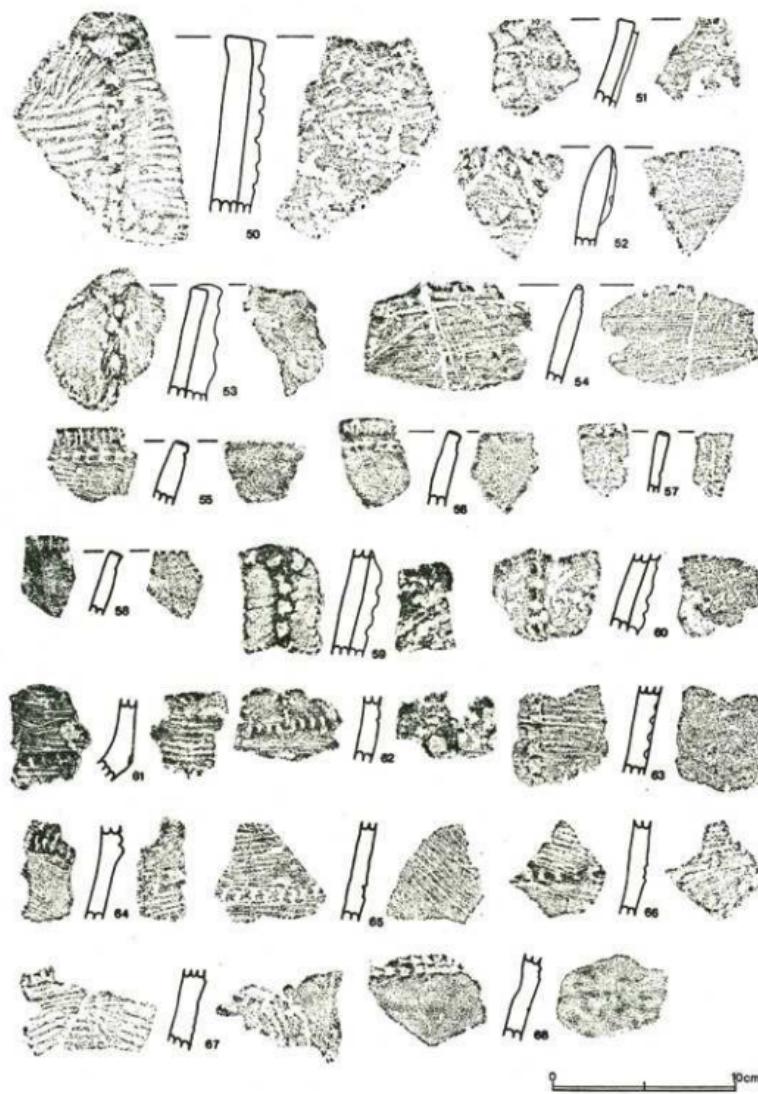
口縁部（76～128）

口縁部に刻み目を持つもの（78～99）

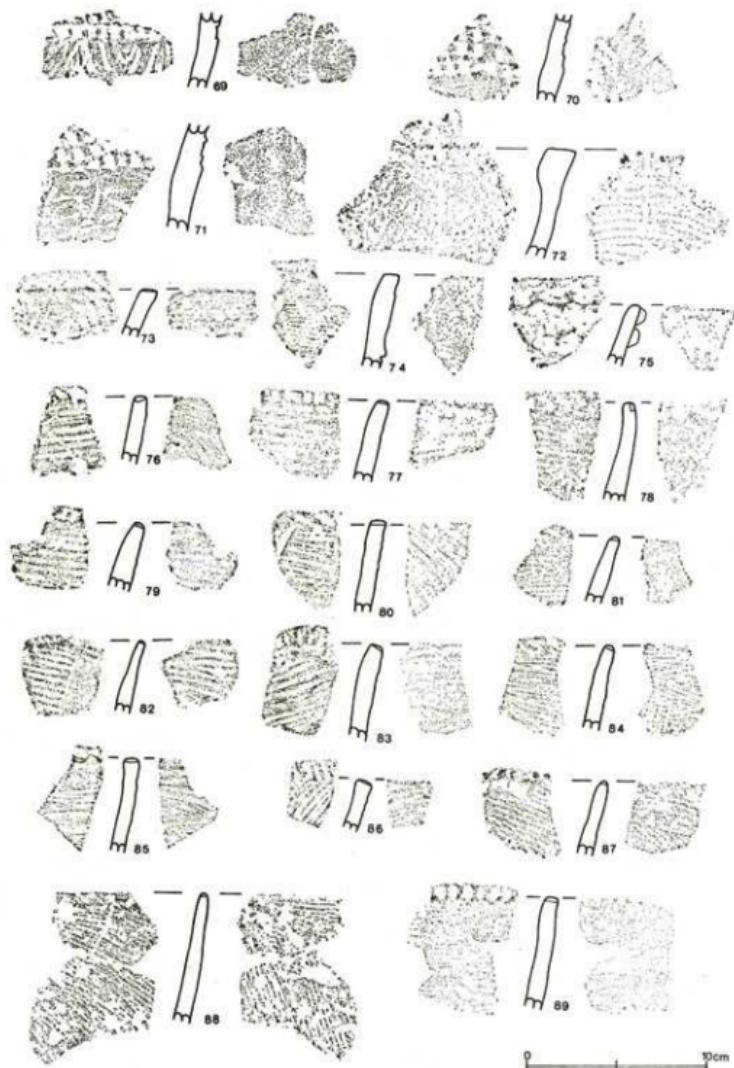
口唇部に施される刻み目は、總て竹管状工具で施されており、絡状体圧痕や貝殻腹縁などで施文されたものはない。刻み目の方向は、口縁に対して、斜方向のものが大部分であるが、直交するもの（77、83、87、89、91、98）、口唇部の外面のみ（78）とある。口縁部の形態は、緩く外反する丸棒状を呈する平縁のものが大半を占めるが、78、85はやや内反する。76～90は内外面とも横走あるいは斜走する条痕が認められる。91～99は擦痕文が認められる。總て胎土には少量の繊維と多量の砂粒を含み、表面がザラつくものが多い。焼成は良好で堅く、色調は赤褐色～茶褐色である。

口唇部に刻み目を持たないもの（100～128）

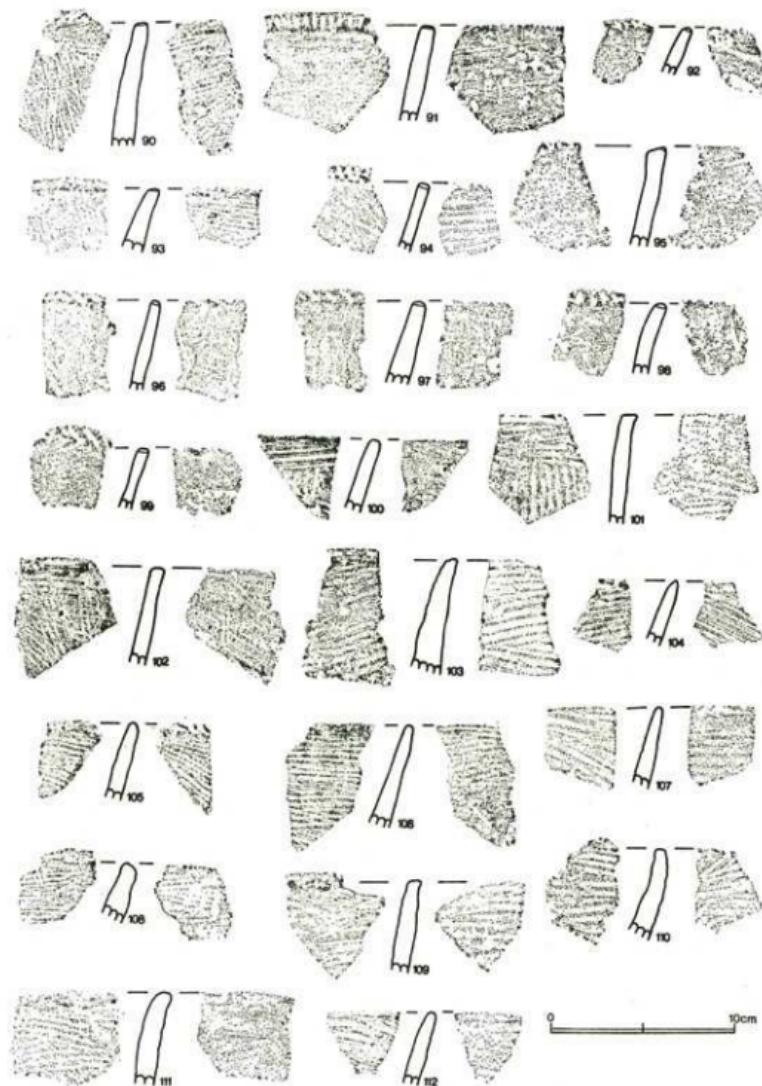
口縁部形態は、丸棒状を呈した緩く外反するものが主体であるが、内剥ぎ状（103、104、119）、内反するもの（110、128）、極端に外反するもの（113）がある。条痕の方向は、内外面とも横走あるいは斜走するものが大半を占める。101、102には一部縦走する条痕が認められる。胎土は刻み目を持つものと共通し、少量の繊維と多量の砂粒を含む。焼成は良好で堅く、103～106、116が赤褐色、他は茶褐色を呈する。121～128は擦痕文の認められるものである。121は縦走、122は横走する擦痕が観られる。胎土は122が繊維を多量に含む以外は、繊維の含有量は少ない。焼成も良好であ



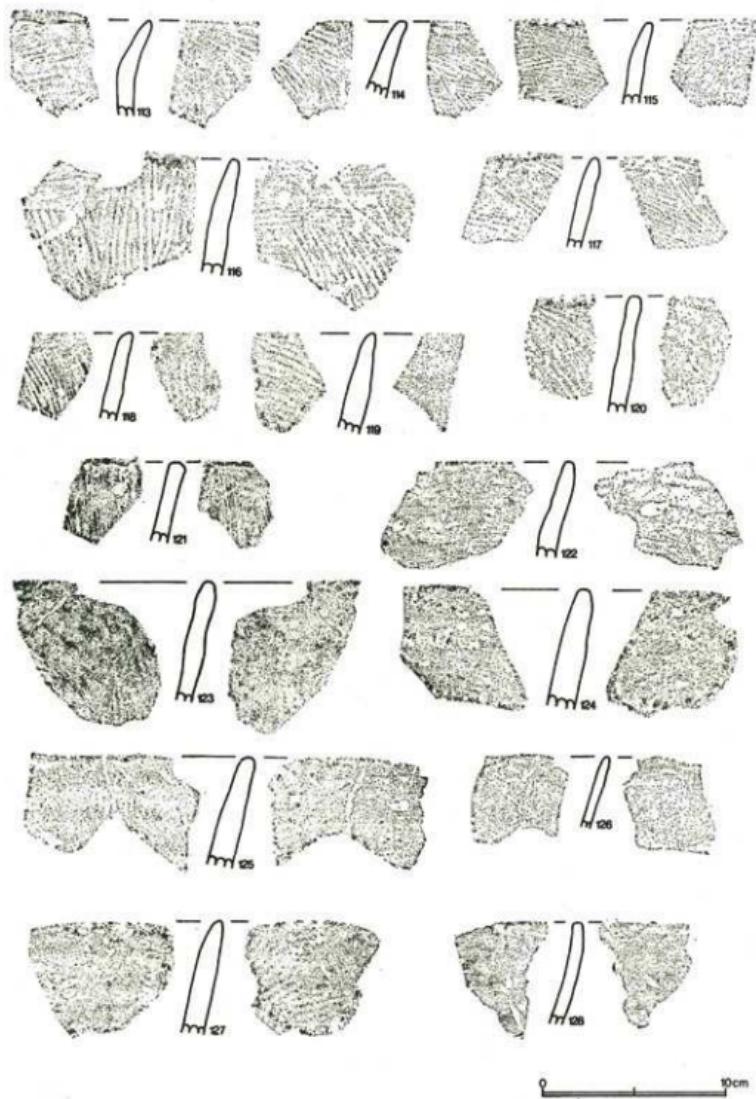
第79図 グリッド出土土器(4)



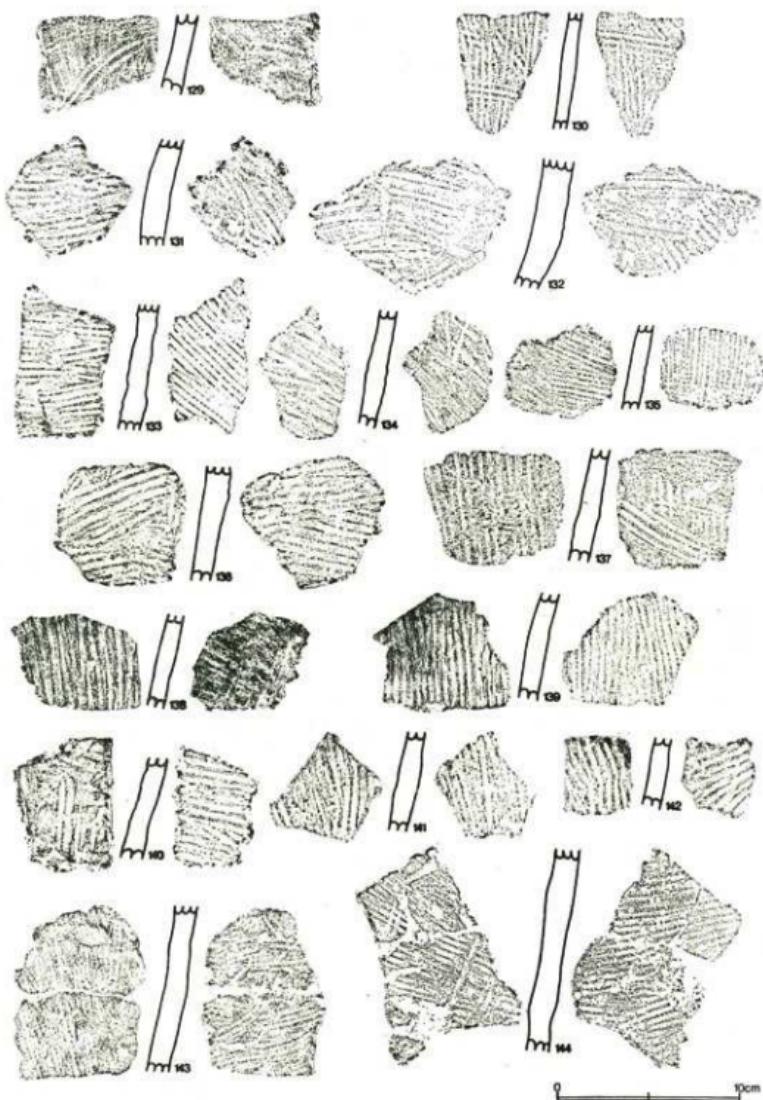
第80図 グリッド出土土器(5)



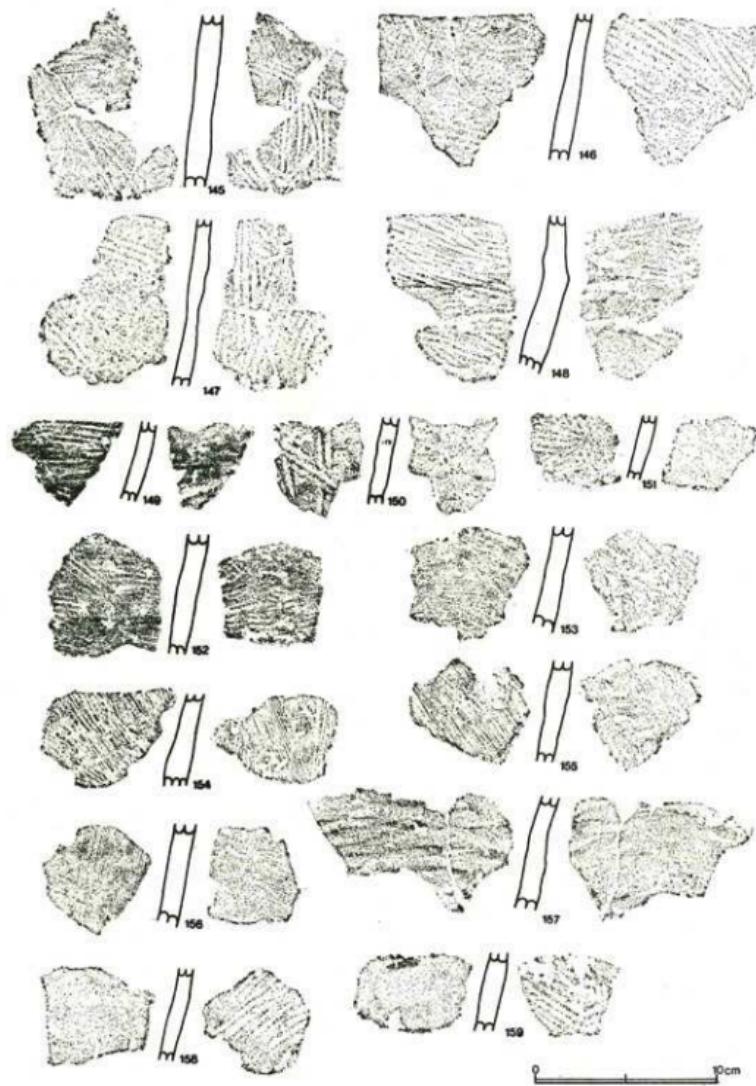
第81図 グリッド出土土器(6)



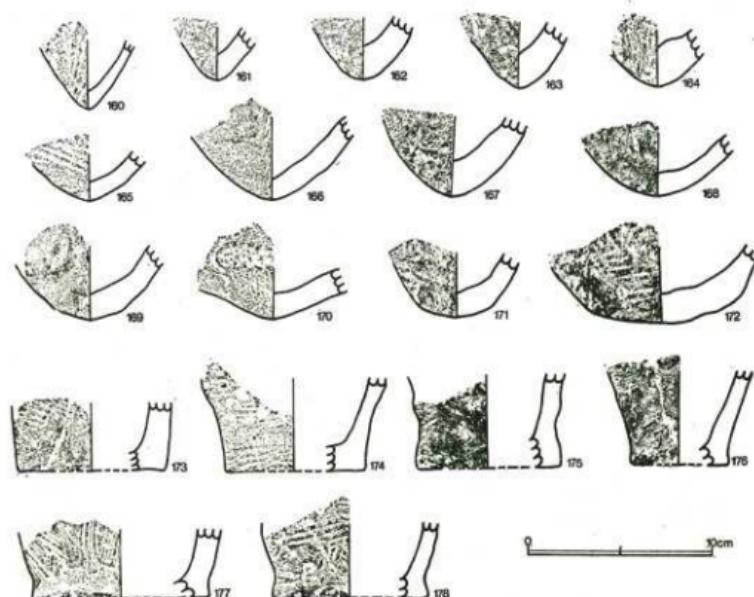
第82図 グリッド出土土器(7)



第83図 グリッド出土土器(8)



第84図 グリッド出土土器(9)



第85図 グリッド出土土器

る。色調は茶褐色が大半を占める。

胸部 (129~159)

器外面での条痕の走行は、口縁部が横走・斜走が一般的であるのに対して、胸部では斜走するものもあるが、その大部分は縦走する傾向が強い。斜走する条痕は、横走・縦走する条痕と雑然と組み合わされているものが多い。条痕の施文順位は統一性が認められない。

130は器内外面とも縦走・横走する条痕が認められ、その施文順位は縦走→横走である。132は底部に近い肉厚なもので、外面横走、内面は斜走・横走が組み合わされている。133は口縁部に近いもので、器外面横走、内面斜走する条痕が深く施文されている。136は括れ部であるが器内外面とも括れ部を意識してか斜走・横走と異なる条痕が施文されている。139は器内外面とも条痕が深く施文されている。143~152は器壁が充分乾燥した状態で施文されたもので、何れも内外面とも条痕の施文が浅い。148は括部片。括れ部を境に斜走・横走している。内面の条痕は僅かに観られる程度153~156は細い条痕が施文されている。154は底部に近い破片、器内外面とも斜走する細い条痕が雜に施文されている。157~159は器外面が擦痕、内面に条痕が施されたもの。胎土の繊維の含有量は、131、149に多量に含まれるが、他は総て口縁部同様に繊維は少なく、砂粒を多量に含み器面がザラついている。焼成は総体的に良好であるが、131、134は2次加熱を受けたと思われ脆いものもある。色調は茶褐色～黒褐色を呈するものが多い。

底部（160～178）

底部は80点程度出土しているが、2次加熱を受けてボロボロに崩れてしまうものが多く、図示し得たのは、尖底12点、丸底1点、平底6点の19点のみである。何れも条痕文のみで、文様を持つものはない。160は鋭角的な尖底で、器外面は尖底端部まで条痕が深く施文されている。内面には僅かに条痕が認められる。161～163、166～171は尖底端まで条痕が施文されず、擦痕が認められるものである。172は丸底を呈するもので、器外面には横走・斜走の条痕が雜に施文されている。内面は剥落が激しく不明である。平底のものも176を除いて、底端部まで条痕が施され、その走行は横走（173～175・178）と縱走（177）が観られる。内面は總て横走する条痕である。162～164・171の胎土には纖維が多量に含まれるが他のものは、少量の纖維と多量の砂粒を含有している。色調は赤褐色を呈するものが多い。

Ⅱ群

繩文時代前期前半に位置づけられる纖維土器群を本群とする。早期条痕文土器群とは異なり、遺跡南側緩傾斜面の2号住居跡周辺に特に集中して出土している。

1類（179～208）

花積下層式に比定されるものを本類とした総数175点である。文様構成によりa～d種に分類される。

a種（179～184） 肥厚した複合口縁上に、竹管によるジグザグの沈線が施文され、口縁下に燃糸の側面圧痕文が施文されたもの。179、178は別個体ではあるが、同じ文様構成を持つものである。口縁上には多截竹管によるジグザグな沈線、口縁下には、RとLの燃糸側面圧痕文が2条1単位に施文され、燃糸側面圧痕文間の隆帯には、竹管による刺突文が加えられている。181は179の胴部と思われ、燃糸側面圧痕文と隆帯上に刺突文が交互に繰り返されている。183、184には燃糸側面圧痕文が同心円状に施文され、以下隆帯を境に羽状繩文が観られる。器内面は丁寧に撫でられているが、施文はされていない。胎土には多量の纖維と砂粒を含み、器面はザラついている。181の焼成は良好で堅い土器であるが、他の焼成は不良で脆い。179、184は茶褐色、他は黒褐色を呈する。

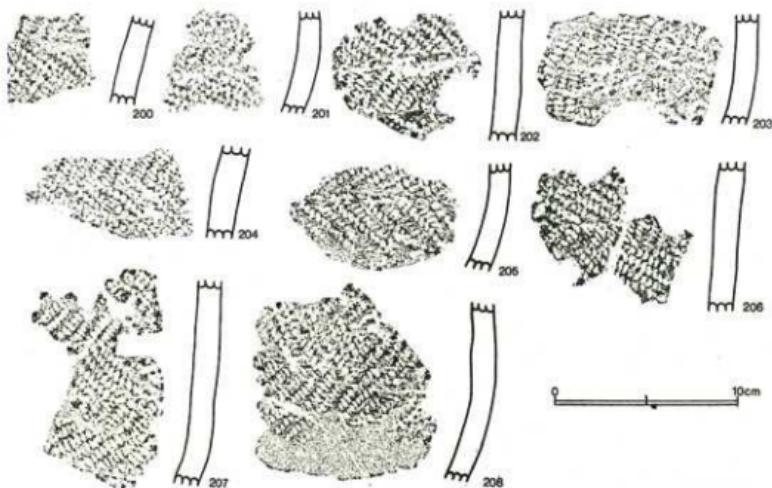
b種（185～190） a種同様に複合口縁上にジグザグの沈線、口縁以下に繩文が施文されたもの。口縁形態がa種とはやや異なり、口縁がきつく内反し、口唇部が薄く仕上げられている。口縁上の沈線は竹管で施文され、複合口縁端には刺突文が施されている。口縁下の繩文はきつく撚られたR L・L Rの原体で羽状を呈している。施文は何れも深い。胎土はa種よりも纖維の含有量は少ないが、砂粒は多量に含む。焼成は全体的に良好で、187が茶褐色、他は黒褐色を呈している。

c種（191、192） 複合口縁上に繩文、口縁下に刻み目を持つ隆帯で文様構成されるもの。口縁形態はa種と同様である。191の口縁上は幅の狭い羽状繩文、口縁下には2条の綾杉状の刻み目を持つ隆帯が観られる。内面の整形は丁寧に行なわれ滑沢であるが、施文はない。胎土はb種に近似し、纖維の含有量は少ない。焼成は191が良好で堅い土器、192は不良で脆い。色調は黒褐色。

d種（193～208） 繩文のみ施文されたもの。口縁部形態はa種と同様である。内面には施文は観られないが、整形は雜で纖維痕が顕著に認められる。複合口縁上の繩文は、羽状繩文ではなく斜繩文が雜に施され、口縁部下から胴部、底部に到るまで羽状繩文が割合雜に施されている。胎土に



第86図 グリッド出土土器10



第87図 グリッド出土土器

は多量の繊維を含み、焼成は不良で脆い土器である。色調は赤褐色を呈している。

2類 (209)

波状を呈する深鉢の波頂部、僅か1片である。器面の荒れが激しく剥落が著しいが、波頂部より長さ5cmの棒状貼付文が垂下している。貼付文の先端は薄く仕上げられ、波頂部より突出している。陵線も鋭く作り出されている。器肉は薄く、胎土には繊維が含まれない。焼成は良好で堅く、赤褐色を呈している。中越式類似の搬入品と思われる。

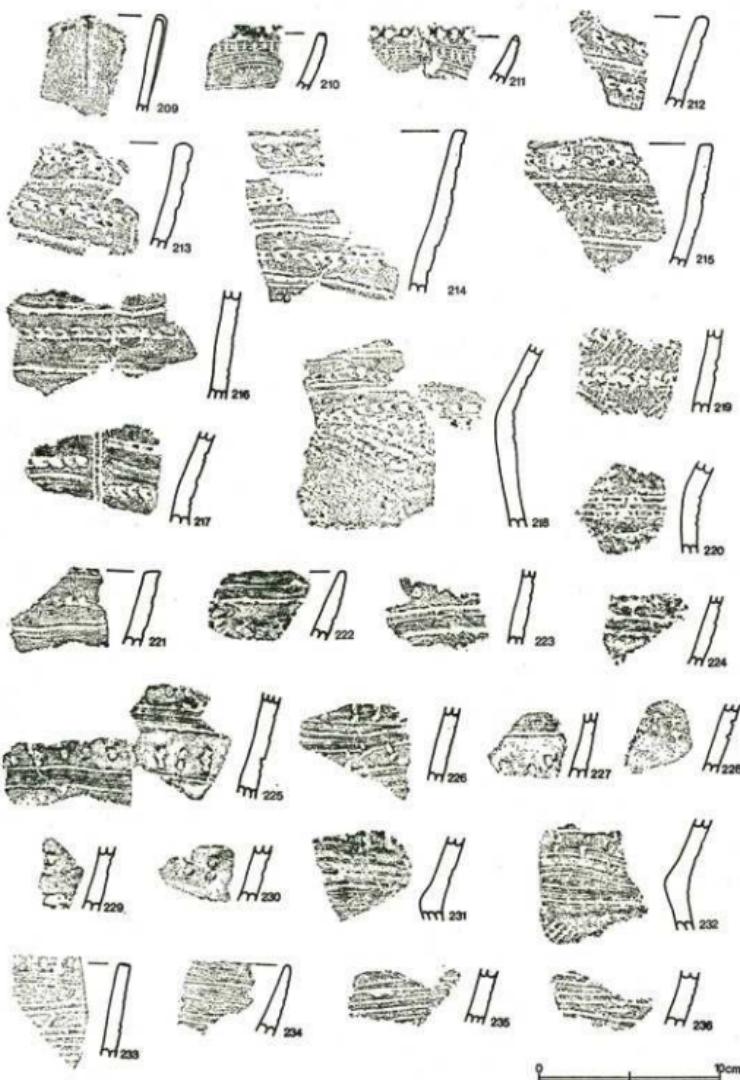
3類 (210, 211)

神之木式類似の土器であり、G7グリッドより2点出土している。210は器厚4~6mmと薄い土器で、やや外傾している。口唇部は平坦に整形され、竹管による刻み目が密に施されている。口唇直下に1単位4本となる櫛状工具による継ぎの押圧引状文が連続施文され、以下には同じ櫛状工具による波状の平行沈線文が施されている。211は口唇部形態がやや異なるが、文様構成は同一のものである。同一個体の可能性もある。胎土には繊維は含まれず、多量の砂粒を含み器面がザラついている。焼成は非常に良く堅い土器である。色調は赤褐色を呈している。

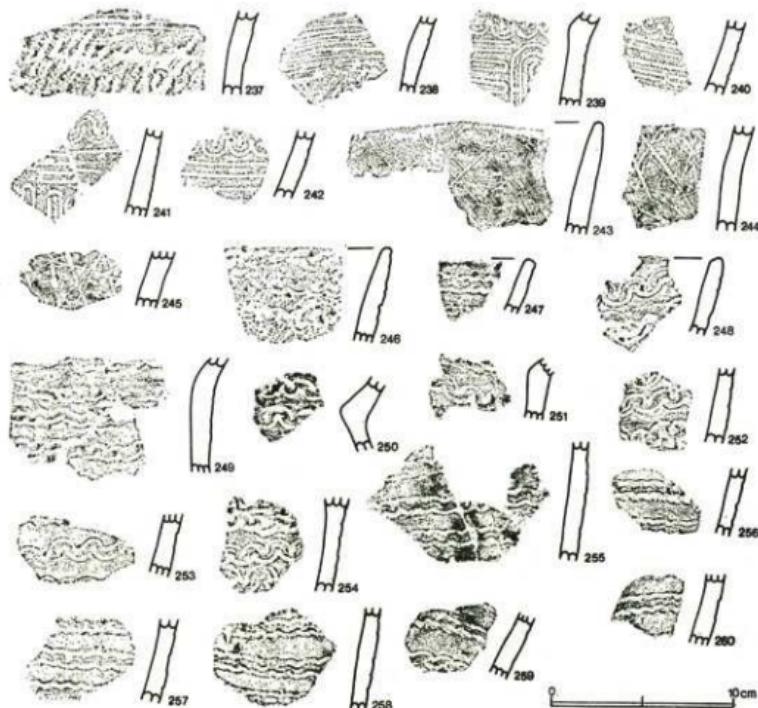
4類 (212~277)

黒浜式土器に比定されるものを本類とした。総数1664点が出土し、該期の土壤群が検出されたF7、G7・8、H7グリッドに集中している。

a種 (213~220, 261) 半截竹管による平行沈線文と爪形文の施文された土器である。口縁部形態は波状を呈するものと平縁を呈するものとがある。無文地上に施文された平行沈線文と爪形文で口縁部文様帯が構成され、洞部以下が繩文となるようである。212, 213は小波状口縁の波頂部。



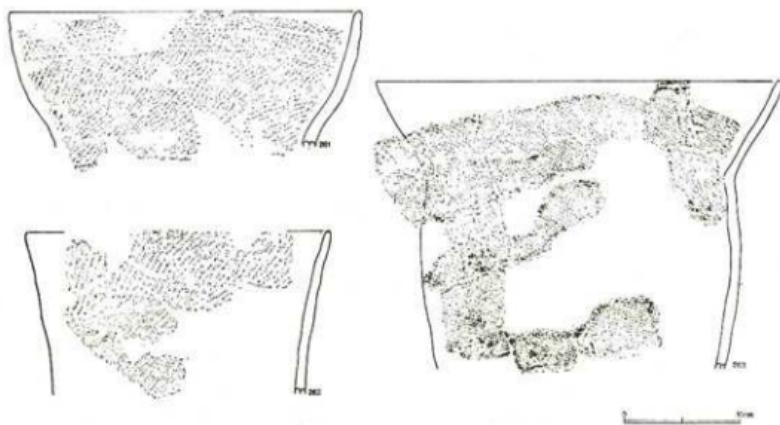
第38図 ガリヤF出土土器



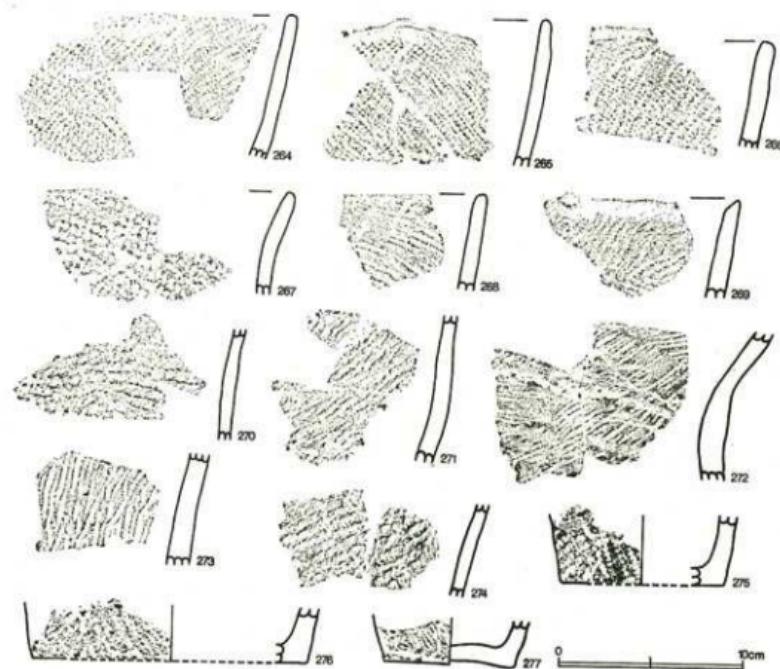
第89図 グリッド出土土器④

214、215は平縁の口縁部片。何れも爪形文、平行沈線文が交互に繰り返されている。217には平行沈線文による縦位区画が施されている。218はきつ外反する深鉢の括れ部。括れ部以下には捲りの綾い織文が雜に施され施文順位は爪形文、織文である。220は平行沈線文間に爪形文の施されたもの。總じて胎土には多量の纖維と砂粒を含み、器面が荒れている。焼成も不良で脆い土器である。色調は赤褐色～茶褐色を呈している。261は推定口径30.6cm、残高12cmを計り、口縁が緩く外反する平縁の深鉢口縁である。口唇部は丸く整形され、口縁に沿って雜な爪形文を施された平行沈線文と平行沈線文が並行して施され、頸部にも1条の平行沈線文が観られる。地文は原体L Rを利用し、口唇部より施文されてている。器内面は丁寧に撫でられているが、胎土に多量の纖維を含むため空洞が目立つ。焼成は不良で脆い土器である。赤褐色を呈し、一部黒斑も観られる。

b種（221～232） 無文地上に半截竹管による平行沈線文と列点状刺突文で口縁部文様帯が構成され、胴部以下に織文が施される土器。器形はa種同様に口縁部がきつ外反する深鉢を呈するものと思われる。口縁部は平縁のみ認められ、口唇部は221が平坦に、222は丸く仕上げられている。



第90図 グリッド出土土器片



第91図 グリッド出土土器(6)

平行沈線文間に施される列点状刺突文は、多截竹管によるものと思われ、何れも「く」の字状器壁に対して深く施文されている。内面の整形は、丁寧に撫でられているが、胎土に多量の纖維と砂粒を含む為ザラついている。焼成は良好で堅い土器が多く、色調は茶褐色～黒褐色を呈している。

C種（233～238） 平行沈線文で文様帯が構成される土器である。233は平坦に仕上げられた口唇上に竹管の背側を利用した刻み目が施され、口縁に沿って平行沈線が4条引かれている。237、238には頸部以下に施される繩文が観られる。内面の整形は良好である。胎土には多量の纖維と細かな砂粒を含み、焼成不良である。色調は黒褐色を呈している。

d種（243～245） 沈線で格子状文が施文された土器。僅か3片である。243は緩い波状を呈する口縁部、無文地上に格子状文が浅く施文されている。内面は非常に丁寧に磨かれ滑沢である。胎土には多量の纖維を含み、焼成も不良である。赤褐色を呈している。

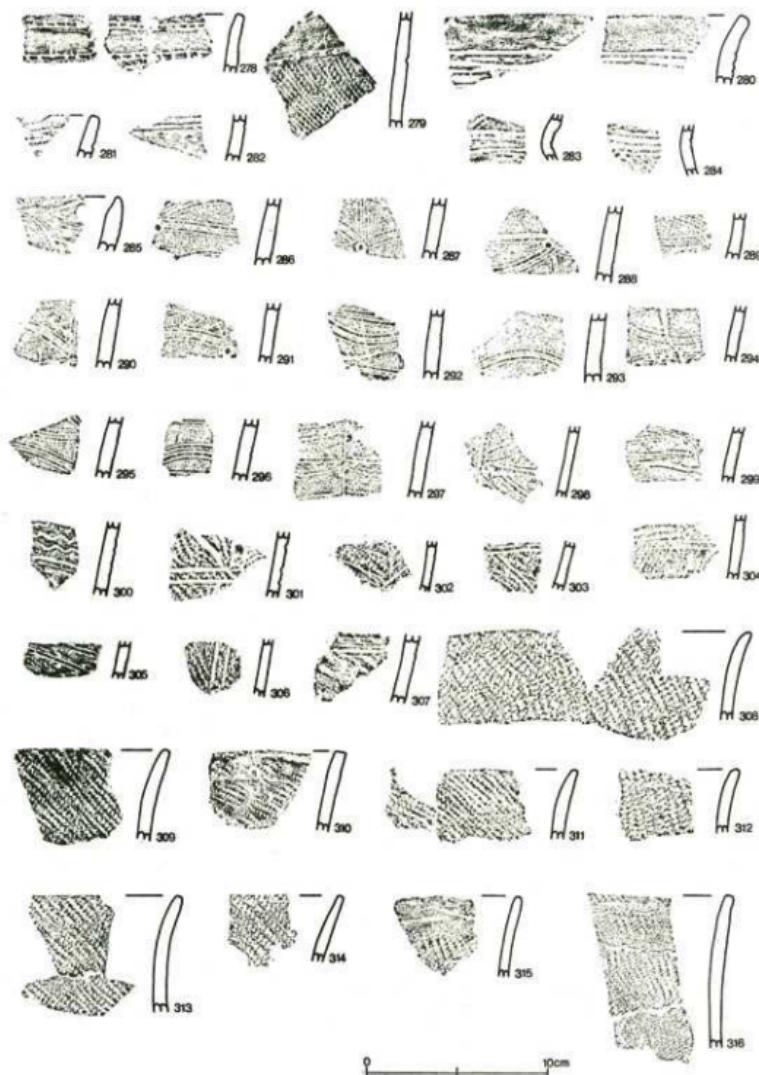
e種（239～242） 半截竹管による平行沈線文とコンパス文で文様構成される土器。4点出土している。239は頸部にコンパス文が巡り、3条の平行沈線文間に弧状を呈する平行沈線文が描かれている。241は2条の平行沈線文を境にコンパス文、縦位の平行沈線文が施されている。總て胎土には少量の纖維と多量の砂粒を含み、表面が荒れている。焼成は良好で堅い土器である。色調は茶褐色を呈している。

f種（246～260） 半截竹管によるコンパス文で文様構成されるもの。コンパス文下に地文の無いものが大部分を占め、繩文の地文を持つものが1点観られる。器形は判然としないが、口縁部がやや外反する深鉢となるものと思われる。246は繩文を地文とする唯一のもので、原体は不明である。コンパス文は口唇部直下より3条認められ、何れも雜な施文である。無地文上にコンパス文が描かれたものには、コンパス文の弧が大小2種類存在している。両者とも施文は雜であるが、特に弧の小さいものに雜な施文が多い。胎土はe種に近似し、纖維の含有量は少ない。焼成は良好で堅い土器である。茶褐色～赤褐色を呈している。

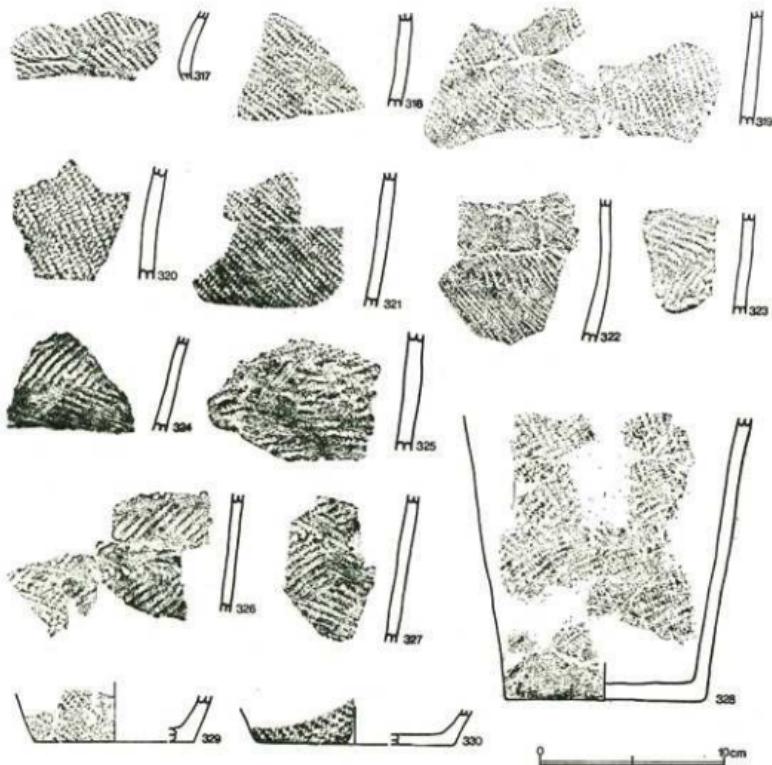
g種（262～277） 繩文のみ施文された土器である。262は推定口径26.5cm、残高18cmを計る口縁部が極く外傾する深鉢である。0段多条のLrが刻み目を持つ口唇部直下より雜に施文されている。纖維を多量に含み、器壁に空洞が目立つが、内面は良く磨かれている。焼成は不良で脆く、赤褐色を呈している。263は推定口径35.4cm、残高24cm、口縁部がきつく外反する深鉢である。口唇部は平坦に仕上げられ、器内面は丁寧に撫でられている。口縁部に僅かな無文を残し、附加条のRL+Lの繩文が全面に浅く施文されている。胎土・焼成とも262に近似し、茶褐色を呈する。264～269は何れも波状口縁を呈する深鉢。口縁部が僅かに外傾するものが多い。繩文の節が概して大きく、器壁がやわらかいうちに施文している。270～274は繩文のみの胴部片。271、274は0段多条、272、273は無節の繩文が施文されている。總て胎土に多量の纖維を含み、焼成は不良で脆い土器である。267、269は黒褐色、他は赤褐色を呈する。275～277は底部片、277はやや上底を呈している。底部端まで繩文が施されるが、その施文は雜である。

IV群（278～328）

前期後半の諸礎a式土器に比定されるものを本群とした。2号住居跡の位置するG7、H7グリッドに特に集中し、総数649点出土している。



第92図 グリッド出土土器類

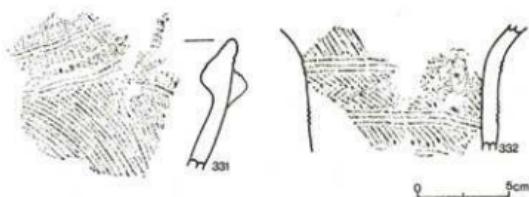


第93図 グリッド出土土器48

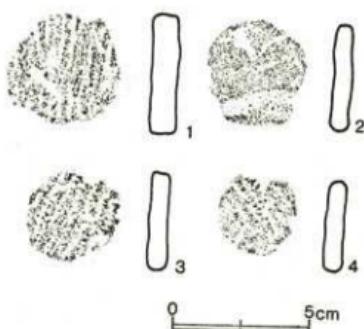
a種(278, 279) 爪形文を持つ土器、2点出土している。278は平縁の深鉢口縁部、無地文上に2条の爪形文が口縁に沿って巡る。279は繩文地に爪形文で幾何学的なモチーフを描いている。単節R Lの繩文を器壁が充分乾燥してから施文している。器面調整は丁寧に行なわれているが、胎土に細かな砂粒を多量に含み、器面はザラついている。焼成は良好で堅い土器である。赤褐色を呈している。

b種(280～282) 無地文に平行沈線文が単純に横走するいわゆる横走平行沈線文を持つもの。280は平縁を呈する深鉢の口縁部。口縁部に幅2cmの無文帯を残し、半截竹管による平行沈線文が深く施文されている。胎土は非常にきめ細かな粘土が使用され、焼成も良好で堅い。赤褐色。

c種(283～307) 該期の特徴的文様要素である肋骨文を主要モチーフとするもの。縦位区画として垂下する平行沈線文と肋骨文の交点には円形刺突文が加えられている。285は内削ぎ状を呈する唯一の口縁部で肋骨文が雜に施文されている。286～296の胴部は、半截竹管による2条単位の平



第94図 グリッド出土土器片



第95図 グリッド出土土製円板

もしっかりとしている。胎土は砂粒を多量に含み、器面がザラついているが、器面の調整は丁寧に行なわれ、特に内面は滑沢である。焼成も非常に良く堅い土器である。色調は茶褐色～赤褐色を呈している。308～314は口唇部より繩文が施文されるもの。315は幅2cm程度の無文帯を残し、316には2条の縹緥文が観られる。317～322は単節RLの繩文が密に施文された胴部片。323、324、327は無節の繩文で羽状繩文が構成されている。328～330は底部端まで繩文が施文されている。底部の整形も丁寧に行なわれ平坦である。

V群 (331, 332)

繩文時代中期初頭の五領ヶ台式土器に比定されるものを本群とする。E 3・4 グリッドから各1点づつ出土している。

331は口縁部が肥厚し内傾し、波状口縁を呈する深鉢の波頂部、波頂部下には梢円形の突起がつけられている。地文に斜走する集合沈線が施され、口縁及び口唇内面には、3条の平行沈線が口縁に沿って巡り、口唇部には撚糸Rの圧痕文が施され、何れも丁寧に施文されている。内面整形も丁寧に施され滑沢である。胎土は細かな砂粒を含むが緻密な粘土を使用し、焼成も良好で堅い土器である。赤褐色を呈している。

332は推定底径11.6cmの小形深鉢の胴部である。竹管による細かな矢羽状文を地文に持ち、頸部、胴部に2条の平行沈線が描かれている。頸部には梢円形の貼附文が観られる。胎土は331に近似し、

行沈線で、肋骨文が描かれている。何れも施文は浅い。297の縦区画は1条の沈線で描かれている。301～307は地文に繩文を持つもので、粒の小さな単節RLを原体としている。總て胎土はa種に近く、細かな砂粒を多量に含み器面は荒れている。焼成は非常に良く、堅い土器である。色調は茶褐色ないし赤褐色を呈している。

d種 (300) 波状平行沈線文を持つ土器で1点観られる。無文地上に竹管による波状平行沈線文と平行沈線文が描かれている。胎土は緻密なものが用いられ、焼成はややあまく脆い。赤褐色。

e種 (308～330) 繩文のみ施文されたもの。308～316は深鉢の口縁部であるが、總て平縁を呈し波状口縁のものは見あたらない。

繩文原体は単節RLの細い燃りが多く、施文

細かな砂粒を含むが緻密な粘土を用い、焼成も良く堅い土器である。色調は赤褐色。

土製円板（第95図）

D 5、E 6・7、F 4 グリッドから1点づつ出土している。1は直径42cmの不整円形、条痕文の破片を利用したもので、周囲を丁寧に整形している。2も擦痕文土器を利用したもので、径3.4cmの不整円形を呈し、周囲の整形は雑でやや角ばっている。3、4はほぼ円形を呈するもの。黒浜式土器を利用し、周囲の整形も丁寧である。3は径2.8cm、4は径4.2cmを計る。

II 石器

緑山遺跡からは、打製石斧、石鎌など欠損品も含めて総数130点ほどの石器が出土している。

数量的には、打製石斧が65点と最多数を占め、石鎌・磨石・凹石・削器と続く。出土状況は第96図の通りであるが、遺跡の南側緩傾斜面の各グリッドに集中する傾向が認められる。

以下各石器別に記述して行くが、法量・石材等は表を参照されたい。

石匙（第93図3）

片側端部を欠損するが、小形の横形石匙である。横長の剥片を使用し、片面には大きく主剥離面を残している。刃部は主剥離面から細かく調整され、薄く作り出されている。つまみの両端部はやや深く抉り込まれきちんと作り出されている。

石鎌（第98・99図）

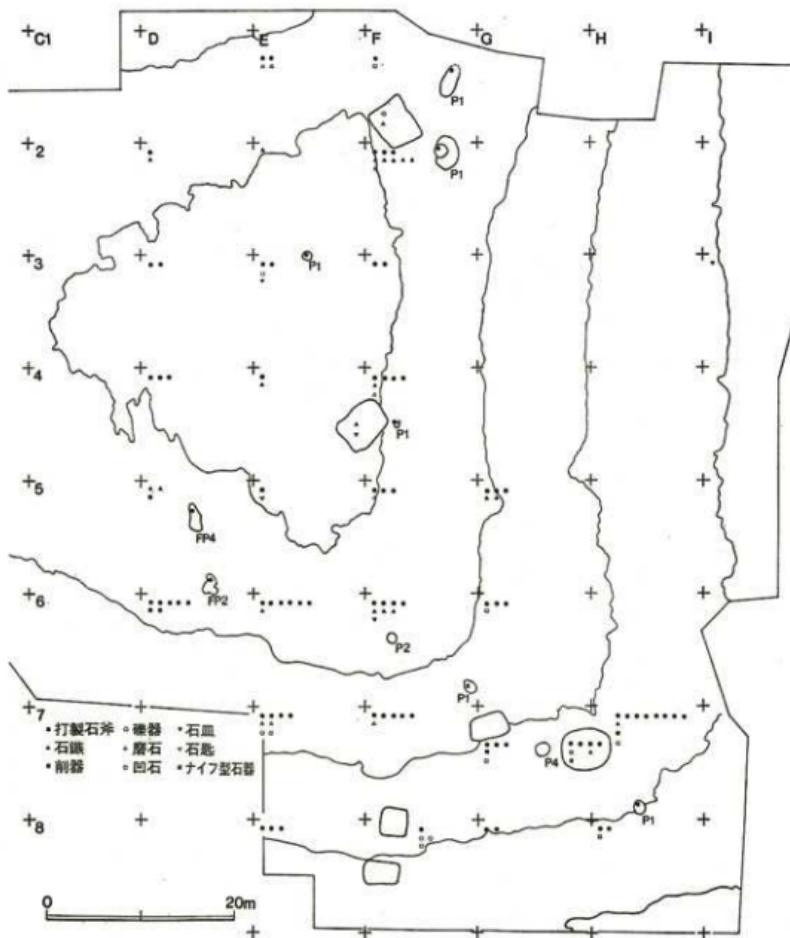
18点出土しているが、完形品6点、破損品12点で、特に先端部を欠損したものの比率が高い。最大3.2+αcmから最小1.4cmのものまであるが、2~12・14・17~19の様に、2cm前後で側縁が直線をなし、基部の抉りの浅い二等辺三角形を呈するものが主体を占めている。側縁の剥離は両面から細かく行なわれ薄く仕上げられている。抉りの剥離も両面より行なわれているが、抉りの深いものに較べると粗い加工である。15も抉りの浅いものであるが、両側縁がやや丸味を帯び、片面に主剥離面を残している。13は二等辺三角形を呈し、抉りの深いもので、やや分厚い剥片が利用されている。20はやや丸味を帯びた正三角形を呈し、抉りの深い最も小形のもの。側縁・抉りとも両面より剥離が行なわれている。21は抉りを持たない平基のもので、三角形鎌とされているものである。やや肉厚な剥片に両面より剥離が加えられているが、作りが雑なものである。

削器（第100図1~5）

2・5は薄い剥片、1・3・4はやや厚手の剥片を母材としているが、鋭利な側縁を持つ剥片を利用したものと思われ、調整剥離は刃部のみ行なわれている。刃部は總て弧状を成している。3は片側に自然面、他は両面に主剥離面を残している。

礫器（第100図6~8）

形態の異なる3点の礫器が出土している。6はやや湾曲した礫を母材とし、片面は何ら調整加工がされず自然面を残している。主剥離面側は、三方の側縁より粗い調整剥離が加えられ、鋸角で中央が僅かに尖る刃部の調整剥離も粗く施されている。7も片面に自然面を残し、側縁及び刃部の調整剥離は非常に粗い。8は薄手の円礫を利用したもので、両面に大きく自然面を残している。側縁は、片面より粗く調整され、刃部は両面より細かな調整剥離が加えられ、割合薄く作り出されてい



第96図 石器分布図

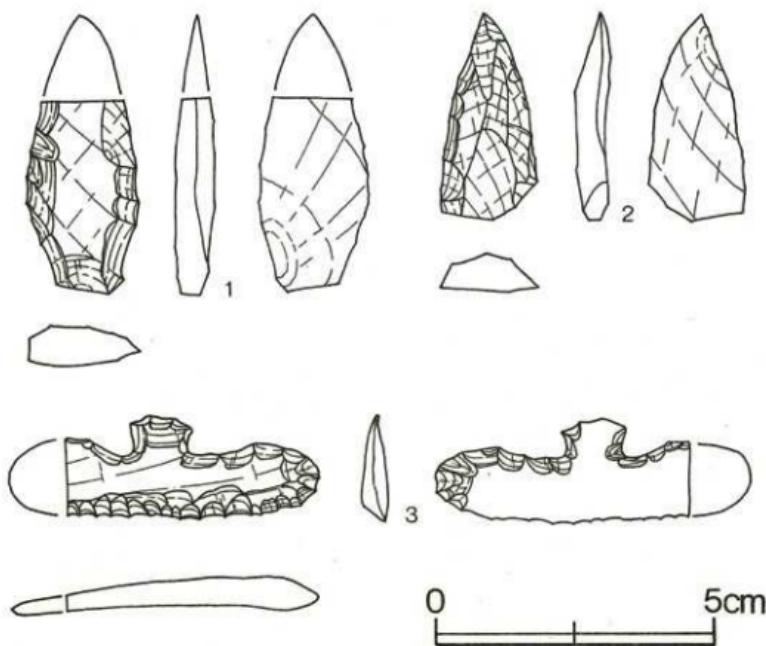
る。

打製石斧（第101～109図）

緑山遺跡出土石器の主体を占め、総数65点出土し、図示したものが全てである。形態、自然面の有無、断面形態により分類し、記述する。

形態

I 刃部に最大幅を持ち、側縁が直線的な腰形。



第97図 グリッド出土石器(1)

- I 刃部に最大幅を持ち、側縁が曲線的な擦形。
- II 側縁が曲線的、脛部に最大幅を持つ短冊形。
- IV 両側縁が平行な短冊形。
- V 脣部に抉りのある分鋸形。

自然面の有無

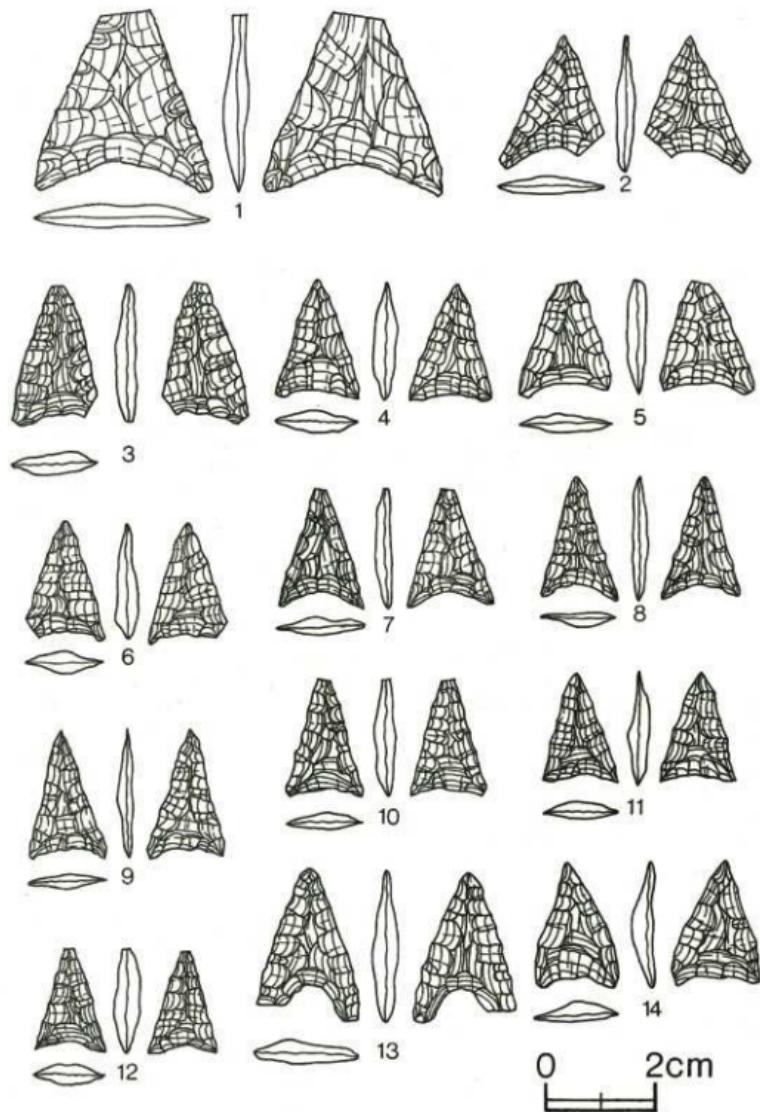
- A 残さない。
- B 片面に残すもの。
- C 両面に残すもの。

断面形態

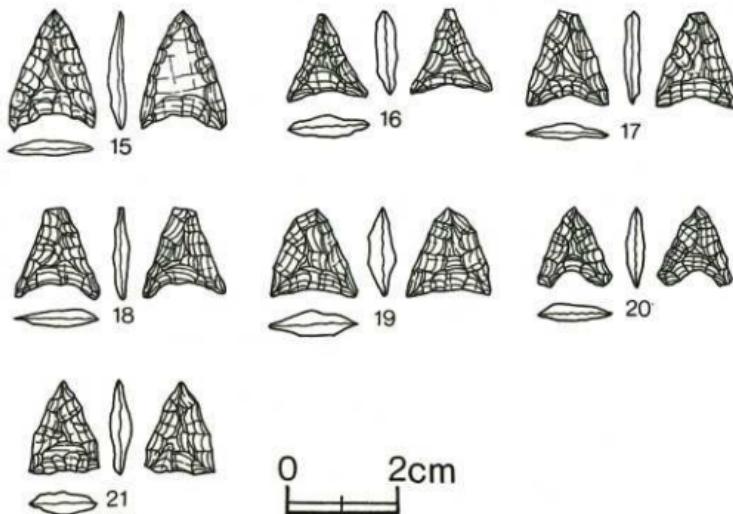
- 1 肉厚で三角形状のもの。
- 2 薄く扁平なものの。

I-A-1類 (第101図1)

両面とも大きく主剥離面を夷し、側縁は両面より粗い細部調整が加えられている。刃部片面は主剥離面を利用し、他面には細部調整が加えられ薄く作り出されている。



第98図 グリッド出土石器(2)



第99図 グリッド出土石器(3)

I-A-2類 (第101図2~4)

2は緩く湾曲した剥片を利用し、片面には大きな主剥離面を残している。側縁の調整剥離は粗く両面より加えられている。刃部の調整も粗いが、薄く作り出されている。3は両面に主剥離面を大きく残す。側縁の調整は片面にのみ加えられ、刃部の調整剥離も粗い。4はやや小形のもの、側縁の調整剥離は片面に細かく行なわれ、他面には大きく主剥離面を残している。刃部の細部調整は両面より細かく加えられている。

I-B-1類 (第101図5・6)

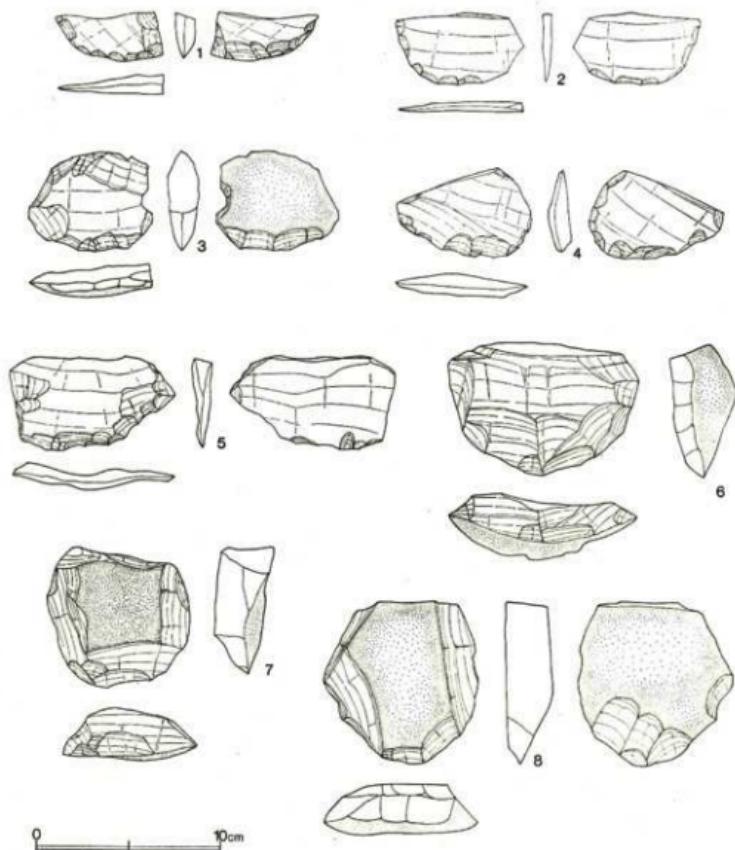
5は両面に粗い剥離痕が著しく観られ、側縁部の細部調整も行なわれているが粗い。頭部は両面より粗い調整加工が加えられ薄く尖っている。刃部は間近に自然面を残し、磨耗が著しい。6は片面に集中して調整剥離が加えられている。刃部は片面を母材の疎のカーブを利用し、他面に調整剥離を加え薄く作り出している。

I-B-2類 (第101図7・8)

7は片面の両側縁に細部調整が細かく加えられ、刃部は湾曲する程に磨耗が激しい。頭部も片側より調整されている。8は片面に主剥離を残し、側縁は両面より細部調整が加えられている。刃部の調整は片側から加えられているが、磨耗が著しい。

I-C-2類 (第105図33~39)

細長く扁平な自然疎に僅かな調整剥離を加えた打製石斧。雑な作りのものが多い。33は長さ15.9cmの細長い自然疎の一端を加工して鋭角な刃部を作り出している。34・35は三角形状をなす疎の一

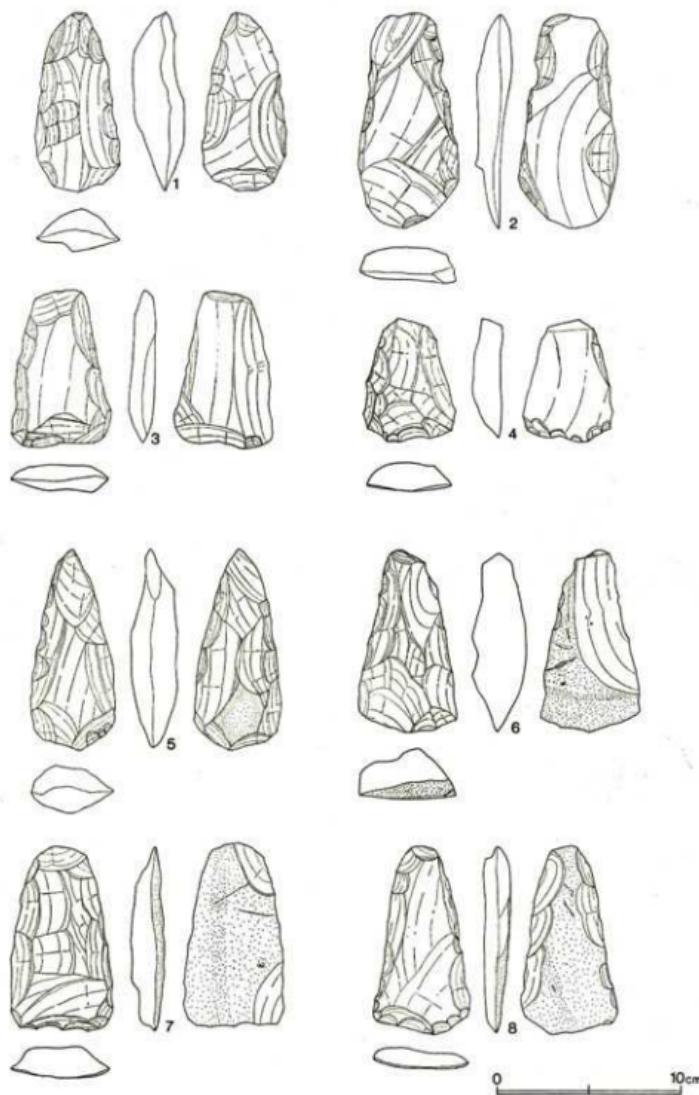


第100図 グリッド出土石器(4)

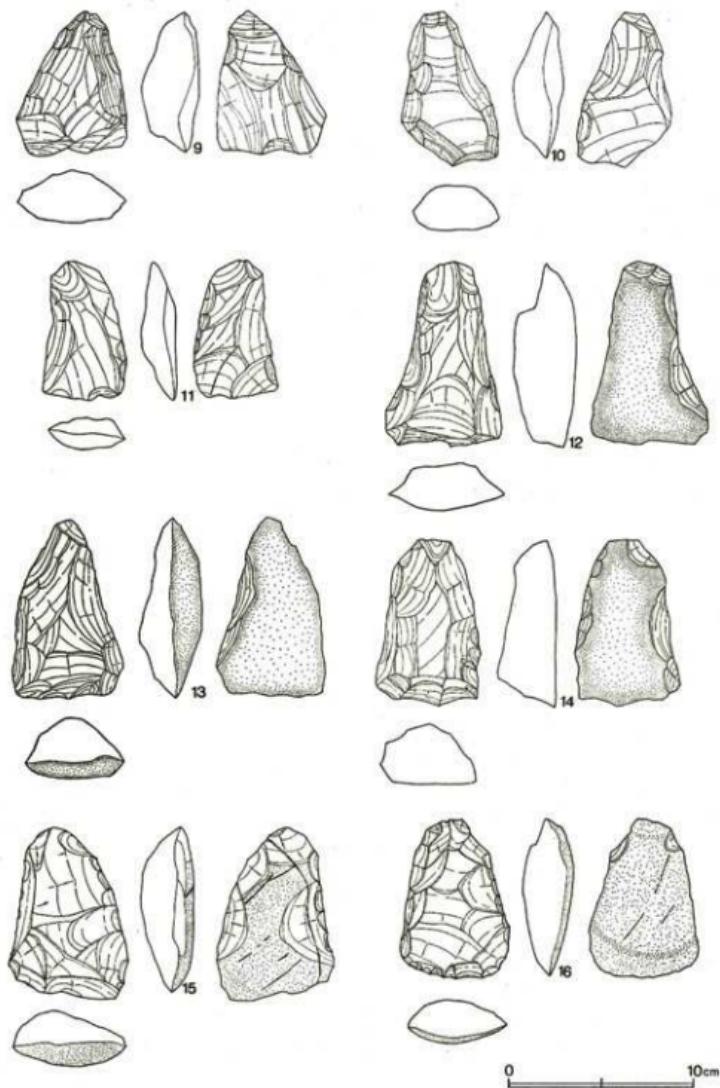
端に両面より細部調整を加え刃部のみ作り出している。34の刃部は磨耗が著しい。36はこの種のものでは作りの良いもの、片面に主剥離面を大きく残す。側縁は両面より、刃部は片面より細部調整が加えられ、刃部の磨耗が著しい。37は長さ 7.9cm の小さな扁平疊の一端を両面より細部調整を加えて鈍角の刃部を作り出している。38・39は側縁・刃部とも粗い調整が加えられた粗雑な打製石斧。

Ⅰ-A-1類 (第102図 9~11)

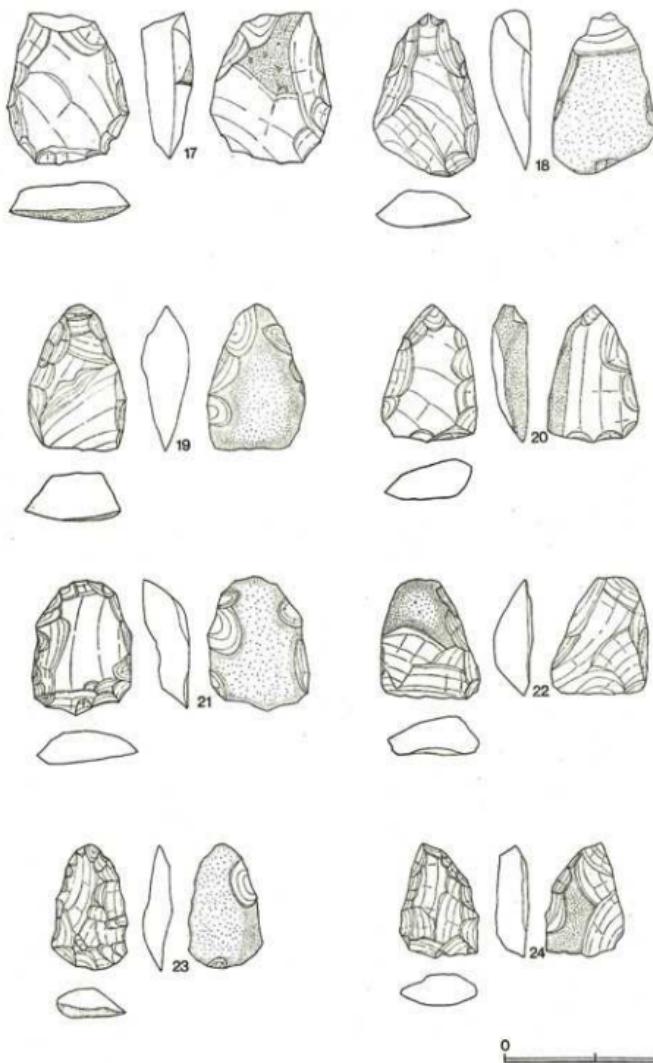
両面に大きな主剥離面を残し、細部調整も粗い雑な作りのものである。總て刃部の磨耗が激しい。9・10は片面にのみ細部調整が加えられ、他面は主剥離面を残している。刃部の磨耗が特に著



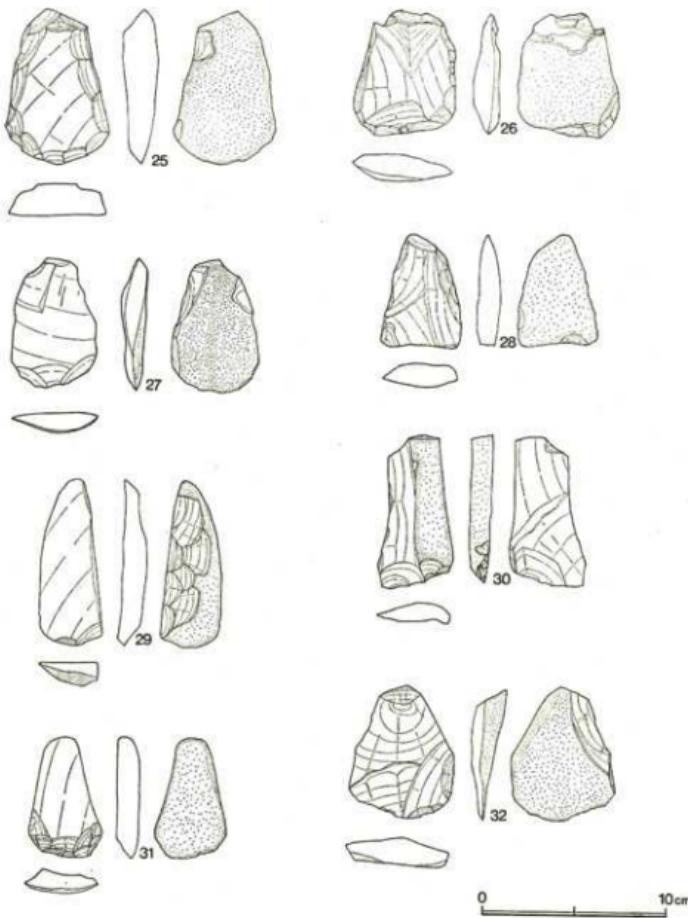
第101図 グリッド出土石器(5)



第102図 グリッド出土石器(6)



第103図 グリッド出土石器(7)

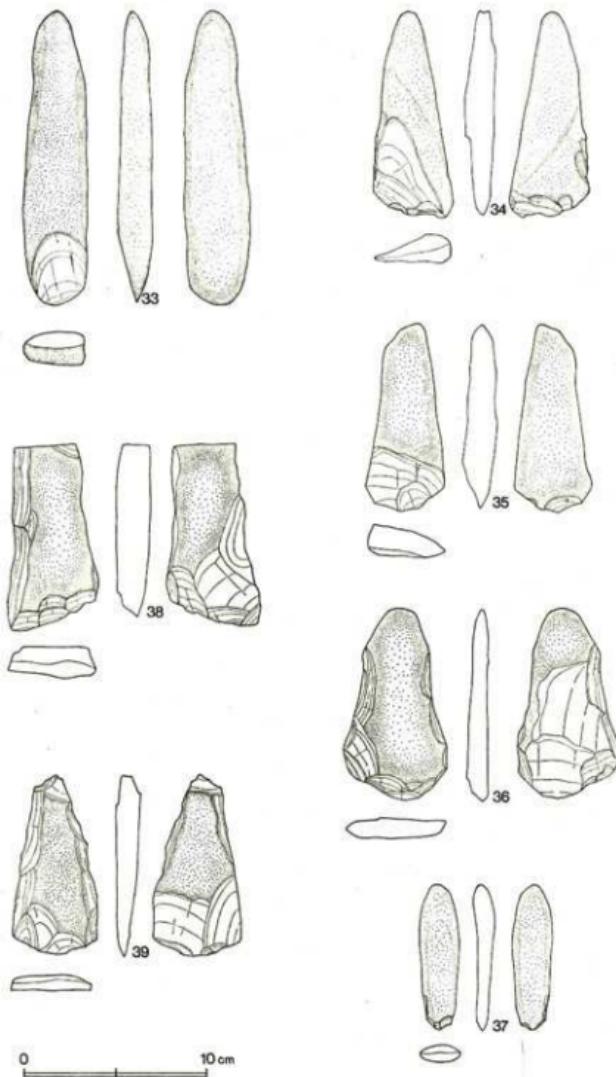


第104図 グリッド出土石器(8)

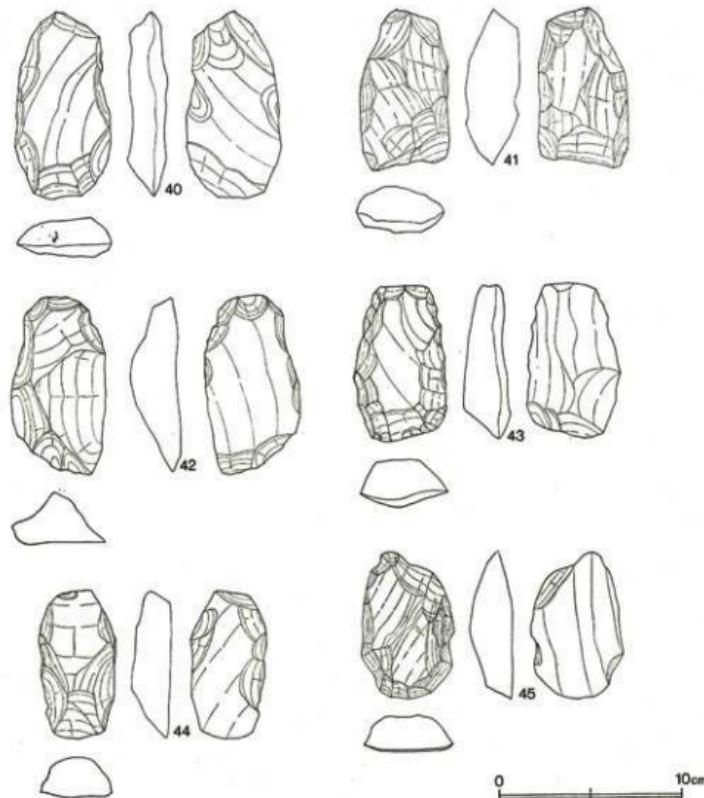
しい。11はやや小形の打製石斧。刃部の細部調整は粗雑であるが、割合薄く作り出されている。

I—B—1 類 (第102図12~16、第103図17~24)

打製石斧中の主体を占める13点が出土している。細部調整が片面に集中し、他面自然面側には細部調整があまり加えられず、刃部も鈍角に作り出されたものが多い。12~14は細部調整の加えられた面にも大きく主剥離面を残し、自然面側の調整は、側縁部にのみ加えられている。刃部の細部調整は自然面側から加えられ、12・14は磨耗が激しい。15・16は側縁の細部調整が割合丁寧に加えられ



第105図 グリッド出土石器(9)

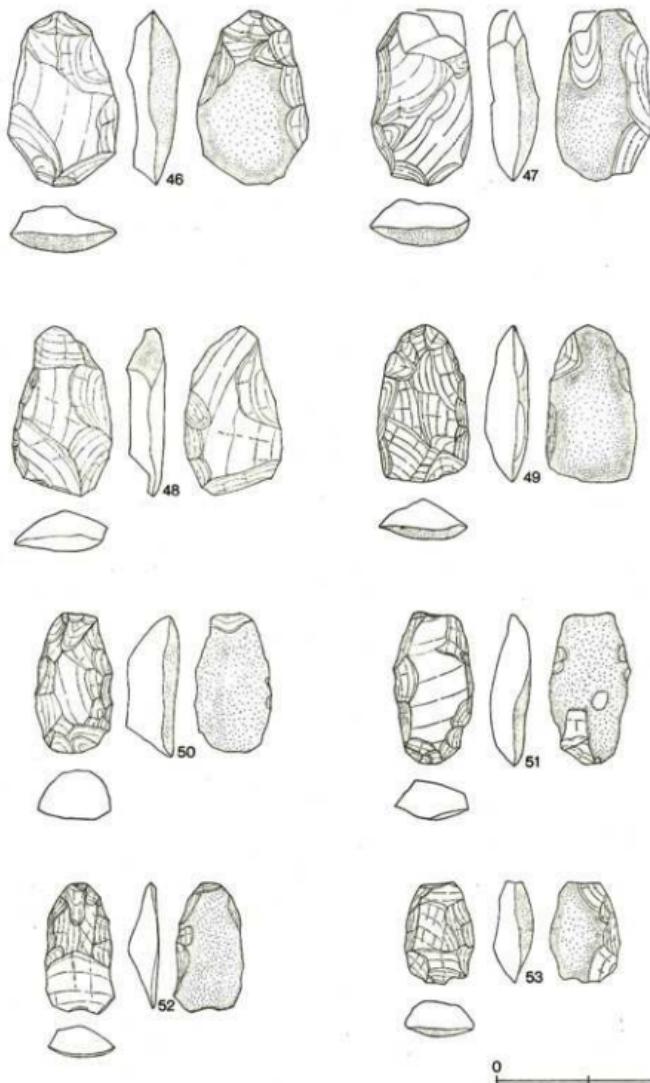


第106図 グリッド出土石器

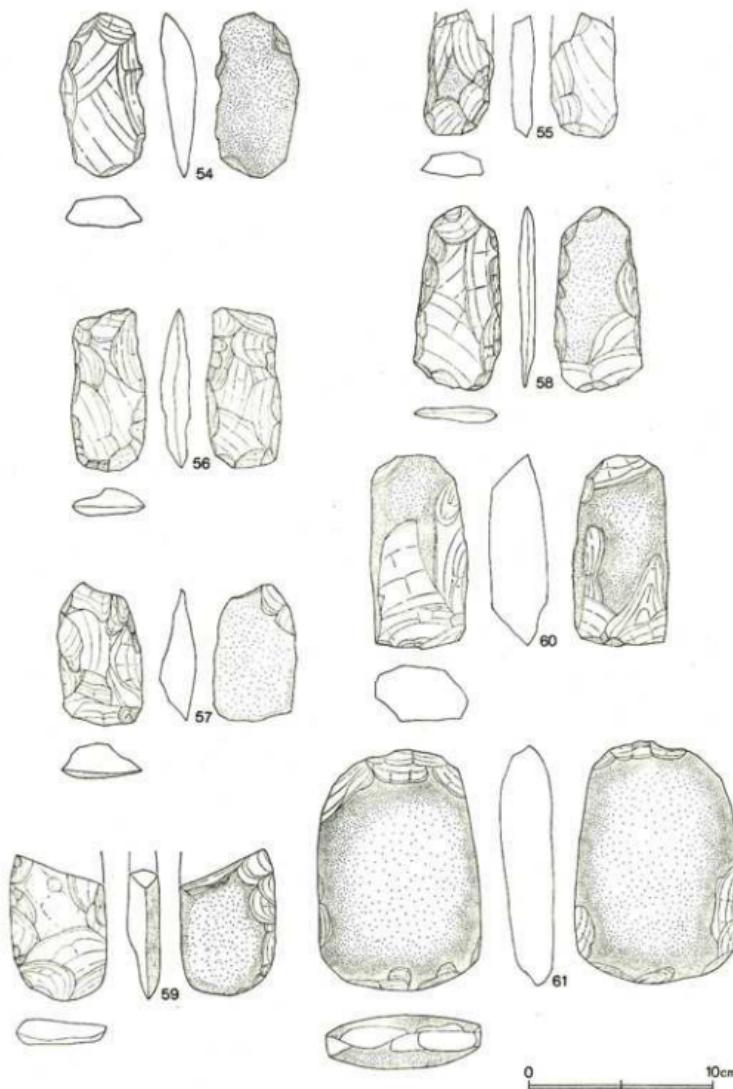
ている。刃部は自然面側からのみ調整され作り出されている。17・20は両面に粗い主剥離面を残し、側縁の調整も両面より加えられている。刃部は片面に主剥離面を利用し、細部調整は加えられていない。17の刃部は磨耗が激しい。18・19は側縁の細部調整が細かく行なわれ、刃部の調整加工自体は粗く行なわれているが、鋭角的に作り出されている。21は側縁が両面より細かく調整剥離され、刃部の磨耗が著しい。22は全体的に粗雑な作りのもので、側縁に僅かな細部調整が加えられた程度である。23・24はこの種で小形のもの。主剥離面側は、側縁、刃部とも細かな調整剥離が加えられているが、自然面側には粗く加えられている。24の刃部は磨耗が観られる。

【一B】2類 (第104図25~32)

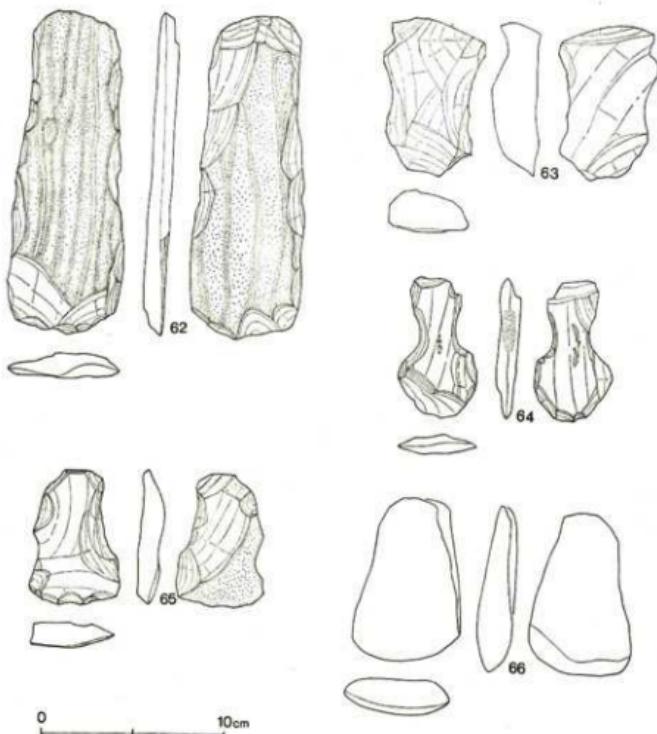
総て片面に自然面を残す薄手の剥片を母材とし、細部調整が加えられた小形の打製石斧。25~28



第107図 グリッド出土石器⑩



第108図 グリッド出土石器

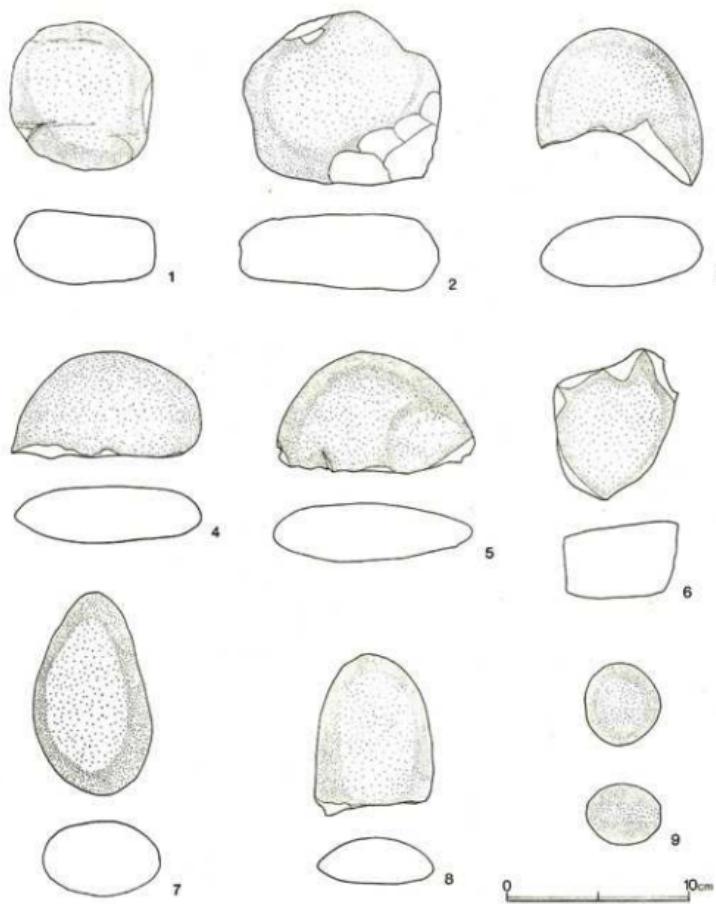


第109図 グリッド出土石器等

は自然面側にはほとんど細部調整が加えられないが、主剥離面側の側縁及び刃部には細かな調整加工が加えられている。27の刃部調整はやや粗く、28の刃部は磨耗が激しく、ほとんど平坦になっている。29はやや湾曲した剥片を使用し、自然面側に細かな側縁調整が加えられ、主剥離面側の細部調整は、僅かに刃部に加えられている程度である。30の側縁調整は自然面側のみ粗く加えられ、刃部は両面より調整され、薄く鋸く作り出されている。31は主剥離面側の刃部のみ細部調整が加えられ、側縁調整は両面とも何ら加えられていない。32は主剥離面側の頭部に打撃面が認められ、全体の細部調整は粗いが、刃部が非常に鋸く作り出されている。

III-A-1類（第106図40～45）

細部調整が片面に集中して加えられ、他面には大きな主剥離面を残し、比較的作りが雑なものが多いた。40は横長の剥片を利用し、側縁の細部調整は片面に集中して粗く行なわれている。頭部、刃部は両面より調整されているが、その加工は粗い。41は細部調整が両面より加えられ、刃部の磨耗

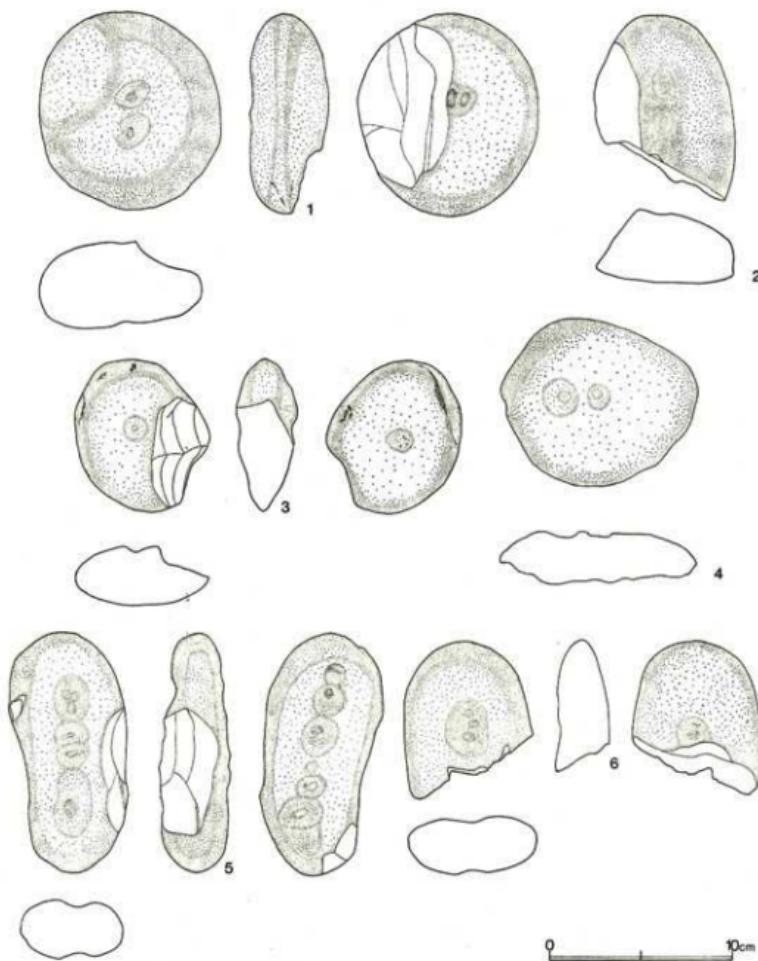


第110図 グリッド出土石器40

が著しい。42は湾曲した横長の剥片を使用し、側縁の細部調整は粗く両面より加えられている。刃部の調整は粗いが、薄く作り出されている。43・45は側縁、刃部の細部調整が片面にのみ細かく加えられ、他面は主剝離面がそのまま残る。44は側縁が両面より、刃部が片面より調整されている。

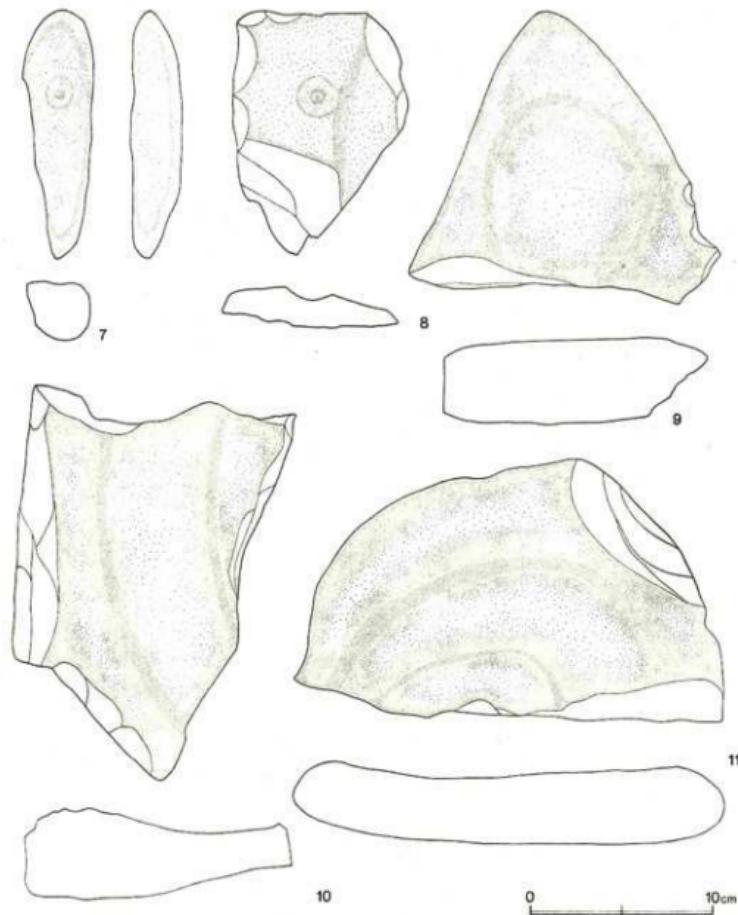
■—B—2類（第107図46～53）

小形で丁寧な作りのものが多く、8点出土している。46は側縁の細部調整は自然面側に集中して細かく加えられ、刃部の片面は自然面そのものを利用している。刃部の調整は粗く鈍角に作り出さ



第111図 グリッド出土石器

れている。47は頭部を欠損し、全体的に粗雑な作りである。48は頭部に自然面、両面に粗い主副面を残している。側縁、刃部の作りも雑で、刃部は破損が激しい。49・50は自然面側の細部調整は僅かに側縁に加えられた程度であるが、他面には細かな細部調整が丁寧に加えられている。49の刃部は鋭角的である。51は縦長の剥片を使用し、片面の側縁部は細かく調整され、刃部のみ両面より



第112図 グリッド出土石器類

加工が加えられている。52の刃部は自然面、主剥離面をそのまま利用しているが、非常に薄く作られている。53は全長5.5cmの最も小形のものである。側縁部のみ自然面側も調整されているが、刃部は主剥離面側に調整が集中して加えられ、薄く作り出されている。

Ⅱ-B-2類（第108図54・55）

54の自然面側の細部調整は側縁、刃部に僅かに加えられ、主剥離面側に加えられた細部調整も粗雑である。刃部は主剥離面、自然面を利用しているが、薄く仕上げられている。55も両面とも粗雑

な作りである。頭部を欠損し、刃部も磨耗が激しい。

IV-A-1類 (第108図56)

緩く湾曲した剥片を使用し、両面とも主剥離面を残している。側縁部及び刃部の調整は両面より細かく加えられ、刃部は鋭角的に作り出されている。

IV-B-1類 (第108図57)

自然面側は頭部に僅かな調整を加えた程度であり、主剥離面側に重点的な細部調整を加えているが、粗雑な作りのものである。刃部の調整加工も粗いが比較的薄く仕上げられている。

IV-B-2類 (第108図58・59)

58は薄い剥片を使用し、側縁、頭部の細部調整は両面より細かく加えられている。刃部の調整も両面より加えられているが、主剥離面側に特に細かく加えられ、非常に薄手に仕上がっている。59は頭部を欠損している。自然面側の細部調整は片側縁のみ加えられ、主剥離面側の側縁、刃部の調整は粗雑である。刃部には僅かに磨耗が観られる。

IV-C-1類 (第108図60・61)

60は長方形を呈する自然蹠を母材とし、粗い細部調整を加えたもの。頭部は両面より粗く、側縁は片側縁のみ調整を加えている。刃部は両面より粗く細部調整が行なわれているが、鈍角である。61は丸味を帯びた長方形自然蹠を利用している。頭部の調整は比較的細かく加えられているが、側縁、刃部の細部調整は粗い。刃部には磨耗が認められる。

IV-C-2類 (第109図62)

薄手の扁平蹠を母材とし、頭部は片面のみ、側縁部は両面に粗い細部調整が加えられている。刃部は両面より調整されているが、粗雑である。

VA-1類 (第109図63)

緩く湾曲する横長の剥片を母材としている。片面は大きな主剥離面を残し、他面の細部調整も粗く加えられたものである。抉りの細部調整も雑で浅い。

VA-2類 (第109図64)

横長の剥片を母材とした小形のもの。両面には大きく主剥離面を残している。抉りの調整は片面粗く、他面は細かく加えられている。刃部片面は磨耗が著しいが、他面は細かな調整が加えられている。

磨製石斧 (第109図66)

破損の著しいものであるが1点出土している。扁平な蹠を母材とし、頭部は丁寧に磨かれている。刃部は磨耗が激しいが、薄く磨き出されていたと思われる。

磨石 (第110図1~9)

図示したものを含め総数16点出土しているが、破損したものが多く、完形は1・7・9の3点である。1は円形を呈した扁平蹠を使用したもので、片面が使用面となり中央部が緩く凹んでいる。

2はやや角張った扁平蹠の片面に使用面が認められる。3~5は同形態のものである。薄手の梢円形を呈する自然蹠を母材とし、少しひずれ欠損している。使用面は片面に認められ、5は片面の中央部と縁辺側に2回の使用面が認められる。6は厚手の蹠の両面に使用面が認められる。7は長楕円形

を呈した扁平な磨石。片面及び側縁の一部に使用面が認められる。8は少程度欠損しているが、7と同形態のものと思われ、片面、側縁の一部が使用面となっている。9は直径4.5cmの小さな円盤を母材としている。全面が使用面となり、特に側縁部には帯状の使用面が認められる。

凹石（第111図1～6、第112図7・8）

1と3は同形態のもので、円形を呈する扁平盤を使用し、片面に磨石の使用面が認められる。1は磨石の使用面側中央に2ヶ所、他面に2ヶ所の浅い皿状の凹みがある。3は両面中央部に各1ヶ所の凹みがあり、凹みは浅く、皿状を呈する。2は片面が磨石の使用面、他面の中央部に直線状に接して3ヶ所の凹みが観られる。4は橢円形を呈した凹石、側縁寄りに2ヶ所の浅い皿状の凹みが接して観られる。5は緩く湾曲する橢円形の自然縁を母材としている。両面の中央部にはほぼ直線的な連珠状に4ヶ所、7ヶ所の凹みがみられる。凹みは浅い皿状のものである。6は少程度欠損しているが、各1ヶ所づつの浅い凹みがみられる。7は棒状を呈するもの。片面中央に浅い皿状を呈する凹みが観られる。8は石皿と兼用している。石皿の縁辺部に深めの凹みが1ヶ所観られる。

石皿（第112図9～11）

3点出土しているが、總て破損している。9は三角形を呈する厚手の縁を使用し、片面に円形の浅い皿状の使用面が認められる。10は使用面から推定するとかなり大形の石皿と思われる。使用面は片面に認められ、深く磨り減っている。11は少程度欠損するが、円形を呈する盤状縁を母材としている。使用面は橢円形を呈すると思われ、浅い皿状に磨り減っている。

グリッド出土石器

図番	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	出土地点	備考
97-1	ナイフ形石器	3.5	2.0	0.7	5.06	黒曜石	F5P1	先端部欠損
2	"	3.7	1.7	0.6	3.60	タ	2住	完形
3	石匙	1.9	4.5	0.5	4.46	頁岩	E-5	左端部欠損
98-1	石鎌	3.2	3.2	0.5	3.85	タ	G-5	先端部欠損
2	"	2.4	2.0	0.3	1.10	チャート	F-6	脚部欠損
3	"	2.4	1.5	0.4	1.30	タ	G-5	先端・脚部欠損
4	"	2.2	1.5	0.4	1.15	タ	F-4	完形
5	"	2.0	1.7	0.4	1.00	タ	F-2	先端部欠損
6	"	2.1	1.4	0.4	-	タ	F-6	脚部欠損
7	"	2.2	1.6	0.3	0.85	黒曜石	1堅	先端部欠損
8	"	2.2	1.3	0.3	0.66	チャート	E-2	先端部欠損
9	"	2.3	1.4	0.3	0.68	タ	D-6	完形
10	"	2.1	1.4	0.4	0.99	タ	F-2	先端部欠損
11	"	2.0	1.4	0.4	0.77	タ	1住	完形
12	"	1.9	1.3	0.5	0.96	タ	F-2	先端部欠損
13	"	2.7	1.9	0.5	1.08	タ	H-7	脚部欠損
14	"	2.2	1.5	0.4	1.00	黒曜石	E-6	完形
99-15	"	2.1	1.5	0.3	0.85	チャート	D-2	完形
16	"	1.5	1.5	0.4	0.59	タ	D-5	先端部欠損
17	"	1.7	1.4	0.3	0.60	タ	E-4	先端部欠損
18	"	1.7	1.5	0.3	0.58	タ	2住	先端部欠損
19	"	1.6	1.6	0.5	1.00	黒曜石	F-6	先端部欠損
20	"	1.4	1.3	0.3	0.40	タ	F-2	完形
21	"	1.7	1.2	0.4	0.67	タ	F-2	完形
100-1	削器	2.5	5.4	1.1	20	チャート	D-5	
2	"	3.8	6.5	0.5	20	ホルンフェルス	D-6	風化激しい
3	"	5.4	6.6	1.7	80	チャート	G-7	
4	"	4.5	7.2	1.2	60	砂岩	H-7	
5	疊器	4.8	8.8	1.1	70	チャート	D-7	
6	"	7.2	10.3	3.5	415	ホルンフェルス	F-8	風化激しい
7	"	6.9	7.3	2.9	240	粗粒砂岩	F-8	
8	"	8.8	8.4	2.5	276	ホルンフェルス	E-3	
101-1	I-A-1	9.7	4.5	2.7	120	タ	E-6	完形
2	I-A-2	11.5	5.3	1.9	125	タ	G-5	完形
3	"	8.2	5.1	1.4	80	ホルンフェルス	D-2	刃部破損激しい
4	"	6.5	4.6	1.6	60	砂岩	F-4	完形
5	I-B-1	10.8	4.5	2.5	150	ホルンフェルス	G-7	完形、風化激しい
6	"	9.6	5.3	3.0	140	タ	F-5	完形
7	I-B-2	9.9	5.4	1.8	120	砂岩	F-6	刃部破損激しい
8	"	10.1	5.1	1.5	100	ホルンフェルス	F-5	完形
102-9	I-A-1	7.5	5.9	3.2	140	砂岩	H-7	刃部破損激しい
10	"	7.9	4.6	2.7	115	ホルンフェルス	D-4	刃部破損激しい
11	"	7.5	4.1	1.9	61	タ	D-6	完形
12	I-B-1	10.0	6.3	3.4	218	泥岩	H-7	刃部欠損
13	"	9.7	5.3	3.4	165	ホルンフェルス	F-1	完形
14	"	9.0	5.2	3.1	175	砂岩	H-7	刃部欠損風化激しい
15	"	9.0	6.1	2.9	178	タ	F-7	完形

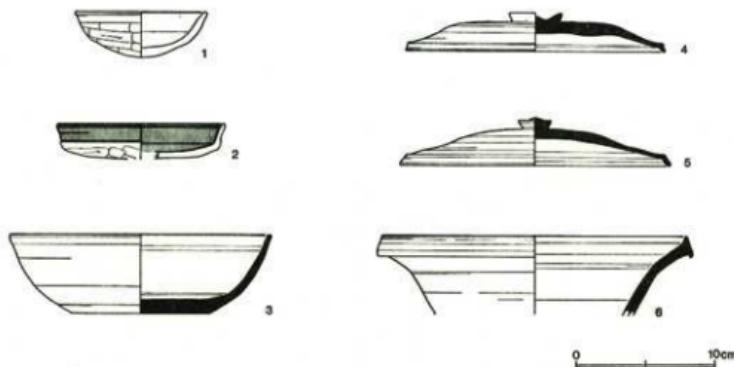
図番	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	出土地点	備考
16	I-B-1	8.5	5.4	2.8	155	泥岩	F-8	完形
103-17	〃	8.0	6.6	2.7	190	ホルンフェルス	F-6	頭部欠損風化激しい
18	〃	8.4	5.2	2.2	110	泥岩	D-6	頭部欠損
19	〃	7.9	5.3	2.6	103	ホルンフェルス	H-7	完形
20	〃	7.5	4.8	1.9	97	タ	F-2	完形
21	〃	7.1	5.6	2.3	156	タ	F-6	完形
22	〃	6.3	5.0	2.1	79	砂岩	E-8	完形
23	〃	6.9	3.9	1.5	45	ホルンフェルス	E-6	完形
24	〃	6.1	4.2	1.8	58	タ	E-3	完形
104-25	I-B-2	8.4	5.3	2.0	110	砂岩	E-6	完形
26	〃	6.5	5.4	1.4	65	ホルンフェルス	D-6	完形
27	〃	7.2	4.7	1.4	48	砂岩	G-8	完形
28	〃	6.0	4.1	1.2	40	ホルンフェルス	E-8	刃部欠損風化激しい
29	〃	9.0	3.2	1.3	50	タ	E-7	完形
30	〃	8.1	4.0	1.2	50	石英脈	F-2	完形
31	〃	6.6	3.9	1.2	41	砂岩	D-3	完形
32	〃	7.1	5.6	1.6	68	赤色チャート	D-4	完形
105-33	I-C-2	15.9	3.4	1.9	194	泥岩	E-4	完形
34	〃	11.1	4.2	1.6	84	凝灰岩	H-7	完形
35	〃	10.0	4.0	1.7	75	タ	G-6	完形
36	〃	10.4	5.5	1.1	82	タ	E-6	完形
37	〃	7.9	2.2	1.0	26	泥岩	F-1	刃部破損激しい
38	〃	9.4	4.7	1.9	155	緑泥片岩	E-6	刃部破損激しい
39	〃	9.9	4.4	1.3	69	石墨片岩	F-4	頭部欠損
40	II-A-1	10.0	5.2	2.1	156	ホルンフェルス	F-7	完形、風化激しい
106-41	〃	8.5	4.8	2.9	180	タ	E-8	刃部破損風化激しい
42	〃	9.5	5.1	2.5	150	砂岩	F-7	完形
43	〃	8.4	4.8	2.5	120	タ	F-6	完形
44	〃	8.0	3.9	2.1	100	タ	F-4	完形
45	〃	8.1	4.8	2.3	120	ホルンフェルス	H-7	完形、風化激しい
107-46	III-B-1	9.4	5.8	2.8	170	砂岩	E-7	完形
47	〃	9.1	5.4	2.5	137	泥岩	H-7	頭部欠損
48	〃	9.1	5.1	2.1	100	砂岩	F-7	刃部破損
49	〃	8.5	4.8	2.3	120	ホルンフェルス	G-7	完形
50	〃	7.6	3.9	2.8	100	タ	F-7	完形
51	〃	8.2	3.9	2.1	110	砂岩	D-4	完形
52	〃	6.8	3.6	1.7	42	タ	H-8	完形
53	〃	5.5	3.7	2.0	50	タ	E-3	完形
108-54	III-B-2	8.9	4.2	1.7	80	泥岩	G-5	完形、風化激しい
55	〃	6.6	3.4	1.3	44	千枚岩	D-6	完形
56	IV-A-2	8.6	3.9	1.6	69	泥岩	G-5	完形
57	IV-B-1	7.2	4.4	1.9	67	砂岩	D-6	完形
58	IV-B-2	9.8	4.6	0.9	70	タ	E-6	完形
59	〃	7.0	4.9	1.8	105	砂岩	F-2	頭部欠損
60	IV-C-1	10.4	5.1	3.2	260	泥岩	F-5	刃部欠損
61	〃	13.2	8.5	2.8	612	千枚岩	G-6	刃部欠損
109-62	IV-C-2	17.6	6.1	1.2	225	タ	E-1	完形
63	V-A-1	8.3	4.4	2.5	150	ホルンフェルス	F-4	完形

図番	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	出土地点	備考
64	V-A-2	7.7	4.3	1.2	43	緑泥片岩	H-8	頭部、刃部一部欠損
65	V-B-2	7.3	4.6	1.3	53	砂質頁岩	E-7	完形
109-66	磨製石斧	9.0	5.7	2.0	117	砂岩	G-8	片面欠損
110-1	磨石	8.0	7.8	3.8	395	砂岩	E-7	完形、片面使用
2	"	9.3	10.4	4.2	675	安山岩	E-1	一部欠損、片面使用
3	"	5.6	8.9	3.8	320	砂岩	F-3	刃欠損、片面使用
4	"	5.7	10.2	2.8	262	石英閃綠岩	F-5	刃欠損、片面使用
5	"	6.5	10.9	3.3	275	砂岩	F-4	刃欠損、片面使用
6	"	8.1	6.3	4.0	310	石英閃綠岩	E-7	刃欠損、両面使用
7	"	11.0	6.3	4.0	414	泥岩	F-2	完形、片面使用
8	"	8.2	6.4	2.5	224	砂岩	F-7	刃欠損、片面使用
9	"	4.5	4.6	3.3	84	"	E-1	完形、全面使用
111-1	凹石	10.9	8.9	4.4	573	"	G-7	磨石兼用、一部欠損
2	"	10.0	7.5	3.8	450	"	F-1	磨石兼用、刃欠損
3	"	8.3	7.3	3.3	230	砂岩	F-8	磨石兼用、一部欠損
4	"	9.1	10.8	2.8	331	"	E-7	刃欠損
5	"	13.1	5.6	3.9	425	"	E-7	連珠状凹、完形
6	"	6.4	7.0	2.7	262	"	H-7	磨石兼用、刃欠損
112-7	"	13.5	3.3	3.0	211	"	G-6	側面欠損
8	"	13.1	9.7	1.9	377	緑泥片岩	H-8	石皿兼用
112-9	石皿	15.0	14.6	4.5	1,510	角閃石安山岩	6 住	片面使用、刃欠損
10	"	19.6	14.6	4.9	1,660	緑泥片岩	E-3	片面使用
11	"	14.3	23.6	4.0	2,885	"	I-3	片面使用

(2) 奈良時代の遺物

1 土器 (第113図)

緑山遺跡からは、多量の縄文式土器に混在して少量の土師器坏・須恵器坏・蓋・甕などの土器が出土している。土師器、須恵器は何れも遺構確認作業時に検出されたもので、特に集中した地点はない。



第113図 グリッド出土土器

グリッド出土土器

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	口径 9.6 器高 3.3 50%	小形な坏。丸味を持った底部から 小さく内湾しながら立ち上がり、 口縁部は肥厚し僅かに外反する。	体部外面斜へ横位の丁寧な箝削り、 内面雜なナデ。口縁部横ナデ。 作りは良くない。	E 3 表土 胎土 小球多 色調 茶褐色
坏	2	口径 12.2 器高 2.5 40%	底部は平らで体部は浅い。口縁と の境に段を持つ。口縁部は外反し ながら開き、口唇は丸い。内面に 一束の沈線。内面全面と口縁部外 面は丹形。	体部外面は細かな箝削り。口縁 部外面もよく横ナデがされてい る。内面全面ナデ。焼成良好。 作りは丁寧。	E 7 表土 胎土 細砂粒 を含む 色調 赤褐色
須恵坏	3	口径 19.0 底径 10.0 器高 5.7	大きく平らな底部から小さく内湾 しながら開く。口縁部は僅かに外 傾し口唇端は丸い。深い器形で大 形の坏である。	底部回転箝削り。体部内外面共 丁寧なナデ。体部下面は箝削り。 ロクロ回転は右回転である。	E 6 表土 胎土 砂粒多 ロクロ
須恵蓋	4	口径 18.8 器高 2.1 つまみ径 3.8 つまみ高 0.6	つまみは扁平な形をし、先端は大 きく開き、中央部は少し突出して いる。器高は低く平坦な頂部から ゆるやかに器部へ移行。口縁は 「く」字形に立ち上がる。やや歪む。	天井部から肩部にかけて回転箝 削り。器部は横ナデ。内面全体 に凹凸ありナデしている。焼成は 良好であるが、作りはやや雑で ある。ロクロは右回転。	E、F 6 表土 胎土 細砂粒 少量含 色調 濃灰色

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵蓋	5	口径 19.6 つまみ径 2.4 つまみ高 0.8	つまみは宝珠形を呈する。天井部は僅かに丸味をもち、ゆるやかに裾部へ至る。口縁との境は「く」字状になり、内面には一条の沈線が巡る。口唇はやや肥厚する。	天井部から裾部内外面には雜な感じの横ナデ痕が見られる。肩部から裾部にかけて凹凸が目立つ。作りは雑だが焼成良好。	D 6 胎土 胎土 細砂粒 を含む 色調 灰色
須恵裏	6	口径 22.2	大きき外反する口縁部破片。口唇部上下端は突出しており稜を持っています。	口縁部内外面雜な横ナデ。焼成甘く脆い。作りも雑である。	D 7 胎土 胎土 小砾含 色調 淡灰色

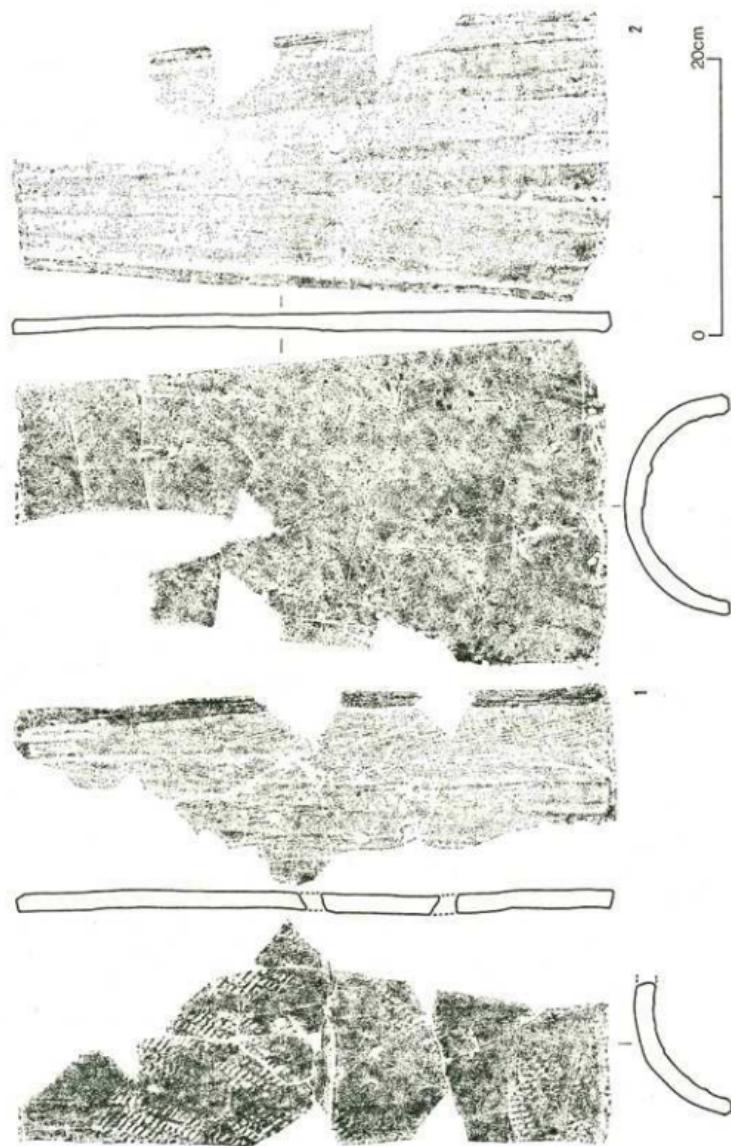
ii 瓦(第114~117図)

緑山遺跡では、丸瓦・平瓦が遺構確認時に茶褐色土・明茶褐色土中より検出されている。遺跡の南側緩傾斜面の6・9号住居跡周辺のE 8・E 7グリッドなどから集中して出土している。6・8号住居跡出土の瓦と接合するものもある。

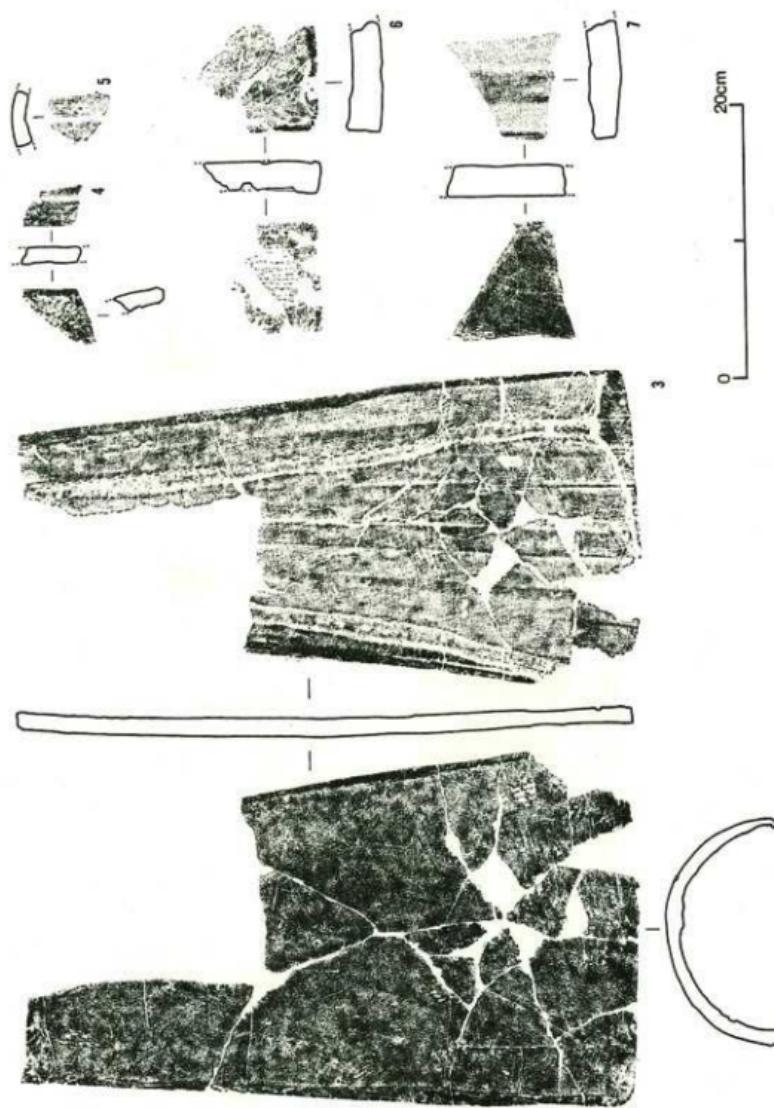
挿図114~117は、遺構内出の瓦とグリッド出土瓦を復原して図示したものである。

緑山遺跡出土瓦

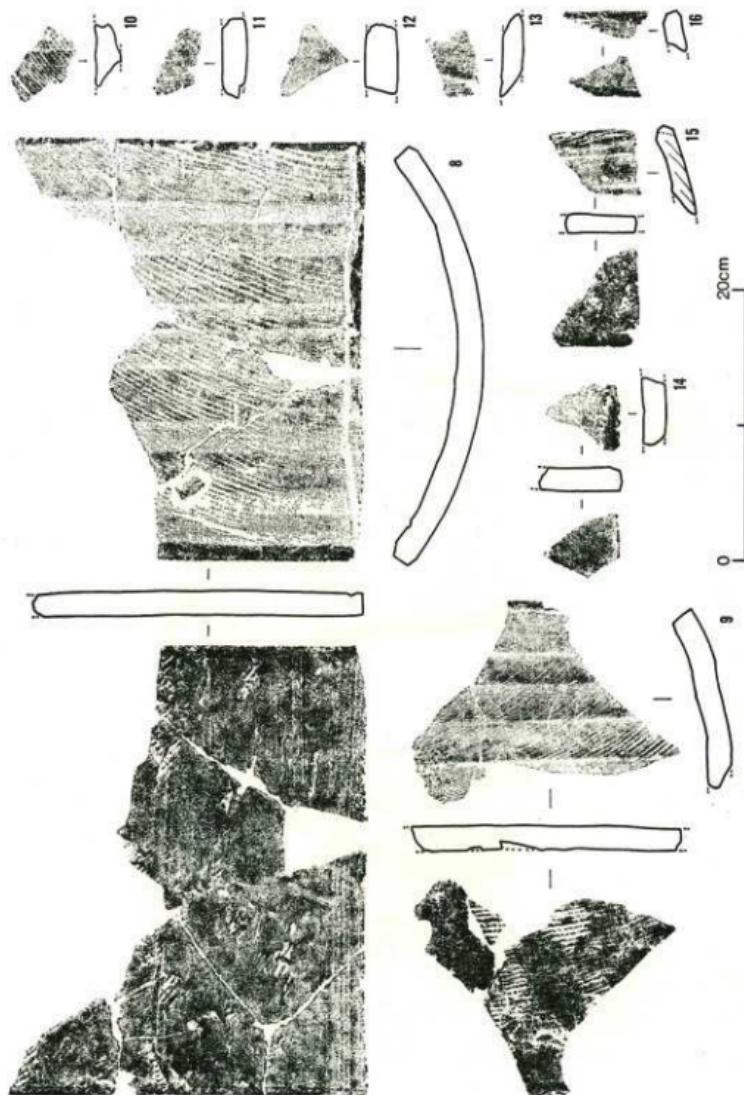
種別	図No	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	凸 面	凹 面	桶 幅	胎 土	焼成	色調	接合関係	備考
丸瓦	115-4	5.3 +α	4.1 +α	1.1 ~ 1.3	長方形格子 上をヘラで 横ナデ。	布目、枠板痕		0.1mm以下の砂粒 を多量に含有。白色針状物質1cm=1	普通			No.15と 同一個体?
丸瓦	115-5	4.5 +α	3.5 +α					白色針状物質1cm=1	普通	7.5YR 6/4 鈍 い橙		分析試 料No.4
平瓦	116-10	5.0 +α	5.8 +α	1.8 ~ 1.97		弧を描く糸切 り布目、枠板 痕	2.3~3.0	0.1mm以下の白色 砂粒など多量に含 有、白色針状物質 1cm=3	普通			No.1と 同類
平瓦	116-11	3.0 +α	5.9 +α	1.8 ~ 1.9				白色針状物質1cm=1	やや不良	5YR 5/6 赤 褐色		分析試 料No.1
平瓦	116-12	5.0 +α	5.4 +α	2.2 ~ 2.5				白色針状物質1cm=4	良好	7.5YR 6/6 橙 色		分析試 料No.2
平瓦	116-13	3.6 +α	5.2 +α					白色針状物質0	やや不良	7.5YR 6/6 橙 色		分析試 料No.3



第114図 緑山遺跡出土瓦(1)



第115図 緑山遺跡出土瓦(2)



第116図 緑山遺跡出土瓦(3)

種別	図No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	凸 面	凹 面	桶 幅	胎 土	焼成	色調	接合関係	備考
平瓦	116-14	6.1	5.2	1.65	ヘラで横ナ +α +α ~デ。 1.8	布目、枠板痕		0.1mm 以下の砂粒 多量、角閃石含有。 白色針状物質 1 cm = 2				
平瓦	116-15	7.1	7.3	1.3	格子上の叩きの上をへ +α +α ~ラで横ナデ 1.6	布目、枠板痕	2.8	0.2mm 以下の砂粒、普通 角閃石含有。白色 針状物質 1 cm = 1			No. 8 同類、別個体	
平瓦	116-16	6.3	3.1	1.3	ナデ。	布目痕		0.1mm 以下の砂粒 多量に含有。白色 針状物質 1 cm = 1	5 Y R 5/6 赤 褐色		No. 11 と同様	
平瓦	117-17	20.9	21.2	2.1	長方形格子 +α +α ~に斜行を加 1.6 えた叩きの 上を幅 6 cm のヘラで横 ナデ。	布目、枠板痕	3.0—2.2 —2.6— 2.6—3.2 —3.5	0.3mm 以下の砂粒 —と角閃石含有。白 色針状物質 1 cm = 普通	F 7 表土 1 点。E 8 表土 2 点		No. 8 と同一個 体と思われる	
平瓦	117-18	20.4	9.6	1.4	長方形格子 +α +α ~に斜行を加 1.7 えた上をへ ラ横ナデ。	布目、枠板痕	3.0—2.2 —3.1	0.2mm 以下の砂粒 多量、角閃石含有。 本白色針状物質 1 cm = 2	F 7 P 41 点。 E 8 表土 1 点。G 6 表土 1 点。		No. 9 と同一個 体と思われる	
平瓦	117-19	9.5	6.2	0.85	ヘラで横ナ +α +α ~デ。 1.6	布目、枠板痕	2.5	0.3mm 以下の砂粒 多量、角閃石含有。 白色針状物質 1 cm = 1			No. 13 同様な焼成	

(3) その他の遺物

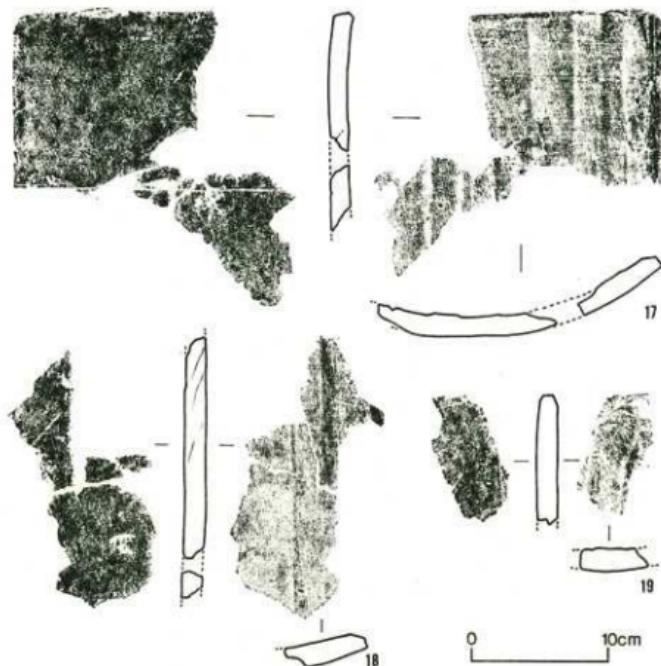
i 古銭（第118図）

4点の古銭が遺構確認作業時に検出されている。總て単独に放置された様な状態で、遺構に伴うものはない。

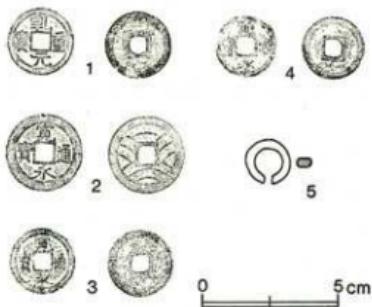
1の乾元重宝は、中国唐朝錢で乾元2年（759年）に鑄造された錢貨である。遺存状態は良好で、文字も明確に判読可能である。背側の郭の作りがやや雑であるが、作りの良いものである。G 7 グリッドの明茶褐色土中より出土している。

2・4は江戸時代の寛永通宝である。2は遺存状態良好で、非常に作り良いもので背文がある。

3・4は銹が進み遺存状態は不良である。2・3はF 6、4はE 5 グリッド出土。



第117図 緑山遺跡出土瓦(4)



第118図 5号住居跡出土耳環及びグリッド出土古鏡

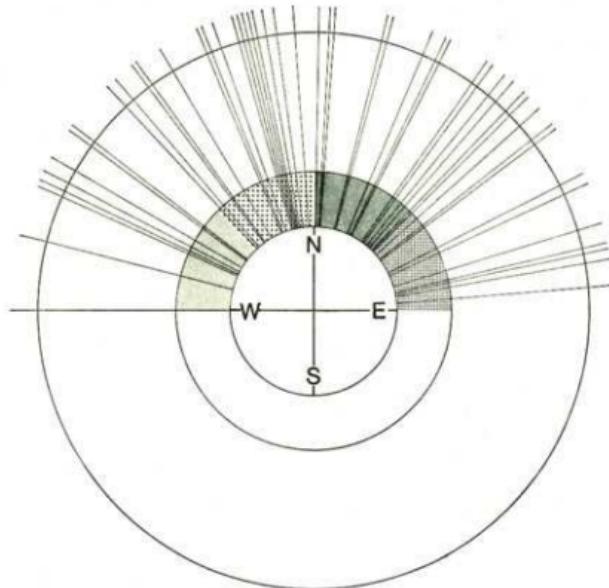
V 結語

緑山遺跡の炉穴について

本章で述べる炉穴とは、従来形態面での一般的特徴が、長椭円形を基本とし、浅く掘り込まれた塊底の一方に炉跡、他方に足場をもち、なかには煙道やピットを伴なうものも存在する。地域的には関東地方を中心に分布し、時期的には縄文時代早期末葉の条痕文系土器群の段階前後を代表する遺構と考えられてきたものに相当する。

緑山遺跡は、物見山丘陵より東方へ派生し、南及び北側に深い開析谷が存在する舌状台地上に立地している。調査は台地上平坦面から緩傾斜面にかけて実施され、遺跡の全体像を完全に把握できたものと考えられる。炉穴は、遺跡全域から総数67基検出され、遺跡中央の平坦面から南側緩傾斜面にかけて広範囲に分布している。また、炉穴と有機的な関係で存在していたと思われる4基の堅穴跡も検出されている。ここでは、炉穴が提示する種々の問題について考えてゆきたい。

炉穴の時期決定については、これまで何度も検討されているが、炉穴内の出土遺物が僅少であること、後世遺物混入の可能性の問題、また、出土する僅少な遺物でも、時期決定の有力な資料

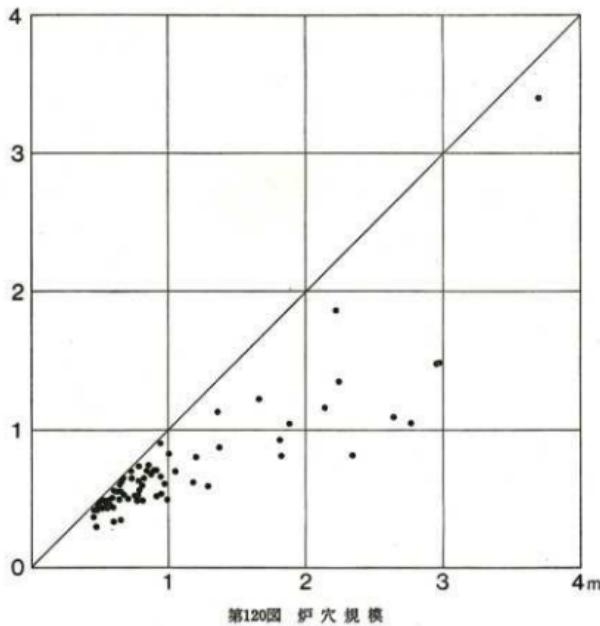


第119図 炉穴主軸方向

となる有文土器が少なく、大半が条痕文土器であることなどから、その多くが幅広く条痕文系土器群の段階として把えられている。ト伝遺跡（鈴木ほか1980）では、A・B・C地点に、それぞれ時期の異なる227基の炉穴が検出されている。A地点は子母口～鶴ヶ島台期を主体とする118基の炉穴が存在し、37基から遺物が出土しているが、炉跡より出土したものは4基である。B地点は茅山上層期以降に営まれた炉穴65基が検出され、26基から遺物が出土している。C地点は茅山上層期以降の早期最終末の炉穴44基のうち20基から遺物が出土している。しかし、B・C地点とも炉跡からの遺物は皆無である。大古里遺跡（高野1976）では、茅山下層～上層期の炉穴が85基検出されている。85基のうち52基から遺物が出土しているが、炉跡より出土したものは4基に過ぎない。緑山遺跡では、67基のうち約1/3の22基から遺物が出土している。炉跡から出土したものも僅かに2基存在するが、正確な時期決定を判断するには難しい条痕文土器である。

緑山遺跡の炉穴が営まれた時期は、「炉穴の時期決定は、炉穴内の完形土器を第一として、単純型式ならば問題ないが、それ以外は、炉穴内の土器片、住居の営まれた時期、量的に多い土器型式などといった炉穴をとりまく周囲の状況を総合して判断しなければならない。」（戸沢・堀越1971）とする従来の指摘を踏襲すれば、野島、鶴ヶ島台、茅山下層期の炉穴も存在するが、茅山上層期を主体に営まれたものと思われる。

第120図は、緑山遺跡で検出された炉穴の規模である。主軸長及び幅とも0.5～1m未満の円形、橢円形プランを呈し、単独に検出され、炉跡数も单基のものが多数を占めている。



第120図 炉穴規模

単独に検出された個々の炉穴を観察すると、平面形で A・円形、B・椭円形、C・隅丸方形、D・炉跡のみ、炉跡数で I・单基、II・複数に分類される。

A類 円形プランの炉穴で、概して浅い皿状を呈する。20基存在し、規模は 1m 未満のものである。規模や構造面での観察から足場の設置は認められないが、ピットを伴なうものが 3 基存在する。すべて炉穴内に单基の炉跡が認められるもの（A I）である。また、覆土中には多量の焼土、焼土ブロックが認められたが、明確な炉跡が検出されないものもある。

B類 椭円形プランの炉穴で、浅い皿状を呈する。約半数の 34 基存在し、炉穴の主体を成す。規模にはややバラつきが認められるが、1m 前後の炉穴である。炉穴内に单基の炉跡が存在するもの（B I）は、炉跡が主軸のどちらか一方に位置し、他方に足場をもつが、小形の炉穴には足場が認められない。複数炉跡をもつもの（B II）は、B I 類の発展形態であるが、旧炉跡の足場を利用して新炉跡を設置している。炉跡の検出されないものが 7 基、ピットを伴なうものが 2 基存在する。

C類 隅丸方形プランを呈し、壁が垂直に A・B 類より深く掘り込まれた炉穴である。10 基存在し、規模は 0.5 ~ 2m とバラつきが認められる。炉跡が单基のもの（C I）でも、規模の小さいものには足場が認められず、大形の炉穴には認められる。複数炉跡のもの（C II）は、B II 類同様に旧炉跡の足場を利用して新炉跡を設置している。

D類 単独に検出された炉跡であり、2 基存在する。他の炉穴の掘り込みが総体的に浅いこと、確認面がロームの上面であることや炉穴の分布範囲内で検出され、炉穴として分類に加えた。

形態と炉跡数により A ~ D、I ~ II 類に分類したが、緑山遺跡の炉穴は、A I + B I 類が極めて特徴的に存在している。終末期の炉穴群であるト伝遺跡の B・C 地点の炉穴群のあり方と類似した傾向を示している。

ト伝遺跡では、炉穴群のあり方を、各地点の炉穴群との比較の中で把えるために、炉穴の長軸方向を設定し検討している。緑山遺跡の炉穴についても、炉穴群形成の規則的な方向性を把えるために、炉穴の形態、炉跡と足場の相対的位置関係を要素にして主軸（長軸）方向（第 119 図）の設定を行ない検討した。炉穴の主軸方向は、①N-10°~30°-E、②N-30°~60°-E、③N-60°~90°-E、④N-10°-E~N-30°-W、⑤N-30°~50°-W、⑥N-50°~90°-W の 6 群に概ね分類され、偶然にも炉穴群の平面分布状態から分離可能な 6 群と一致している。しかし、各群内で主軸方向を検討すると個々に大きな相異が認められ、必ずしも一致していない。個々の炉穴で主軸方向を検討すると、緩傾斜面上に存在する炉穴群の主軸方向は、傾斜に対して直交するか、あるいは平行関係にあり、何らかの規則性をもって構築されたものと思われる。遺跡中央の平坦面上に存在する炉穴群の主軸方向には、何ら規則性が認められず、散在して構築されている。このような炉穴群のあり方は、ト伝遺跡や大古里遺跡での早期終末期の炉穴群と同様に、台地斜面部から舌地平坦部への暫移的な炉穴群の移行を想定させるものである。

大古里遺跡では、炉穴群の分布範囲内に 2 軒の住居跡が検出されている。緑山遺跡では、炉穴群と有機的な関係をもって存在したと思われる 4 基の堅穴跡（註 1）が検出されている。2 ~ 4 号堅穴跡は、炉穴群の分布範囲外の南側緩傾斜面上に近接し、1 号堅穴跡は北側緩傾斜面上に単独に存在している。各堅穴跡の出土土器は、条痕文土器で正確な時期比定は難しいが、炉穴群とほぼ同時期

と考えられる。このように緑山遺跡の炉穴群と竪穴跡は、大古里遺跡同様に空間的な位置関係で存在していたものと思われる。

註1 調査時において、明確に住居跡として認定できず竪穴跡としたが、機能的には住居跡の可能性を考えている。

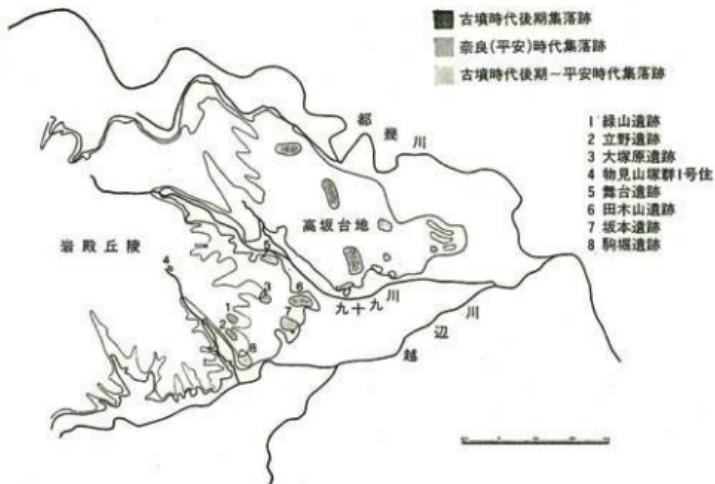
引用・参考文献

- 安孫子昭二ほか「No.98、No.99遺跡」多摩ニュータウン遺跡調査報告V 1976
荒井幹夫・小出輝雄ほか「打越遺跡」富士見市文化財報告第14集 1978
加藤修・今井忠昭ほか「田中谷戸遺跡」町田市田中谷戸遺跡調査会 1976
佐藤茂樹ほか「諏訪山遺跡」埼玉県遺跡調査会報告 第8集 1980
鈴木秀雄ほか「ト伝」埼玉県遺跡発掘調査報告書第25集 1980
高野博光・津田道ほか「大古里遺跡発掘調査報告書」浦和市大古里遺跡調査会 1979
土肥孝・土肥有平「針ヶ谷北通遺跡発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告第26集 1975
戸沢充則・堀越正行「美濃輪台遺跡—A地点(貝塚)」市川市教育委員会 1970
安岡路洋「大宮市篠山遺跡」 第5回遺跡発掘調査報告会発表要旨 1972

緑山遺跡の性格と周辺の集落について

本遺跡で発見された古墳時代以降の住居跡は6基で、古い順に記すと、五領期の4号住居跡→鬼高期の5号住居跡→真間期の6～9号住居跡である。4号住居跡は出土遺物も少なく、柱穴・炉の位置も不規則である。いわゆる田木台地（註1）における該期の遺跡には、駒堀遺跡（註2）、根平遺跡（註3）があるが、何れも小規模な集落である。5号住居跡は上面に6号住居跡が構築されていたため遺存状態は悪いが、出土遺物はその割に多く土器器の他に須恵器壺や金環が出土している。須恵器壺は一点で、その形態から7世紀前半と考えられる。又、住居跡からの金環の出土例には、番清水遺跡（註4）や寺谷遺跡（註5）があり、寺谷遺跡については羽尾塚跡との関係が指摘されている。（註6）この中で金環について「金環の出土も須恵器工人の社会的地位を考えれば、決して不釣合の現象ではない」と述べられているが、本遺跡5号住居跡は出土須恵器も1点であるから短絡的に須恵器生産との関係を云々はできないが、後述する次期集落の問題もあり看過することはできない。

6～9号住居跡は出土遺物が少ないが、従来の真間期の範疇でとらえられるものである。この4基の住居跡のうち7号と8号住居跡については、一般的な住居の形態を示しておらず、7号住居跡は東壁に楕円形の張出し部を持ち、カマドの東には長大な貯蔵穴様の土壙がある。8号住居跡については、該期の住居には基本的に付設されているはずのカマドが検出されておらず、北面コーナーには焼土が、南東コーナーには灰白色粘土が堆積していた。又、6号、8号、9号住居跡からは瓦が出土しており、住居形態と共に一般集落とは様相を異にしていることが伺える。



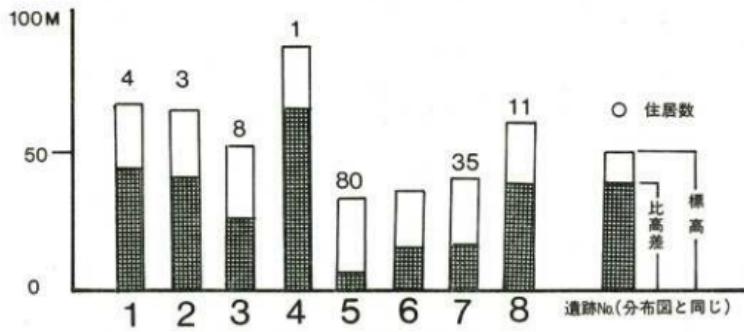
第121図 高坂丘陵の古墳時代後期～奈良・平安時代集落分布図

さて、次に高坂丘陵における古墳時代後期から奈良・平安時代の集落の立地と分布について見てみたい。ここでいう高坂丘陵とは、岩殿丘陵の東側とそれに続く高坂台地のことである。この地域の調査例は多く、特に岩殿丘陵東端と田木台地においては、本遺跡の調査原因でもある住宅都市整備公団の区画整理事業や関越自動車道建設、県立こども動物自然公園建設等により調査密度は非常に高い。一地域の調査密度という点では県内でも最も高い地域の一つであろう。

九十九川を挟んだ高坂台地の南側の田木台地と岩殿丘陵の南端地域は、物見山から多くの尾根が八ツ手状に伸びており、平坦面は少なく尾根と谷があり組んだ複雑な地形になっている。尾根上には各時代の集落や古墳、塚群等があり、斜面には須恵器、埴輪窯が構築されている。越辺川を臨む駒掘遺跡や立野遺跡（註7）からは関東平野を一望することができ、関越自動車道が南へ向って走っている様子が良くわかる。入間都衙の可能性を指摘されている若葉台遺跡（註8）や脚折遺跡（註9）等の奈良・平安時代の集落を間近に見ることができ、当時はカマドの煙の数え数えることができたであろう。

高坂丘陵の古墳時代後期から奈良・平安時代の集落の分布は分布図のとおりであるが、高坂台地については古墳時代の集落の数が多く煩雑になるので、調査が実施されたものと大きなものを図示したものである。田木台地については田木山遺跡（註10）以外は調査が実施されている。分布図を見ると、古墳時代の集落の数に比して奈良・平安時代の集落の数が非常に少ないことが一目でわかる。特に高坂台地においては、その差は極端である。このような現象についてはすでに指摘されていることだが（註11）、居住地域や住居形態の変化だけでなく、そこには人口減少という面もあると思われる。

田木台地では、これまでに8ヶ所の集落が調査、確認されており、鬼高窓のものには、舞台遺跡（註12）、駒掘遺跡、坂本遺跡（註13）、田木山遺跡があり、真間窓のものには、大塚原遺跡（註14）、立野遺跡、緑山遺跡、そして時期的にはやや新しくなるが物見山塚群1号住居跡（註15）がある。これらのうち、鬼高窓から真間窓へと継続する集落は坂本遺跡だけである。（田木山遺跡の集落部分は未調査の為不明）舞台遺跡は最も大きな集落であり、鬼高窓の中でも幅を持って存在し



第122図 遺跡の標高と沖積面との比高差

ている。

これらの田木台地の鬼高期の集落は、何れも沖積地を臨む台地の縁辺部に立地しており、標高も駒掘遺跡の60mを除いて、30~40m以内にある。これに対して、真間期の集落は台地奥部というより丘陵部の尾根上に立地するようになり、標高を見ても50m以上になる。そして、舞台遺跡のような大きな集落はなくなり、数基の住居跡からなる小規模な集落へと変化している。特に物見山塚群1号住居跡のように、標高90m程の馬の背状の尾根に1基だけ存在するような例も出てくる。両期の集落規模、標高、水田面との比高差の比較は表のとおりである。

以上のような現象は、7世紀末から8世紀初めにかけて集落立地に関わる規制が存在したことが想像でき、標高50m以上で水田面との比高差も大きい台地奥部に住居を築く姿は、水田経営以外に集落占地の要因を求めることができるのではないだろうか。このことは、緑山遺跡や立野遺跡の住居規模、構造や出土遺物からも、一般集落とは趣を異にした様相を看取することができる。立野遺跡については、「須恵器生産に関連した工房や遷別所的な性格を持つ可能性があるが……」(註16)という指摘が既になされているが、緑山遺跡についても、瓦の出土やカマドのない住居跡の存在は窯業に関連する遺跡であると考えることができる。立野遺跡と緑山遺跡という谷を挟んで200m程の距離に存在する特異な集落は、時期的にも近く、有機的な関連を持っていたいに違いない。しかし立野遺跡の東にはまだかなりの平坦面があるにもかかわらず、谷という自然の区画を利用している点は、両集落の性格の違いを感じさせる。このことは、立野遺跡の須恵器、緑山遺跡の瓦という出土遺物の点からもいえる。

緑山遺跡・立野遺跡から尾根伝いに西へ向うと、3km程で8世紀~10世紀の一大窯業地帯である鳩山窯址群がある。又、東の田木台地の桜山窯址群(註17)、根平遺跡、舞台遺跡では6世紀中葉~7世紀後半の須恵器窯址と埴輪窯址が調査されている。このような窯業地帯の中において緑山・立野遺跡の性格を窯業生産に結びつけることは然程無理な事ではないであろう。しかし、田木台地の諸窯址とは時期的な差があり、鳩山窯址群とは距離的な差があるという問題が残る。そこで、岩殿丘陵に7世紀末から8世紀初頭の窯址の存在を考えることもできるが、住宅都市整備公園の用地内においては、可能性のある谷にはトレンチによる確認調査を実施しており、その結果窯址は発見されなかった。今後この地域において、新たな窯址が発見される可能性は充分残されているが、これまでの調査からも、より鳩山窯址群に近い地域の可能性が強いであろう。

以上のことを簡単にまとめてみよう。

古墳時代の高坂丘陵には多くの集落と古墳群、そして窯址群があり、その繁栄ぶりが伺えるが、7世紀後半以降には台地奥部に小集落が点在するだけになる。このうち、緑山遺跡・立野遺跡からは瓦・須恵器の出土が顕著であり、住居規模や構造の面においても一般集落とは異なる様相を呈している。このような集落立地の推移の背景には、窯業生産が大きな位置を占めていたことは想像に難くない。

高坂周辺は比企郡都家郷に比定されるというが、本報告第V章でも述べられているとおり、緑山遺跡からは勝呂廃寺(註18)と同じ瓦が出土している。勝呂廃寺は入間郡衙の可能性を指摘されている若葉台遺跡と近い関係にあり、緑山遺跡を含めた高坂丘陵の遺跡群と入間郡との関係も改めて

問題にする必要があるだろう。

これまで、緑山遺跡とその周辺の関連する遺跡について立地と分布を中心に見てきたが、主に田木台地という狭い範囲に限った上、古墳群や寺院跡との関係についても述べられなかった。今回触れられなかつたこの地域の鬼高末～真間期の土器の編年研究も含めて今後の課題としたい。

(井上尚明)

註

- 註1 小久保徹・利根川章彦「桜山古墳群」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第2集 財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1981 の第1章遺跡の立地と環境によつた。
- 註2 栗原文藏・谷井魁他「駒場」埼玉県遺跡発掘調査報告書第4集 埼玉県教育委員会 昭和49年
- 註3 水村孝行他「根平」埼玉県遺跡発掘調査報告書第27集 埼玉県教育委員会 昭和55年
- 註4 金井塙良一「番清水遺跡」考古学資料刊行会 1968年
- 註5 金井塙良一「埼玉県比企郡寺谷遺跡」『日本考古学年報』12 1959年
- 註6 高橋一夫他「羽尾窯跡発掘調査報告書」滑川村教育委員会 1980年
- 註7 水村孝行他「児沢・立野・大塚原」埼玉県遺跡発掘調査報告書第28集 埼玉県教育委員会 昭和55年
- 註8 玉利秀雄他「若葉台遺跡」第一次～第四次発掘調査概報 鶴ヶ島町教育委員会
- 註9 利秀雄他「脚折遺跡群」鶴ヶ島町教育委員会 1981年
- 註10 栗原文藏他「田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川」埼玉県遺跡発掘調査報告書第5集 埼玉県教育委員会 昭和49年は集落部分ではなく古墳の調査である。
- 註11 「東松山市史」資料編第一巻 東松山市 昭和56年
- 註12 井上肇他「舞台」(資料編・本文編) 埼玉県遺跡発掘調査報告書第17・18集 埼玉県教育委員会
- 註13 昭和53～54年に東松山市教育委員会調査。渡辺久生氏より御教示。住居数43基の内鬼高期のものが35～36基程であるが、整理中であるため確定な数ではない。
- 註14 註7と同じ
- 註15 水村孝行他「物見山塚群」埼玉県遺跡発掘調査報告書第24集 埼玉県教育委員会 昭和55年
- 註16 註7参照
- 註17 水村孝行他「接山窯跡群」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第7集 財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982年
- 註18 田中一郎他「勝呂廃寺」坂戸市教育委員会 1981年

緑山遺跡出土の瓦—勝呂廃寺の系譜の中で—

住居跡出土の瓦について検討される機会は少なかったが、緑山遺跡では検討に値する丸瓦・平瓦が出土しているので、技法を中心に述べ関連する問題について触れてみる。

1. 出土状況

瓦の總破片数は55点で個体数は丸瓦3、平瓦6以上が確認できた。瓦の出土した遺構は4号・6号・8号・9号住居跡とF-6の1号土壙である。4号住居跡は縄文時代であることから除外できる。F-6区1号土壙の1点は6号住居跡の5点と接合しており、9号住居跡の2点が6号住居跡6点、9点とそれぞれ接合したことから、瓦は6号と8号住居跡に伴うと思われる（第123図）。

瓦の總破片数をグリット別に分けてみるとE-5・F-7・E-8区に多いが、F-7・E-8区出土の瓦も、6号住居跡から散乱した瓦と考えられる。同様に須恵器の總破片をグリット別にすると、D-5・6・7、E-6・7、H-5区など瓦の出土していない地区にも多いが、これは系切りを持つ新しい時期が含まれるためである（第124図）。

住居跡内での瓦のあり方は、6号住居跡では平瓦7（以下丸瓦・平瓦の後に付く番号は、第114～第117図の瓦の番号を表わす）あるいは平瓦8、丸瓦1・3が竈付辺に集中する傾向が見られ、竈の袖などに使用されたのであろう。8号住居跡では西隅の焼土近くに集中しているが、竈のない住居址であり、使用方法については不明である。

2. 瓦の特徴

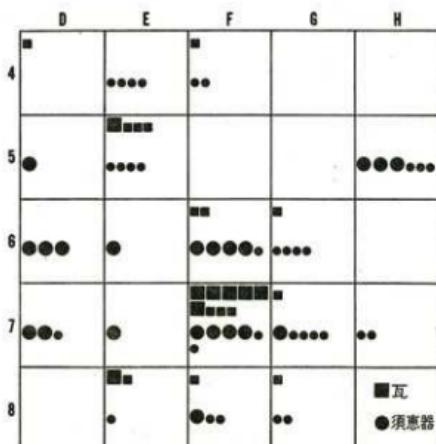
当遺跡出土の丸瓦・平瓦について、製作順序に従って述べることとするが、平瓦については厚手をA類、薄手をB類に分けた。胎土分析については瓦とともに土師器・須恵器・埴・粘土を分析に出したので、比較しながら述べる。

(1) 胎土

肉眼での表面観察によれば、ほとんどの瓦に動物遺体と考えられている白色針状物質⁽¹⁾が含まれているのが特徴である。 1cm^2 で1から8個が確認できた。このことは母体となった粘土が同一であ



第123図 緑山遺跡の瓦出土地点と接合関係



第124図 瓦・須恵器グリッド別出土量 大は5個小は1個 煤石と緑色普通角閃石が激減するのに対して、確認できなかった不透明鉱物が多量に検出できることは、上記のことを裏付けている。

また須恵器に角閃石族が多く、土師器に多い特徴が指摘され、瓦は土師器・須恵器それぞれに近い例が見られた。角閃石族の中でも特に緑色普通角閃石に差が見られ、緑山・立野・桜山遺跡の須恵器のいずれも少ない傾向にあった。それに対して瓦・土師器・立野遺跡の場には多く認められた。この傾向は緑レンガについてもうかがえる。

今回の鉱物分析では今後の課題が多く、結論の出せる段階まで至っていないが、動物遺体を含むことから、瓦・須恵器・土師器などいずれも岩殿丘陵付近で製作されたであろう。緑山遺跡8号住居跡で多量の粘土が検出されているが、このような状況は立野遺跡でも見られたため、須恵器か瓦作用の粘土の可能性を考えた。しかし、肉眼では動物遺体は確認されず、珪藻も検出されなかった。このことは、直接土器の母体となった粘土ではないと考えられるが、粘土の検出状況、竈のない住居跡から出土したことを考え合わせると、瓦・須恵器製作用の粘土の可能性も捨て去ることはできない。緑色・普通角閃石・緑レン石の割合から、瓦は須恵器よりも土師器に近いことが指摘できる。立野遺跡の埴は、須恵器と同一の窯で焼かれているが、胎土は緑山遺跡の瓦に類似している。このように須恵器と瓦は別の粘土採取地が考えられる。

(2) 横骨への粘土の巻きつけ方法

粘土塊からの切り離し痕と考えられる糸切りの確認できるのは、平瓦7・8・9・10と丸瓦1であるが、平瓦は厚手のA類にのみ見られ

第125図 瓦の厚さ

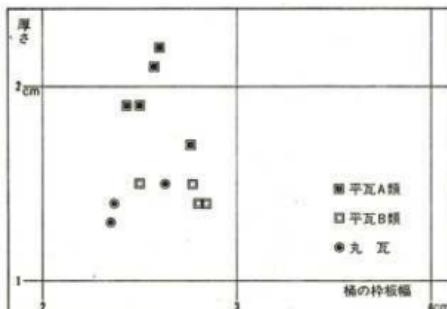
る。

糸切りの方向と弧について検討するが、糸で切り離す前は瓦の糸切りの残っている凹面が、粘土塊の上面になっていること、そこには前の瓦製作のために切り離した糸切り痕が残っていることが条件となる。平瓦8は広端部から入り右側縁部へと抜ける、左手を支点にした弧を描く。平瓦9も右側縁部から狭端部へ抜ける左手支点の弧を描く。同様に、丸瓦1も広端部から狭端部へ左手支点の僅かな弧を描く。このように、いずれも粘土塊から切り離した粘土板の上面を模骨に接着したと推測できる。しかし平瓦8と9の糸切り導入部が90度違っていることから、模骨に粘土板一枚を一周に巻きつけたのではなく、小さな粘土板を2~3枚重ねながら巻きつけたと考えられる。仮に平瓦8が一枚の粘土板桶巻造りで4枚割りとした場合、糸切りが広端部から入っているため、広端部幅31cmの4倍、124cm幅を糸切りの導入部としなくてはならない。埼玉県の桶巻造りの瓦の場合、弧を描く糸切りが多く、粘土板重ね合わせ桶巻造りが主流であったと考えられる。次に丸瓦1は僅かな弧を描くが側縁部に並行しており、仮に一枚の粘土板を巻きつけたとするならば、広端部幅23.5cmの2倍の47cm幅となり、糸切りの導入部として可能な幅であろう。事実平瓦の糸切りが導入後すぐ曲線を描き、それも滑らかな曲線であるのに対して、丸瓦の糸切りはほぼ直線であるが、力の配分のためか細かな蛇行を描く点で、一枚粘土板の巻きつけと考えられる。

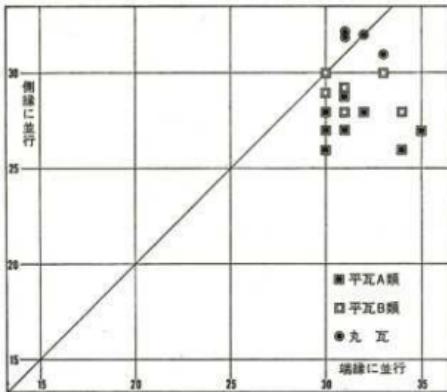
次に平瓦Bの巻きつけ方法について検討しておく。この瓦の割れ方は狭端部から見るにZ型に、側縁部から見るに凹面上部から凸面下方へ斜めに割れている。短い粘土紐あるいは小さな粘土板を下方から上方、左から右へ積み上げたと考えられる。

平瓦AとBの厚さを比較するとAは1.55cmが最も薄く、最大厚2.5cmある。Bは0.85cmから1.7cmと、Aよりも薄いつくりであることがわかるが、これは模骨への粘土巻きつけ方法が糸切り離し粘土板であるのか否かに原因があると考えられる(第125図)。

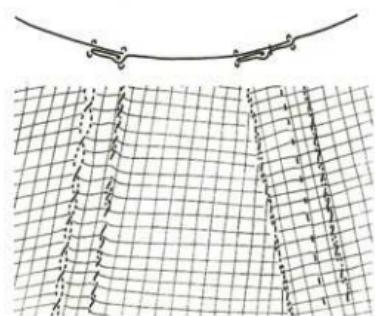
(3) 桟板痕



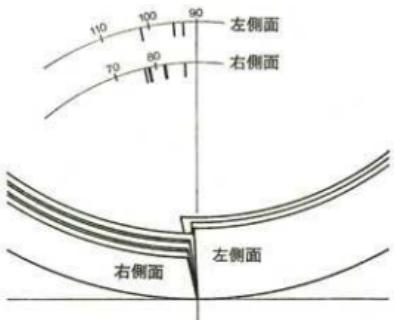
第126図 緑山遺跡出土瓦の柾板幅と厚さの関係



第127図 緑山遺跡出土瓦の布目数



第128図 丸瓦の布の縫じ方



第129図 平瓦側面の凸面に対する分割角度

の方が側縁に並行する糸の数が多い傾向にある。丸瓦は平瓦よりも側縁に並行する糸の数が多く、端縁・側縁の数が31以上となりほぼ同数に近づく。

(5) 布の縫じ合わせ（第128図）

縫じ合わせの見られるのは、平瓦9と丸瓦3である。平瓦9の縫じ合わせ方法は糸が現われていないため不明確であるが、丸瓦3は2ヶ所に見られる。2ヶ所とも同様な縫じ方で、布の両端を片方は折り曲げ、片方は延ばしたまま、その両端をとめるため一端から縫い、また戻って同一のところを前の糸をからめながら縫う、返し縫いをおこなっている。この縫い方だと、往復した糸が右回りの螺旋状になる。二ヶ所のうち一方は、折り曲げた布の幅が広いため、中央を縫い付けている。

(6) 凸面の叩きと撫で

凸面の叩きの文様には長方形斜格子（第131図—2）の丸瓦1・2・3・4と、平行（第131図—6）の平瓦6・9および平行に大きな斜格子を重ねた叩き（以下平行斜格子組み合わせ文・第131図—4）の平瓦8・17・18の3種が確認できた。長方形格子は丸瓦のみに、平行は平瓦A類の一部にみられたが、平行組み合わせ文は平瓦A類・B類それぞれに1例ずつある。叩きの円弧につ

平瓦8では板枠痕が12枚確認でき、4分割と考えられるので1周48枚前後の板が使われたであろう。丸瓦では2・3とも枠板痕は9枚確認できるので、18枚前後の板が使われたであろう。

枠板の幅は平瓦8で1.7cmから3.3cm、丸瓦2で2.1cmから2.7cm、丸瓦3で2.1cmから3.2cmであった。それぞれの瓦の枠板幅の平均をとると、平瓦Aは2.4cmから2.6cmの間に、平瓦Bは2.8cm付近にある。また丸瓦は平瓦よりも幅が狭い傾向にある。

瓦の厚さと桶枠幅には相関関係があるのではないかと作成したのが第126図であるが、結局厚さと桶枠幅に関連は見られないようである。県内でも古いと考えられる平谷窯跡・大谷窯跡の平瓦は枠板幅が4cmを越え、一部に5cm以上の例がある。しかし700年前後から国分寺創建頃までの馬騎の内・荷鞍ケ谷戸・岡・寺山・五明などの平瓦は2.4cmから3cm前後にあり、緑山遺跡例もこの中に含まれるようである。

(4) 布糸目数（第127図）

布糸目数の縦・横の計測をおこなったが、緑山遺跡平瓦A・B類に僅かな差がみられ、後者

いては撫でられているため不明である。撫では幅約7cmの箇状工具で、横位に撫でている。方向は狭端部を上にした場合平瓦が右・左両方あるが、丸瓦は左から右である。

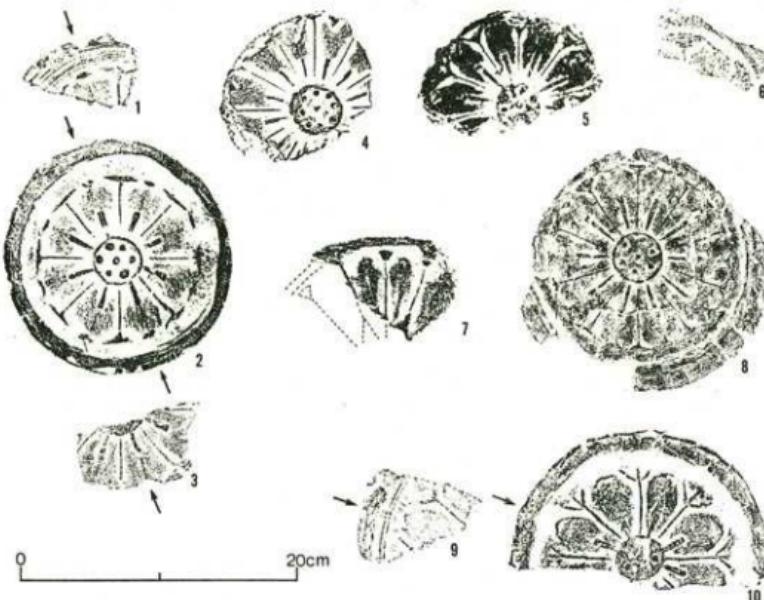
(7) 分割と側面・端面の面取り

平瓦で側面の凸面に対する分割角度を見るに、右側面は90度以下、左側面は90度以上ある(第129図)。このことは円筒から分割する際に、凸面側から右利きの人が切ることにより、刃先がやや左へ寄ったためと考えられる。これはすなわち、円筒から分割する時、切れ込みを入れて削ってから整形したのではなく、短時間の乾燥後、円筒に直接刃物を入れて分割したためと思われる。実際平瓦の面取り部分は砂粒が走るのに対して、側面は光沢を持つ平滑な面を成している。また側面は直線に切られていることから、當て木を使って切断したと考えられる。

側面の残るうち面取りの見られない例は、平瓦6・9だけである。また凹面側だけに見られる例は平瓦17であり、ほかは凹凸両面に見られる。方向は狭端部から広端部へ削られている例が多いが統一されてはいないようである。

3. 勝呂庵寺出土瓦との比較

坂戸市勝呂庵寺は緑山遺跡の南東4.3kmに位置するが、同庵寺については林織善氏・田中一郎氏⁽²⁾・櫻戸市郎氏などの紹介・論考がある。1978年に勝呂庵寺へ供給したと考えられている、上宿瓦窯跡が発掘され、1979年以降の範囲確認調査では基壇の一部・溝・回廊状造構が発見された。また造



第130図 勝呂庵寺第1期の軒丸瓦とその類例 1・3～7・9. 勝呂庵寺 2・10. 赤沼窯跡 3. 大谷瓦窯跡
矢印は同範位置を示す。

物は多量の瓦のほか、銅製と考えられる塔相輪が出土している。緑山遺跡の瓦と比較すると類似する例があり、両者の有機的関連を追求する材料とするため検討する。

(1) 勝呂廃寺の瓦 (第134図)

勝呂廃寺には各種の軒丸・軒平・丸・平瓦が出土しているが、それぞれ類別して時期区分を行ってみる。丸・平瓦については叩き文様と整形技法によって分類する。現段階ではまだすべての瓦当文様・叩き文が出土していないと考えるので、時期区分については時期早尚と考えるが、あえて行ったのは、緑山遺跡出土瓦との関連を知るためにある。なお類別番号は第134図と同じである。

a 軒丸瓦 (第134図)

第1類 (第130図—4~5)

棒状の子葉を持つ单弁蓮華文で、8葉・10葉・12葉が見られる。花弁は中央に稜を持ち、弁端は尖形の反転がある。周縁は直立縁であろう。類例は東松山市大谷瓦窯跡にあるが、10葉で花弁は僅かに丸みを持ち扁平となる (第130図—8)。この類は子葉を取ると花弁の反転・周縁の直立縁・中房の小さい点など、飛鳥寺系の瓦に類似しており、注目される瓦である。この類はいずれも白色針状物質が入る。

第2類 (第130図—1・3)

单弁8葉であり、子葉を持つこと、花弁に稜があることなどが第1類と共通する。しかし花弁の端部の反転が梢円形で表現され、周縁が三角縁となる点で相違している。この瓦も第1類と同様、飛鳥寺系の変形種と考えられる。類例は鳩山町赤沼窯跡 (第130図—2) に見られるが同范と考えられ、製作地を赤沼窯と推考できる。

第3類 (第130図—9)

花弁は扁平で棒状の子葉を持つ单弁8葉の瓦であるが、大形となる。弁間の界線先端部は鳥足状に三叉に分かれれる。周縁は三角縁状になり、胎土に白色針状物質が入る。類例が鳩山町赤沼窯跡 (第130図—10) から出土しており同范と考えられ、第2類と同様製作地のわかる瓦である。

第4類 (第130図—7)

单弁の15葉と考えられていた瓦であるが、1つ置きの弁の間に変形した子葉と思われる三角形の突起がある。すなわちこの瓦は複弁8葉と考えられ、複弁の間に子葉状の突起を持つ変形な瓦である。⁽⁹⁾花弁は中央に鋭い稜を持ち、弁端は反転気味である。白色針状物質を含む。瓦当部径が丸瓦径より大きく、接合部が瓦当部周縁の内側にある。丸瓦部の凸面は全面に撫でているが、僅かに斜格子叩きが確認できる。凹面は桶の枠板痕が明瞭に見られる。以上の点と胎土から、後に述べる丸・平瓦第2類と同時期生産の瓦であろう。

第5類 (第135図)

周縁の傾斜部に交叉波状文を巡らす瓦で、单弁は14・15・16葉が、複弁は8葉がある。瓦当面が大きく、厚手となる。類例は岡部町寺山遺跡から小形の複弁8葉が出土している。白色針状物質が入らず須恵質が多い。

第6類

单弁8葉で、弁には界線が巡り、間弁は先端で弁に沿って大きく広がり、楔状となる。類例は武

武藏国分寺に見られる。白色針状物質が入らず須恵質である。

第7類

宝相華文の変形文と考えられ、花弁は4葉で、子葉の変化したと思われる線が中房まで達し、十字線をつくる。弁間には葉状の間弁が入る。この瓦の類例も武藏国分寺に見られる。

b 軒平瓦（第134図）

第1類

三重弧で型挽きの瓦である。頸の深さは瓦当厚と同じくらいの中頸である。

第2類（第131図—3）

瓦当文様を長方形斜格子叩きで施した深頸の軒平瓦である。頸部は平行斜格子組み合わせ叩きが施される。この平行斜格子組み合わせ文は緑山の平瓦にある。

第3類

頸はやや深い段頸の三重弧で、範型と考えられる。三重弧文の出土例はやや少ない。

第4類

浅頸の五重弧で、範型である。棹板痕が明瞭につく。同類が大仏廃寺にあるが、繩叩きが施されている。

第5類

重廓文の軒平瓦で、曲線頸を持つ。凸面には文様としての小さな正格子叩きが部分的に施される。

第6類

縦に4つ並ぶ長方形格子文で、同一文様が赤沼窯から発見されているのを見ると頸の深い段頸となっている。⁽¹⁰⁾ 畿戸市郎氏は重弧文系としている。

第7類

左から出る扁行唐草文で、文様の間には珠文が散る。頸は浅い段頸である。

第8類

唐草文の変形と考えられる蕨文が上と下から出ている。頸はやや浅い段頸となる。

第9類

竪で外区との界線を描き、内区に×を横に連続する刻線文様で、頸は段頸である。類例は武藏国分寺と谷津池第3号窯にある。

第10類

小さく反転する均整唐草文で、脇区に2本の横線が入る。武藏国分寺に同范がある。

第11類

反転する波状の文様が連続するが、類例は新久窯跡に見られる。

c 丸・平瓦（第134図）

第1a類（第131図—5）

糸切り痕と棹板痕が明瞭に残り、平行叩き文が施される。平行叩きは荒く5本で2cmの幅があり、叩きの上に横位の撫でを施す。同型叩きは緑山遺跡の平瓦A類とした中にあり、両遺跡例とも棹板幅は2.5~3cmで、勝呂廃寺出土瓦のうちでは狭い方である。また布糸目数は3cm幅で30×26以上

で最も細かい部類にある（第133図）。生産跡として赤沼窯跡から同類の叩きが出土している（第131図—7・8）。

第1 b類

5本で1.3cmを測り、第1 a類より細かな平行叩きである。叩き板には細かな木目があり、目の走る方向に対して右下りに彫られている。枠板痕も明瞭で、糸切りは端部に並行に走る。枠板幅は2.3cmと2.8cmがあり、第1 a類・緑山遺跡平瓦などとはほぼ同じであるが、布糸目数は少なくなる。

第1 c類

5本で0.9cmのさらに細かい平行叩きである。これもb類と同様糸切り痕が端部に並行する。

第2類（第131図—1）

丸瓦であるが、糸切り痕と枠板痕が認められ、細かな斜格子文が施される。同型叩きは緑山遺跡の丸瓦にある。枠幅は2.3～2.4cm強あるが、緑山・勝呂の平瓦類より狭い。

第3類（第131図—3）

平行・斜格子組み合わせ文である。勝呂では軒平瓦第2類に見られるが緑山の例から平瓦にも存在すると仮定して類別した。

第4類

長方形格子で縦横3単位が4.3×3.2cmと荒い。枠板痕があり、その上を撫で消す例がある。また叩きの上も同様に撫でられている。

第5類

凸面は木目の浮き出た平行叩き文が、凹面は青海波文が施された、須恵器と同一技法の瓦と考えられる。小破片のため問題は残るが、一面が直線で片面がへ状になること、馬騎の内庵寺にも同類の瓦があるので平瓦と考えた。焼成・胎土は、軒丸瓦第5類に類似する例がある。

第6類

5本で1.9cmの荒い繩叩きを消した後、4.5×4.3cmに5個ずつ入る格子叩きを施す。格子叩きはまばらに打たれていることから、文様的な叩きと考えられる。

第7類

5本で1.2cmの細かい繩叩きを不定方向に施し、その上を撫でている。凹面は枠板痕の上を縦方向に撫でている例がある。

第8類

大きな斜格子叩きで、1個が菱形となる。3個の単位で2.8cmとなる。叩きの上は撫でが施され、凹面は縦方向に削られている。

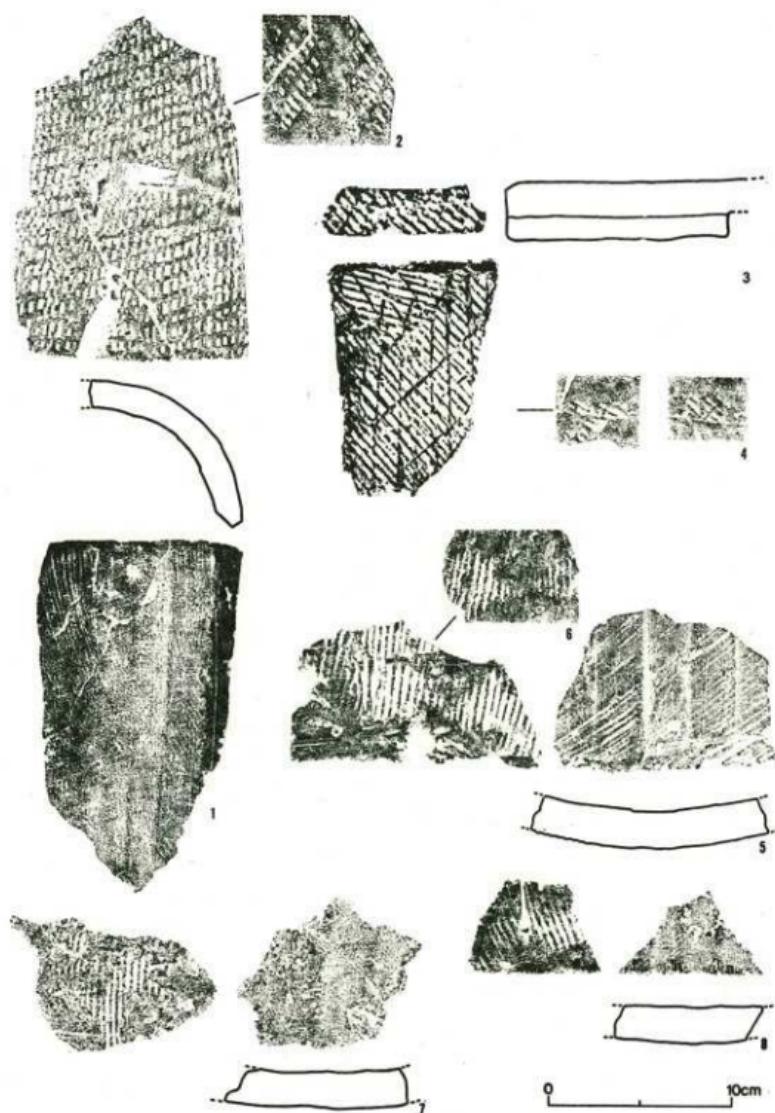
第9類

枠板痕がなく、叩きの弧から一枚造りと考えられる。叩き板は幅約11cmで、5×4個の荒い格子が刻まれている。

第10類

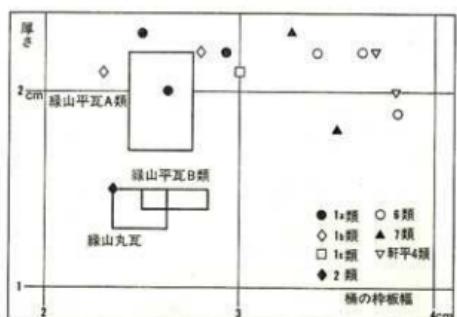
5本で1.6cmの繩叩きを全面に施す。一部に糸切り痕も残るが、一枚造りである。

(2) 緑山遺跡と勝呂庵寺の出土瓦の類似点

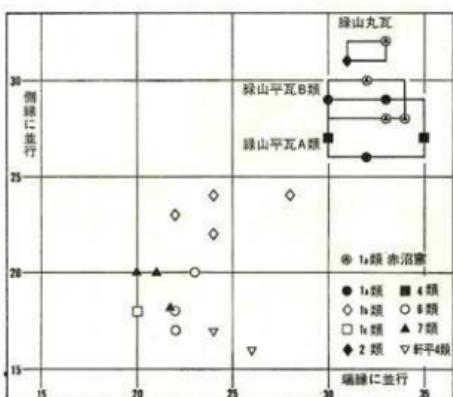


第131図 印き文様の比較 1・3・5.勝呂廃寺 2・4・6.緑山遺跡 7・8.赤沼窯跡

勝呂廃寺の叩き文様は平行 (1 a・1 b・1 c)、平行・斜格子組み合わせ文 (3)、格子 (9)、斜格子 (2・8)、長方形格子 (4)、繩+格子 (6)、繩 (7・10) など各種が見られる (第134図)。第 1 a・2・3 類は緑山遺跡と同一で、同型叩き板を使用していると考えられる (第131図)。



第132図 勝呂廃寺出土瓦の桶枠板幅と厚さの関係



第133図 勝呂廃寺赤沼窯跡出土瓦の布目数

の軒平第4類、平瓦第6・7類のグループに分けられた。また側縁に並行する糸の数で31以上の第2類 (丸瓦)、26~30の第1 a・4類、22~24の第1 b類、16~20の軒平第4類・平瓦第1 c・6・7類に分けられる (第132・133図)。

このように勝呂廃寺と緑山遺跡の瓦は、上記の事例から同一グループに含まれることがわかった。また白色針状物質を含み赤褐色である点からも、同一工房において製作されたと考えられる。

第1 a類と同類の平行叩きを持つ平瓦が赤沼窯跡から出土しているが (第131図—7・8)、叩きの上に篦撫でを施すこと、糸目数が第1 a類と同一グループに含まれること、白色針状物質を含むことなどから、赤沼窯跡が勝呂廃寺の瓦窯跡の一つと考えられる。

次に勝呂廃寺の瓦の枠板幅と厚さを計測して、緑山遺跡例と比較すると、平行叩き文系 (1 a・1 b) が緑山遺跡平瓦A類と近い値を示す。軒平第4類と平瓦第6・7類は、枠板幅が3.2 cm以上となり明らかに差が認められる (第132図)。

布目数は、緑山遺跡と同型叩き文である第1 a類が緑山遺跡A類と同一の範囲に含まれた。また第4類も同様であった。枠板幅と厚さで第1 a類と同様な位置にあった第1 b類は、糸目数では全く違う範囲を形成している。また第1 c類は枠板幅では3 cmとなり第1 a・1 b類に近い範囲にあったが、糸目数では最も荒い布を使用している。軒平第4類と平瓦第6・7類は糸目数でもほぼ同一のグループとなるようである。第2類の叩きは勝呂・緑山とも丸瓦のみに使われ両者とも糸目数は近似する値である (第133図)。また第2類と同一の叩きが勝呂廃寺軒丸瓦第4類にみられ、布目数も第2類とはほぼ同一である。

枠板幅から3 cm以下の第1 a・1 b・1 c・7類のグループと3.2 cm以上

ではこの種の瓦は、勝呂廃寺出土瓦の系譜の中でどの位置に置かれるのか検討してみよう。

(3) 時期区分

類別した瓦で、軒丸瓦を主体とした時期区分を行なってみる（第134図）。

第Ⅰ期

軒丸瓦では第1類から第3類が含まれるが、中でも第1類は瓦当部が薄く、瓦当部と丸瓦部の接合部分の粘土が少なく、古式であろう。第1類には8葉・12葉のほか10葉も見られる（第130図-5）。第3類は瓦当部が厚く、弁が扁平であるなど新しい傾向を示す。軒平瓦は型挽きの第1類が伴うと考えられるが、やや頬の浅い中頬であるため今後の検討が必要である。時期について、軒丸瓦の系譜から推考してみる。第1類の子葉を取ると飛鳥寺系の瓦（石田茂作氏第三類）に類似することは、すでに高橋一夫氏も述べている。この考え方方が支持できるのは、第2類の軒丸瓦も弁端が反転を表わす梢円形の脈らみを持ち、飛鳥寺系に類似するからである（石田茂作氏第六類）。第1・第2類の瓦を他系譜の中でとらえようとするならば、はたしてこのような瓦文は出現しうるであろうか。第1・第2類および大谷瓦蒸跡・赤沼蒸跡のこの種の瓦のいずれもが、飛鳥寺系の素弁の瓦を母体としながらも、棒状の子葉を加えた点が大きな特徴といえる。

子葉の流行は奈良県山田寺系瓦の地方伝播に始まるが、関東では千葉県竜角寺跡、群馬県上植木廃寺が知られている。竜角寺の創建は天智朝以後、下っても天武朝と考えられているが、上植木廃寺について大江正行氏は、山田寺系譜と考えるよりも、中国意匠の影響を考え、創建年代を7世紀中頃としている。⁽¹⁵⁾筆者は上植木廃寺例について、山田寺直接系譜でなく、南滋賀廃寺の単弁軒丸瓦などにその系譜が求められ、伝播した時期は大津宮以降と考えたい。そのようなルートがあったからこそ、後に南滋賀廃寺にあった瓦当背部に布目が付く一本造りが伝播したのであろう。

このように関東への子葉を持つ瓦の伝播は天智朝以降と推定できるならば、勝呂廃寺の軒丸瓦第1類は飛鳥寺系の瓦（寺谷廃寺の瓦など）を母体に7世紀第3四半期に造られた瓦と推考できる。しかしその出目については、後に述べるように渡来人との関連が指摘できる。

この時期の瓦生産は、瓦に白色針状物質が含まれていることから、赤沼蒸跡をはじめ南比企丘陵で行なわれたであろう。

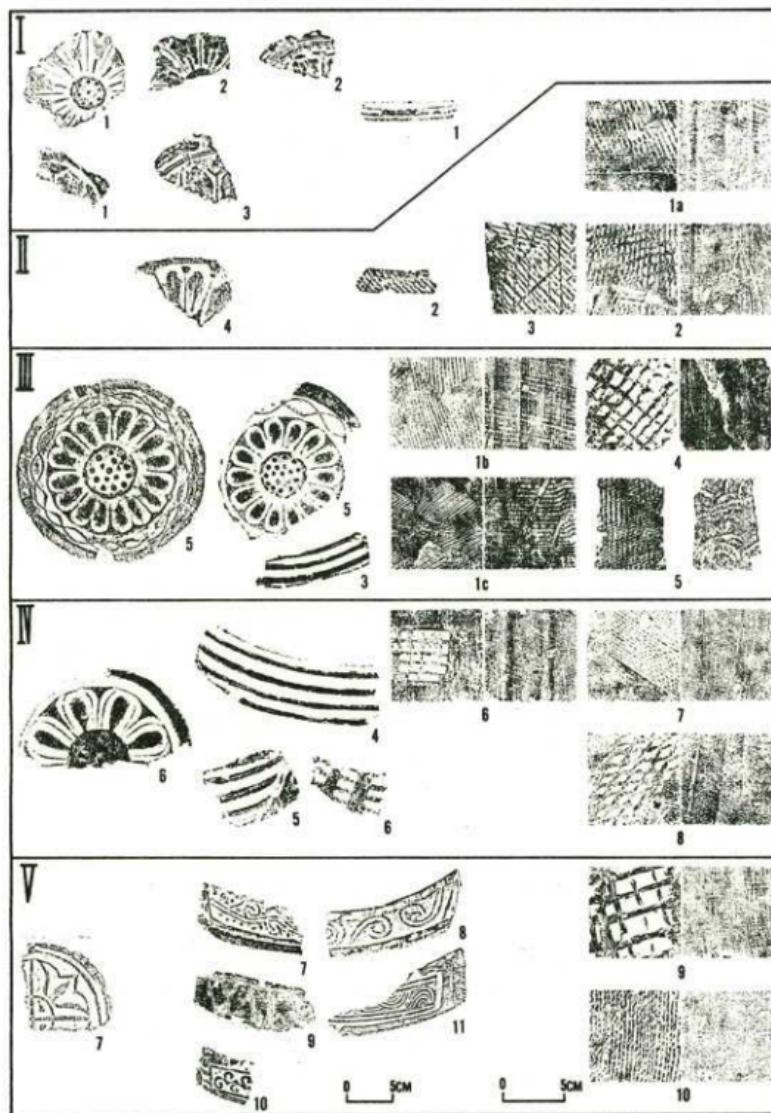
第Ⅱ期

軒丸瓦の第4類が基準となる。前にも触れたようにこの瓦の叩き、桶枠板、布目数が緑山・勝呂出土の丸・平瓦第2類に類似する。その時期は緑山遺跡から8世紀第1四半期に1点を置くことができる。

緑山遺跡に隣接する立野遺跡には、住居跡から壺に転用された瓦埠が數点出土しており、7世紀末から8世紀初頭の時期であることを考慮すれば、その埠は勝呂廃寺へ供給されるべきものであったと考えられる。⁽¹⁶⁾

軒平瓦は丸・平瓦第2類の長方形斜格子を叩いて瓦文の代用としている。丸・平瓦は1a・2類であるが、緑山遺跡のいずれの瓦もこの時期に入る。第Ⅰ期と同類の大谷瓦蒸跡の瓦と緑山遺跡の瓦を比較すると、丸・平瓦とも前者の方が厚い傾向にあるが、寸法はほぼ同じである。

この期の丸瓦は粘土板桶巻き造りである点が特徴であり、瓦のほとんどに白色針状物質を含んで



第134図 勝呂庵寺出土瓦の時期区分 数字は軒丸、軒平、九・平瓦別の類別番号

いる。

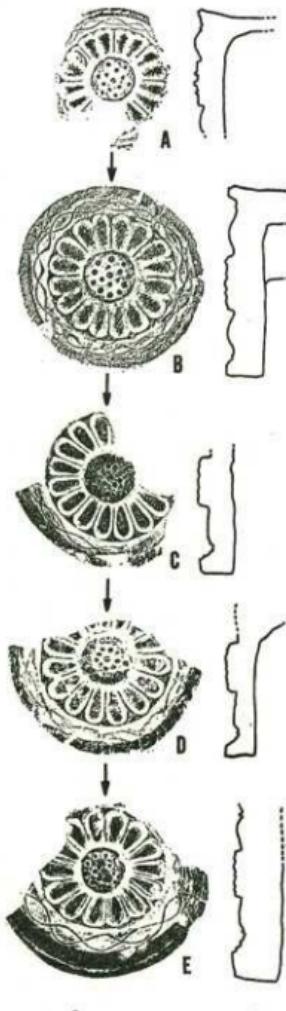
第Ⅲ期

交叉波状文を持つ单弁あるいは複弁瓦（第5類）に代表されるが、この瓦を国分寺創建期並行に置く見解もある。しかし第Ⅳ期に代表される武藏国分寺創建期の单弁瓦（第6類）と交叉波状文を持つ瓦が、勝呂において最も多く出土する型式である点からも、同時に存在したとは考えられず、また国分寺創建・再建瓦と深い関わりのあった勝呂廃寺から、なぜ一方の交叉波状文軒丸瓦だけが国分寺に行かなかったのか疑問である。以上のことから軒丸瓦第6類の前段階に置くことが妥当であろう。

⁽²⁰⁾ 交叉波状文の系譜を引く瓦で小形品が岡部町寺山遺跡にある。この瓦に伴うと考えられる平瓦も小形であるが、板目には斜行する斜格子叩き（5単位が3.7cm幅で、1単位が菱形を呈する）が施され、叩きを板状工具により撫で消したり、凹面の桶枠板真を撫で消す例がある。この技法は勝呂廃寺の第4類に類似している。また糸切りが端縁に並行している点も、勝呂廃寺平瓦第1b・1c類に類似している。

ここで岡部町寺山遺跡例も含めた交叉波状文軒丸瓦の系譜について触れてみたい（第135図）。勝呂廃寺の複弁8葉軒丸瓦（B類）は蓮子が $1+5+10$ で、交叉波状文の単位数は16である。寺山遺跡の瓦（A類）は波状文が同数であるが、蓮子が $1+6+6$ となり、面径も小形である。また複弁の弁端それぞれに反転が表現されている点も違う。寺山遺跡の瓦は精緻な作りであり、弁の高さも中房や外区よりも高く、蓮子も立体的な作りであることから、勝呂廃寺の複弁8葉軒丸瓦よりも先行すると考えられる。寺山遺跡複弁8葉軒丸瓦の先行形態については不明確であるが、弁の反転については勝呂廃寺第1期に見られるように、当地域では案外容易に模倣できたかもしれない。

交叉波状文軒丸瓦A類からB類へ面径が大きくなつた後は、勝呂廃寺内で面径の大きなまま单弁に変化する（C類）。弁数は16葉となり、複弁を分解した数と考えられる。波状文の単位も16から14に減少し、蓮子も $1+9+9$ に変化する。B類までは立体的なつくりであったが、C類に至つて弁と蓮子は低くなる。



第135図 勝呂廃寺交叉波状文軒丸瓦の変遷図 Aは岡部町寺山遺跡

D類は単弁15葉と減少するとともに、波状文も復元であるが13と少なくなる。しかし蓮子は変化しない。この類以降は弁の割り付けが歪むとともに、作りが悪くなる。このような変化が段階的につかめることは、時期差と考えられる。

E類に至っては単弁14葉となり、蓮子が $1 + 6 + 11$ と変化する。波状文は12となり、波状文の振幅が大きくなる特徴を持つ。また中房と内区の径が、僅かに縮小する。

先にも触れたように、交叉波状文系軒丸瓦が国分寺創建瓦より遡ると考えられ、その最終様式がE類とすることができる。交叉波状文の変遷を5段階と数えるならば、寺山遺跡や勝呂廃寺のA類とB類の瓦は、第Ⅱ期の初頭、8世紀第2四半期初頭と考えたい。

軒平瓦は第3類の範型三重弧文が伴うと考えられる。平瓦は第1b・1c類の平行叩きや第4類の長方形叩きが伴い、第5類の須恵器と同技法の叩きは、軒丸瓦第5類に同様の焼成・色調がみられることから、この時期に入れてよいと考える。

この期の瓦の胎土を見ると、軒丸瓦第5類は白色針状物質を全く含まず、平瓦第4類も同様である。それに対して第1b・1c・5類は白色針状物質を含むので、生産地の違いが考えられる。

第Ⅳ期

軒丸瓦第6類に代表されるが、軒平瓦は第4・5・6類が、平瓦は第6・7・8類がある。多くは武藏国分寺に見られ、軒丸瓦第6類は有吉重蔵氏が上野系（I）あるいは上野系の文様意匠を繼承した国分寺系とした瓦（II）に類似している。⁽²¹⁾ 国分寺では三重弧が伴うと考えられているが、勝呂廃寺では三重弧は二点が紹介されているだけである。他に五重弧（第4類）、重崩文（第5類）があり、前者の同類が大仏廃寺から出土して、荒い繩叩きが施されている。国分寺系の瓦とセットになるとは断言できないが、ほぼ同時期の所産と考える。軒平瓦第6類が赤沼窯跡から出土しており、生産地の一ヶ所がわかるが、軒丸瓦第6類には白色針状物質を含まず、軒丸・平瓦にも含まない例が多い。この時期までが平瓦に桶枠板痕が見られる。

第Ⅴ期

第7類の軒丸瓦を代表とするが、軒平瓦は第7・8・9・10・11類と多種にのぼり、平瓦は第9・10類がある。多くは武藏国分寺に見られ、平瓦第10類は新久窯跡に類例がある。軒丸瓦第7類は武藏国分寺の宝相華文軒丸瓦の系譜を引いていると考えるが、軒丸瓦第7類の類似例は上植木廃寺にも見られる。また第9類の籠描き軒平瓦も上野にあり、この種の瓦が上野との関わりの中から生まれたと考えられる。⁽²²⁾

当期は承和12年の国分寺塔再建以降と考えられる。この期の瓦は白色針状物質を含まず、須恵質に焼成された例が多いが、鳩山町を中心とする南比企丘陵が生産地であろう。

勝呂廃寺の発掘によれば寺域を区画する溝の上に住居跡がつくられており、10世紀後半にはすでに廃寺となっていた可能性が考えられている。

4. 勝呂廃寺の歴史的背景

勝呂廃寺の創建期の瓦に飛鳥寺系の変形種と考えられる軒丸瓦が使用され、その供給先の一つとして赤沼窯跡が、類例として大谷瓦窯跡が見られることは注目される。また大谷瓦窯跡の西南4kmには飛鳥寺系の素弁軒丸瓦を出土する寺谷廃寺がある。勝呂・寺谷廃寺とも、周辺の古墳群築造

者である首長層の系譜を引く者が建立したと考えられるが、古墳築造時には須恵窯跡を保有しており、前者は桜山・根平・舞台が、後者は羽尾・平谷が知られる。このような勝呂・寺谷廃寺を含む地域は、古墳時代から西方の文物を受け入れるだけの背景があったと考えられる。一つの推測は、金井塚良一氏が想定されている武藏型胸張り古墳を墓制とした壬生吉士氏との関連である。金井塚氏によれば武藏型胸張り古墳は70例にのぼり、その分布地域は東松山市とその周辺地域・荒川中流域右岸段丘地域の2つが中心とされている。この広がりは大谷—赤沼—勝呂を結ぶ地域と一部重複しており、勝呂廃寺周辺では坂戸市新町古墳、立野遺跡付近の田木山2号墳が知られる。

金井塚氏は「壬生吉士氏を橋樹郡の飛鳥部吉士氏とともに、それぞれ横沼屯倉と橋花屯倉の二つの屯倉掌管者として、屯倉の設置とともに武藏に移住した、渡米集団と考え」られている。これについては原島礼二氏も同様な見解を示されている。

岸俗男氏は、古代の「べ」の称呼を表示する用字として「部」と「戸」があり、「戸」は渡米氏族に対して6世紀代に中央権力が幅戸して支配することによって生まれた称呼であり、飛鳥戸、横戸、八戸等は日本における「戸」の源流としての意義をもつとされた。この中で武藏の飛鳥部をとり上げているが、武藏の飛鳥部氏は景雲2(768)年、白雉を獲て献じた橋樹郡の飛鳥部吉志五百国と、天平6(734)・11(739)年の正倉院調布にみえる、男衾郡端倉郷の飛鳥部虫麻呂の二人が知られる。前者は金井塚・原島両氏の屯倉掌管者と考える飛鳥部吉士氏であり、後者は壬生吉士氏と同じ男衾郡に居住していた。両地域に渡米集団がいたと推定できうるならば、それぞれに分布する注目できる瓦が存在する。

一つは先に述べてきた飛鳥寺系の軒丸瓦に子葉を加えた、大谷・赤沼瓦窯跡、勝呂廃寺に分布する単弁軒丸瓦であり、他の一つはかつての橋樹郡であった。川崎市高津区影向寺出土の二種の単弁8葉軒丸瓦である。影向寺出土の一種



第136図 寺院、古墳、窯跡の関連概念図

- | | | |
|-----------|---------|---------|
| 1. 平谷窯跡 | 2. 羽尾窯跡 | 3. 舞台窯跡 |
| 4. 根平窯跡 | 5. 桜山窯跡 | 6. 立野遺跡 |
| 7. 小用窯跡 | 8. 脚折遺跡 | 9. 山田遺跡 |
| 10. 若葉台遺跡 | | |

は勝呂廃寺とほぼ類似するが、子葉が僅かに太く弁端が反転しない。他の一種は、弁と外区の間に線鋸齒文を配している。

子葉を持つこの種の瓦の系譜は、先に飛鳥寺系と記して来たが、導入には男衾郡・橘樹郡に居住した渡来人がかかわっていたと推考したい。特に勝呂廃寺例のように、弁端が反転して子葉を持つ軒丸瓦は百濟の故地の扶余にみられ、百濟系の瓦と考えられる。しかし、勝呂廃寺例などの単弁軒丸瓦が直接半島から来たのか、寺谷廃寺のような素弁軒丸瓦から作り出したものか断言できない。

後に述べるよう壬生吉士氏は武藏国分寺塔再建を願い出ており、その主要窯跡の一つが勝呂廃寺創建時の窯跡とほぼ同一地域にあること、塔再建時の瓦が勝呂廃寺からも多量に出土することからも、壬生吉士氏が勝呂廃寺に深くかかわっていたと推考される。

勝呂廃寺第Ⅰ期には立野遺跡の埠と緑山遺跡の瓦との有機的な関連がうかがえる。両遺跡とも南比企丘陵産の須恵器を検出しておらず、特に前者は須恵器選別場と推考できるほど多量に出土している。また立野遺跡では小形陶棺が出土しており、寺院との関連が推測できるが、問題が派生するため、これについては後日改めて述べることとする。立野遺跡の第2・3号住居跡は $7.8 \times 6.9\text{ m} \cdot 7.25 \times 6.2\text{ m}$ と、同時期の住居跡と比較しても大型である。両跡は主軸を同じくするが1.2mしか離れておらず、須恵器からみるに2号住居跡の方が新しい傾向を示す。立野遺跡の埠は完存に近い例で幅17.2cm、残存長52.5cm、厚さ2.7~3.4cmを測り、他に角欠きをする例もあることから、須弥壇などに使用されたと考えられる。このように立野遺跡の居住者は、窯跡で製作された須恵器・埠・陶棺などの製品管理者であり、製作工房の統率者であったと考えられる。この地からさらに勝呂廃寺あるいはその建立層へ供給されたと推考される。立野遺跡の近くの田木山第2号埠は、立野遺跡と同類のかえり蓋を出土することから、須恵器生産統率者あるいはその掌握層の墳墓の可能性も考えられる。

緑山遺跡6号住居跡は5m弱であるが、この時期としてはやや大型であり、8号住居跡からは粘土塊を検出しておらず、立野遺跡に続いてこちらは主に瓦工房を統率していたと想定したい。現在まで立野・緑山遺跡付近には同時期の窯跡は検出されてはいないが、立野遺跡における多量の須恵器を見ると、遠距離ではないであろう。

第Ⅲ期には勝呂廃寺独自の瓦当文が生まれ、軒丸瓦の胎土・技法が第Ⅰ・Ⅱ期と違っており、変革期と考えられる。祖型となる瓦が榛沢郡寺山遺跡にあり、この時点で勝呂廃寺が武藏北部と関連を持っていたことが推測できる。同じ榛沢郡内の馬騎の内廃寺からは、平行叩きと同心円を持つ須恵器の技法でつくられた瓦が存在しているが、同類は勝呂廃寺の第Ⅲ期にもあり、平行叩きの盛行するのもこの時期である。馬騎の内例の方がやや先行すると考えられるが、いずれにしろ8世紀前半代に瓦生産に須恵器工人の参画があったことが推測できる。

第Ⅳ期は勝呂廃寺と関連を持つ有力氏族が国分寺創建に協力したようで、創建時の上野系瓦の採用は、このような武藏北部と強い関係を持った有力氏族によってなされたのであろう。

国分寺創建時の瓦窯は南比企窯跡群の新沼・金沢（以下泉井）・堀田（以下赤沼）、南多摩窯跡群の大丸、東金子窯跡群の水排・柿ノ木、末野窯跡群の赤岩などが知られているが、各窯跡から出土している郡銘瓦について検討してみる。

武藏国府へ供給されたと考えられる埴を焼成した窯は、国分寺瓦窯跡を破壊しているといふ。埴の郡銘は高麗郡を除き19郡出土しており、瓦窯からは14郡が発見されている。このように郡銘瓦が多いのは、国分寺に近い地理的条件によるのであろう。やや離れる東金子窯跡群の水掛・柿ノ木では10郡が発見されている。さらに北の泉井では、久良岐・橋樹を除いて18郡、赤沼では13郡がみられる。⁽³⁰⁾ 末野では多摩・秩父・那珂・榛沢の4郡である。このように見ると泉井・赤沼は、国分寺瓦窯として中心的役割を担っていたといえる。東金子窯跡群の位置する入間郡銘は、泉井から発見されているが、泉井・赤沼の位置する比企郡銘は東金子から発見されていないことからも、泉井がより中心的位置にあったと推測できる。

この南比企窯跡群を掌握していたのが、当初からこの地で窯業生産を掌握していた勝呂庵寺と関連を持つ有力氏族であろう。このような武藏北部の有力氏族の協力で、国分寺は創建が開始されたと考えられる。有吉重蔵氏は国分寺の創建瓦が上野系から平城宮系に変わること、その瓦が南武藏⁽³¹⁾に集中分布することは、当初の北武藏主導型から南武藏主導型の造営体制に変化したと考えられた。平城宮系の瓦は主に東金子窯跡群で焼成されたようで、南比企や勝呂庵寺に見られないことは、南比企・勝呂が平城宮系の瓦に関与する系譜からはずれていたことを示す。

南武藏の有力氏族として、高麗郡では国分寺建立前後から從三位までのぼった高麗福信が活躍を始め、建立以後は遣高麗大使の高麗朝臣大山、入間郡では入間宿禰で遣東大寺次官になった物部広成、西大寺に財物を施し、後に從五位下を追贈された大伴部赤男がいた。足立郡では上総員外介になり、武藏国造でもあった人部直不破麻呂、采女掌侍兼典拂從四位下となった武藏宿禰家刀自、從五位下で武藏国造となった足立郡大領武藏宿禰弟總、從五位下の多米連福雄などがいた。

勝呂庵寺第Ⅴ期に到り北武藏にも有力氏族が台頭するようで、埼玉郡壬生氏出身で天台座主となった円澄や、男衾郡大領で二人の子の調庸前納を請うた壬生吉士福正がいた。この福正が焼亡後10年を経た国分寺塔再建を行なっているが、瓦の生産にはやはり南比企窯跡群も使っている。この時期の南比企窯跡群の瓦は国分寺とともに、勝呂へも供給され、壬生吉士—勝呂庵寺—南比企窯跡群の関係が推測できる。福正の財力の背景の一つに、南比企窯跡群の須恵器生産を想定したい。

白色針状物質の入った南比企丘陵産の須恵器は、武藏国のはば全域に広がっていることが確かめられている。特に平安時代には商品としての須恵器が河川などを使って運ばれ、市などで売買されたと考えられる。それらの生産組織を掌握していたのが郡司層である壬生吉士氏などの有力者であったろう。彼らは以前からの地縁的なつながりを保ち、郡を越える関係も続いていると考えられる。

5. おわりに

赤沼、緑山遺跡などのあった高坂丘陵は比企郡都家郷、勝呂庵寺は入間郡麻羽郷あるいは余戸郷と考えられ、大谷瓦窯跡を金井塚氏は横見郡御坂郷、原島氏は大里郡内としている。また壬生吉士氏居住の男衾郡の郡家郷は小川町付近にあてられている。このような先学の郷名比定が正しいとすれば、今まで問題にしてきた各遺跡は、各郡、各郷に渡っていることになる。

高橋一夫氏は勝呂庵寺を入間郡において有力氏族により建立された寺と考えられ、付近の瓦・奈良三彩を出土した山田遺跡や、倉庫群などを検出した郡衙の性格、豪族の館と目される若葉台遺跡との関連を推測されている。そして8世紀第2四半期に到り、氏寺から郡寺的なものへと性格を変

(32)
えていったと考えられている。

勝呂庵寺第Ⅰ期に代表される単弁の同範同系瓦が、地域を越えて存在しており、7世紀後半代におけるこのようなあり方は、壬生吉士氏に代表される渡来系氏族の同族的性格が起因していると考えられる。中心となる勝呂庵寺は、同族的意識のもとに建立された氏寺的性格の寺院と推考したい。第Ⅲ期に瓦当文と技法、胎土の上から変革があったようであるが、高橋氏が述べるように郡寺的なものへと性格を変えていったかどうか、今後の検討が必要である。また勝呂庵寺の所在地は入間郡であることは定説となっているが、郡衙的性格と目される若葉台遺跡も同郡の北端に位置することから、男衾・比企・入間郡の郡境の再検討が必要であろうと考えている。

勝呂庵寺の第Ⅱ期に関わる緑山・立野遺跡などは、製品管理者であり、製作工房の統率者の居住地と考えたが、窯と工房を含めた製作工房群を数単位掌握する、統率者であったと想定したい。彼らのような中間層を通して、須恵器・瓦が郡司層・寺院に納入されたのであろう。

脱稿後・坂戸市教育委員会加藤恭朗氏から、勝呂庵寺軒丸瓦第2類の丸瓦部が桶巻造りであると御教授を受けた。この点からもⅠ・Ⅱ期は製作技法・胎土の上で同系譜であり、第Ⅲ期に至り変革していることがわかる。

(酒井 清治)

註

- (1) 宇津川徹・上条朝宏「土器胎土中の動物珪酸体について」『考古学ジャーナル』181・184号 1980
- (2) 林 繩善「勝呂庵寺址」『埼玉史談』133号 1930
- (3) 田中一郎「勝呂庵寺跡考」『埼玉史談』811号 1961
- (4) 坂戸市郎「勝呂庵寺の古瓦」『坂戸風土記』第2号 坂戸市史編纂室 1978
- (5) 田中一郎他「勝呂庵寺」坂戸市教育委員会 1981
- (6) 註(4)の図20
- (7) 高橋一夫「大谷瓦窯跡」『東松山市史』資料編第1巻 東松山市 1981
- (8) 柴田常恵氏拓本資料に「比企、今宿、赤沼、水穴前御林裾」とある。同一地名の記された国分寺瓦もあり、県史跡である「赤沼国分寺瓦窯跡」(福村坦元他「埼玉県比企郡今宿瓦窯址」『日本考古学年報』3誠文堂新光社 1955)と同一窯跡か不明である。赤沼国分寺瓦窯跡から山下守昭氏によって、緑山遺跡と同技法、類似胎土の平瓦が採集されており、同窯の操業開始が国分寺創建時以前に遡る可能性がある。
- (9) 高橋一夫他「埼玉県古代寺院跡調査報告書」埼玉県史編纂室 1982 で単弁15種と報告されたが、訂正するとともに時期も創建瓦でなく、後に述べるようにやや新しいと考えられる。
- (10) 註(4)の図14
- (11) 山下守昭氏より資料の提供を受けた。
- (12) 石田茂作「飛鳥・白鳳の寺院」『飛鳥時代寺院址の研究』P103 第一書店 1936
- (13) 高橋一夫「埼玉県古代庵寺跡発掘の現状」『歴史手帖』10巻10号 名著出版 1982
- (14) 多字邦雄「下総竜角寺について」『古代探観』P484 早稻田大学出版部 1980
- (15) 大江正行「金井庵寺の意義」『金井庵寺跡』吾妻町教育委員会 1979

- 06 林 博通他『桜木原遺跡発掘調査報告書』図版69 滋賀県教育委員会 1975
- 07 註9)の第47図
- 08 今井 宏他『児沢・立野・大塚原』埼玉県遺跡発掘調査報告書第28集 埼玉県教育委員会 1980
- 09 板野和信「北武藏における古代瓦の変遷」P169 註9)と同じ。また国分寺創建以降、8世紀後半代に置く見解もあるが、単弁系の発達した武藏国において、しかも国分寺に単弁が採用されてからちに複弁は出現しなかつたと考えたい。
- 10 高橋一彦「岡部町岡より出土する布目瓦」『いぶき』8・9合併号 県立本庄高等学校考古部 1975
- 11 有吉重蔵「東京都古代廐跡発掘の現状」註8)と同じ
- 12 宝相華文軒丸瓦に「河」の籠書きがある(大川 清『武藏國分寺古瓦塙文字考』小宮山書店 1958)。宇野信四郎氏によれば、那珂郡銘の瓦は、泉井・赤沼・末野から(宇野信四郎『武藏國分寺の文字瓦—窯跡出土例を中心として—』『日本歴史考古学論叢』第2 雄山閣 1968)。大川氏によれば東金子・大丸・本部からも発見されている。しかし多くは刻印で、籠書きは泉井から発見されており、「河」の軒丸瓦も武藏北部でつくられたと考えられる。
- 13 金井塙良一「北武藏の古墳群と渡来氏族吉士氏の動向」『武藏考古学資料図鑑』校倉書房 1976
- 14 原島礼二「関東地方と帰化人」『台地研究』No.19 台地研究会 1971
- 15 岸 俊男「日本における『戸』の源流」『日本歴史』197 1954
- 16 県史編集室編『神奈川県史』資料編20 1979
- 17 朴 容頃、泊 勝美訳「百濟瓦当の体系的分類一軒丸瓦を中心としてー」『百濟文化と飛鳥文化』吉川弘文館 1978
- 18 勝呂(スグロ)は渡来氏族の姓「村主(スグリ)」の転化だといわれ、坂戸市内に他に2ヶ所の勝呂があることは、渡来氏族との関連を考えるに1つの材料となろう。
- 19 野部徳秋他『田本山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川』埼玉県発掘調査報告書第5集 埼玉県教育委員会 1974
- 20 註8)の両文献の他、坂詰秀一「武藏・谷津池窯跡」『台地研究』15 台地研究会 1964、同「武藏國分寺瓦窯跡の性格」『考古学ノート』1971
- 21 註8)と同じ。このような動きは宝亀2(771)年、東海道に転属した背景にもうかがえる。
- 22 註8)のP190

VI 付 篇

緑山遺跡出土遺物の化学的分析

はじめに

近年、各地で調査された生産遺跡である各種窯跡の試料に化学的検討が加えられ、そこで生産された製品の供給先の追究、製作に係わる工人達の組織の解明及び製品原料の採取地の追求解決のために、有益な素材を提供している。

物見山丘陵では、須恵器窯跡と埴輪窯跡から構成される桜山窯跡群の資料に化学的検討が加えられている。緑山遺跡は瓦生産に係わる遺跡と思われ、また、近接して所在する同時期の須恵器生産に係わる立野遺跡との関連も踏まえ、桜山窯跡群緑山遺跡、立野遺跡の試料に化学的検討を加え、上記課題解決のための一素材を提供したい。

A 重鉱物分析

1. 試料

今回の分析試料は、埼玉県西部に位置する物見山丘陵に分布する緑山遺跡・立野遺跡・桜山窯跡の各遺跡より出土した土器片及び粘土試料等で合計24点である。これらの試料について、試料番号・遺跡名・註記・種類・土器片の部位・色調等をまとめて試料表とした。

試料表

No.	遺跡	出土地点	種類・位置	色 調	No.	遺跡	出土地点	種類・位置	色 調
1	緑山	E 8 表土	平 瓦	5 YR 1/4 明茶褐色	13	緑山	9 住フク土	土師坏口縁部	7.5 YR 1/4 銀い橙色
2	"	D 4 表土	"	7.5 YR 1/4 橙 色	14	"	"	土師窯胴部	7.5 YR 1/4 橙 色
3	"	E 8 茶褐色	"	"	15	"	8 住フク土	粘 土	
4	"	F 6 表土	丸 瓦	7.5 YR 1/4 銀い橙色	16	立野	瓦 塚	2.5 Y 1/2	灰 白 色
5	"	E 1 表土	須恵壺口縁部	7.5 Y 1/2	17	"	a b - 30 - 31	須恵窯胴部	10 Y R 1/2
6	"	D 6 茶褐色	"	灰 色	"	"	a b - 21 - 22	須恵壺口縁部	2.5 Y 1/2
7	"	土	須恵壺蓋天井部	5 Y 1/2	18	"	x - 21 - 22	須恵壺蓋天井部	明灰黄色
8	"	H 8 表土	須恵坏身底部	10 Y 1/2	19	"	c d - 30 - 31	底部	2.5 Y 1/2
9	"	D 7 橙褐色土	須恵壺蓋口縁部	5 Y 1/2	20	"	"	土師窯底部	灰 白 色
10	"	6 住貯蔵穴	土師坏口縁部	10 Y 1/2	21	"	b - 24	黑色土	5 Y 1/2
11	"	6 住カマF	土師窯胴部	5 Y 1/2	"	"	"	土師窯底部	銀い赤褐色
12	"	8 住フク土	土師坏口縁部	5 Y 1/2	22	2 住フク土	"	"	"
					23	"	"	土師窯口縁部	"
					24	桜山	8 号窯跡	須恵壺蓋口縁	7.5 Y 1/2
									灰 色

2. 分析方法

乾燥試料秤量—鉄乳鉢で軽く粉碎—脱鉄処理 (Mackenzie 法)—超音波による分散—篩分により 1/4~1/16mm の粒度抽出—重液分離 (テトラブロモエタン、SG=2.96) —重鉱物秤量—ブレバーラー作製—偏光顕微鏡にて重鉱物約300個体以上を同定。

3. 分析結果

No.15の粘土試料を除くと、土器試料は鉱物粒子の分散が良好でない。従って、今回分析の対象と

なった1/4~1/16mmの粒度の粒子の中には、焼成前から砂粒子として存在していたものと、焼成前は粘度だったものが焼かれたことによって、上記分析法では壊れない粒子として存在しているものと含んでいることを、ここでお断りしておく。

次いで以下に各試料ごとに重鉱物の特徴について述べる。

N_o 1 (緑山遺跡、E 8 G表土、平瓦)

不透明鉱物が半数を占める。褐色普通角閃石が多産することが特徴である。全体的に鉱物が赤褐色を帯びており、自形結晶が殆んど見られず、こわれた粒子が多い。斜方輝石の中に極めて僅かだが、周囲に火山ガラスが付着したものが検出された。これらの他に単斜輝石・緑色普通角閃石・緑レン石・ジルコン(無色長柱状)・ザクロ石等が検出された。

N_o 2 (緑山遺跡、D 4 表土、平瓦)

鉱物粒子が比較的細かい。不透明鉱物が全体の約2/3を占める。普通角閃石は、緑色でこわれたものが多い。斜方輝石および単斜輝石も、こわれた粒子が多い。緑レン石は小粒で丸味を帯びる。ジルコンは無色で自形~半自形を呈するが、やや丸味を帯びた粒子も見られる。淡い桃色を帯びたザクロ石が微量検出された。

N_o 3 (緑山遺跡、E 8 褐色土、平瓦)

鉱物全体が比較的細粒である。不透明鉱物が全体の3/4を占める。角閃石族よりも輝石の方が多い。一部の斜方輝石には火山ガラスの付着も検出された。普通角閃石は緑色のものが多く、粒子はこわれている。単斜輝石・緑レン石の外、カンラン石・ジルコン等が微量検出された。

N_o 4 (緑山遺跡、F 6 G A B層、丸瓦)

N_o 3と類似している。不透明鉱物が8割近く占める。斜方輝石・普通角閃石の多くはこわれている。ジルコンは自形~半自形を示す。カンラン石・単斜輝石・緑レン石等も産出している。

N_o 5 (緑山遺跡、E 1 表土、須恵、壺)

不透明鉱物が約8割を示す。斜方輝石が9%を産出するほかは、カンラン石・緑色普通角閃石・緑レン石・ジルコン等、共に微少な検出しか認められない。ジルコンの半自形以外は、こわれた粒子が殆んどである。不透明鉱物はゴツゴツした感じの粒が多い。

N_o 6 (緑山遺跡、D 6 第3層、須恵、壺?)

N_o 5と同様、ゴツゴツした感じの不透明鉱物が多く、全体の3/4を占める。角閃石族は褐色普通角閃石が多く、一部は暗褐~黒褐色を呈するものも含まれ、粒はこわれている。斜方輝石も他形が多い。本試料中のジルコンは周囲に火山ガラス片が付着したものが多く見られ、また、バブル・ウォール(Bubble Wall)型火山ガラスが幾つか含まれている。カンラン石・単斜輝石も微量検出された。

N_o 7 (緑山遺跡、D 6 第3層、須恵、壺蓋)

重鉱物量が少なく、ゴツゴツした不透明鉱物が全体の94%を占める。自形~半自形のジルコンが産出するが、ガラスの付着は認められない。この外、カンラン石・斜方輝石・単斜輝石・緑色普通角閃石等が微量検出されている。

N_o 8 (緑山遺跡、H 8 表土、須恵、壺身)

ゴツゴツした不透明鉱物が82%を占める。斜方輝石は10%程度含まれ、こわれた粒が多い。角閃

石族はきわめて少ない。自形のジルコンが微量含まれる。

N_o9 (緑山遺跡、D7褐色土、須恵、坏)

N_o7と同様、ゴツゴツした感じの不透明鉱物が92%と極めて多産する。自形～半自形のジルコンとこわれた輝石族が少量検出される。全体に鉱物粒子が細かい。

N_o10 (緑山遺跡、6号住居貯蔵穴、土師、坏)

不透明鉱物は全体の1/3程度を占める。ゴツゴツした感じの粒子が含まれ、それらのうち一部は反射光で赤黒色に見える。こわれた形態の緑レン石が、20%と多産する。一部に長柱状の粒子を含む緑色角閃石および斜方輝石が、これらに続く。一部の斜方輝石には火山ガラスの付着が認められる。ジルコンは自形結晶が見られる。その他の鉱物はこわれている。

N_o11 (緑山遺跡、6号住居、カマド内、土師、甕)

不透明鉱物は約半数を占める。比較的新鮮で自形～半自形の黒色粒子が多い。反射光で赤味を帯びる不透明鉱物も含まれる。緑色及び褐色の普通角閃石が合わせて41%と多産する。角閃石族と斜方輝石はこわれた粒子が多く、一部柱状を呈す。火山ガラスを付着させた斜方輝石も若干認められる。また、他の試料と同様、緑レン石・ジルコンを微量含む。

N_o12 (緑山遺跡、8号住居、土師、坏)

不透明鉱物はゴツゴツした感じではなく、全体の16%と比較的低率である。緑レン石が多産すること、こわれた形の淡緑～青緑色の角閃石及び「その他」の鉱物を伴うことが特徴である。普通角閃石と斜方輝石は多くがこわれて、一部の斜方輝石には火山ガラスの付着が見られる。こわれたカンラン石・ザクロ石、及び自形のジルコン等が微量検出された。全体に赤褐色を帯びた感じの鉱物が多い。

N_o13 (緑山遺跡、9号住居、土師、坏)

不透明鉱物は自形～半自形の形態が見られ、全体の43%を占める。輝石族はこわれた粒子が多い。緑色普通角閃長柱状自形結晶を含む。また、カンラン石・褐色普通角閃石・酸化角閃石・淡緑～青緑色角閃石・緑レン石・ザクロ石等はこわれている。ジルコンは自形が検出される。

N_o14 (緑山遺跡、9号住居、土師、甕)

長柱状でこわれた形態を呈する緑色普通角閃石が40%近く、及び同様の斜方輝石が30%とそれぞれ多産する。不透明鉱物は23%を占め、自形～半自形の結晶を含んでいる。こわれた形態の淡緑～青緑色角閃石・单斜輝石・緑レン石のほか、自形のジルコン等を僅かに含む。全体にやや赤褐色がかかった色調を示す。

N_o15 (緑山遺跡、8号住居、粘土)

各鉱物の産出割合はN_o14と同様の傾向を示している。分析試料中唯一の焼かれていない試料なので、比較的新鮮である。自形結晶が含まれる緑色普通角閃石の中には、淡緑色で長柱状のものが見られる。これと同様の鉱物がN_o21にも認められる。斜方輝石・不透明鉱物・ジルコンにおいては自形結晶も含まれる。单斜輝石・褐色普通角閃石・青緑～青色角閃石・緑レン石・ザクロ石・カンラン石等はこわれた粒子からなる。

N_o16 (立野遺跡、瓦塙)

不透明鉱物はややゴツゴツしたものが少量混入しているが、多くはこわれた形態の平滑な不透明鉱物で、全体で約80%と高率を占める。自形で検出されるジルコンを除くと、他の鉱物は殆んどこわれている。

No.17 (立野遺跡, ab-30・31G, 須恵, 瓢)

全体に赤褐色を帯びている。不透明鉱物はゴツゴツした感じで、全体の80%を占める。反射光で赤黒色を呈する粒子が多い。輝石や角閃石では不透明な物質でおおわれている場合が見られる。ジルコンの自形を除くと、他の鉱物粒子はこわれている。

No.18 (立野遺跡, ab-22・23G, 須恵, 盆)

不透明鉱物はゴツゴツしたものが混り、全体で55%を占める。斜方輝石、単斜輝石はこわれた形態が多く、一部に柱状粒子もある。普通角閃石・カンラン石・緑レン石はこわれている。ジルコンは、半自形を呈する。「その他」に平板状の褐色鉱物が含まれる。

No.19 (立野遺跡, X-21・22G, 黒褐色, 須恵, 坂蓋)

不透明鉱物は全体で86%を占める。ゴツゴツした粒を含むが、そうでないものの方が多い。ジルコンは丸味を持った粒子が多い。その他の鉱物もこわれた形態を示す。

No.20 (立野遺跡, Cd-30・31G, 須恵, 坂身)

全体的に細粒である。不透明鉱物はゴツゴツしており、95%を占める。自形のジルコンを除く他の鉱物はこわれており、それぞれ僅かに検出される。

No.21 (立野遺跡, b-24G 黒色土, 土師, 瓢)

不透明鉱物は反射光で赤黒色になるものと、比較的新鮮で光沢を呈する黒色の粒子とが含まれ、全体で37%を占める。火山ガラスが付着した不透明鉱物も僅かに見られる。長柱状自形結晶を含む緑色普通角閃石が約28%を占めるが、前述したように淡緑色のものも含んでいる。斜方輝石は自形結晶が含まれ、周囲に火山ガラスが付着しているものが若干見られる。単斜輝石・褐色普通角閃石・淡緑～青緑色角閃石・緑レン石・ザクロ石等はこわれている。ジルコンは自形を示す。

No.22 (立野遺跡, 4号住居, Y-20・21G, 土師, 瓢)

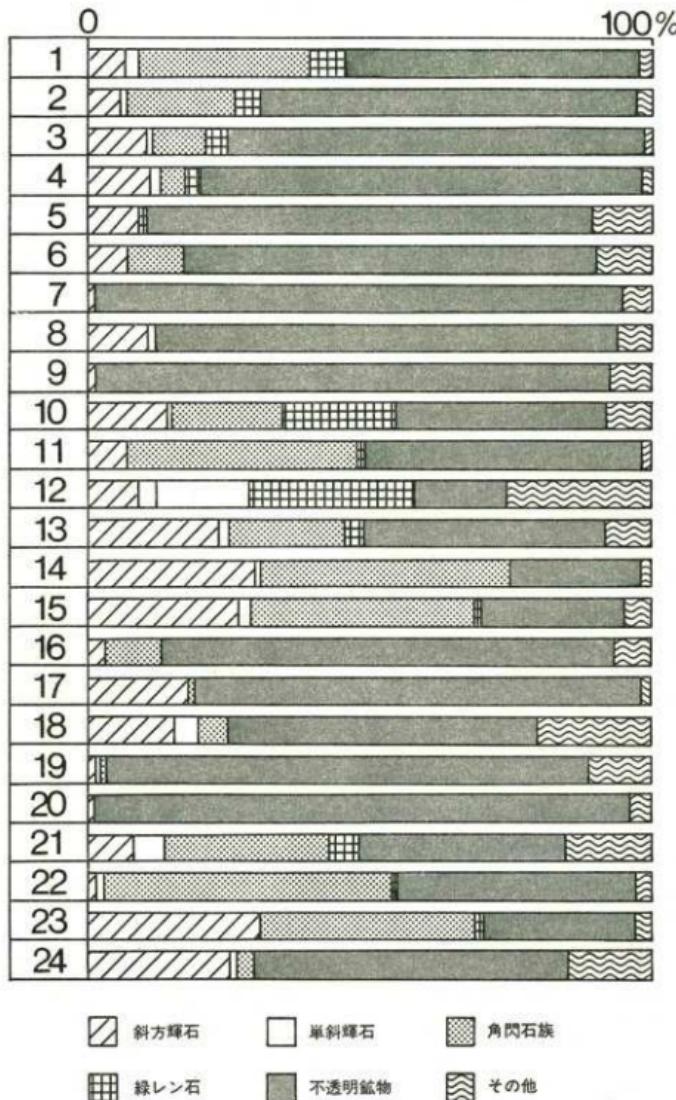
全体に赤褐色を帯びる。長柱状自形粒子を含む褐色普通角閃石が、約50%を占める。但し、本試料中に含まれる褐色普通角閃石は緑色普通角閃石との間接的色調を呈するものが多い。これは土器を作成する過程で、本来緑色のものが褐色に変化した可能性も考えられるので今後の検討が必要であろう。緑色普通角閃石はこわれた形態を呈する。ジルコンは自形の他に丸味を持った粒子も見られる。輝石・緑レン石はこわれている。

No.23 (立野遺跡, 2号住居貯蔵穴, 土師, 坂)

柱状を呈するこわれた褐色普通角閃石(27%)及び緑色普通角閃石(約11%)が含まれる。また、同様の斜方輝石(約30%)・単斜輝石(0.3%)の一部には火山ガラスの付着した結晶も若干認められる。ジルコンは自形で、緑レン石・ザクロ石はこわれている。

No.24 (桜山窯址, 8号窯灰原, 須恵, 坂蓋)

不透明鉱物はゴツゴツしており、全体の56%を占める。斜方輝石はこわれた粒子が多く、25%を示す。単斜輝石・普通角閃石もこわれている。ジルコンは自形結晶を含む。



第137図 重鉱物組成図

土器胎土試料重鉱物組成

1 No	2 SAND %	3 HM%	4												5 TO- TAL
			O L	O P X	C P X	G-HO	B-HO	O-HO	A M	E P	Z R	G	O P Q	E T C	
1	24.9	0.9	6.4	2.3	4.6	25.9			6.6	0.3	+	52.2	1.7	347	
2	20.7	0.5	5.3	0.8	19.1	0.8			4.3	1.3	0.3	67.3	0.8	392	
3	25.5	0.7	+	10.3	1.1	8.2	1.1	0.2	3.8	0.2		74.4	0.7	449	
4	28.2	0.7	0.3	10.7	1.8	3.5	0.9		2.7	0.3		78.9	0.9	337	
5	33.4	0.4	+	8.9		0.6			0.6	1.0		79.7	9.2	315	
6	14.1	0.3	0.3	6.6	0.3	0.9	8.8			0.6		73.8	8.7	320	
7	27.7	0.2	0.3	1.0	+	+				0.9		94.0	3.8	315	
8	33.9	0.4		10.3	1.1	0.3				0.6		82.2	5.5	348	
9	28.0	0.2		1.2	0.3					1.5		91.5	5.5	328	
10	29.2	0.3		14.2	0.6	16.8	2.5	0.6	20.3	1.0	0.6	37.7	5.7	316	
11	33.0	3.5		6.5		22.4	18.6			1.5	+	49.4	1.6	322	
12	9.3	9.8	0.3	8.8	3.3	4.9	2.8		8.8	29.5	+	+	16.4	25.2	329
13	7.2	0.8	0.6	23.3	1.6	17.9	1.6	0.6	0.6	3.5	+	0.3	43.0	7.0	314
14	42.9	3.1		29.9	0.6	38.3	5.5		1.0	0.3	0.3		23.1	1.0	308
15	7.3	8.1	2.0	26.7	2.0	39.1	0.6		0.3	1.2	0.3	+	25.8	2.0	345
16	28.6	0.9		2.7	0.3	7.1	2.7			0.3	1.2	80.9	4.8	335	
17	25.5	0.6		17.6	0.3	0.9				+		79.8	1.4	346	
18	35.5	1.2	+	15.7	4.2	3.2	1.9		0.3	0.3		55.1	19.3	312	
19	27.9	0.3		1.1		0.3				1.4	1.9	86.3	9.0	366	
20	28.4	0.7		0.9	0.3	0.3				0.3	0.3	95.1	2.8	326	
21	36.6	1.1		7.9	5.4	27.5	0.9		0.9	5.7	0.3	1.5	36.6	13.3	331
22	34.2	3.6		1.1	1.1	2.3	49.4			1.1	0.9		42.6	1.5	350
23	12.1	1.0		30.5	0.3	10.8	27.1	0.3		1.6	0.3	0.3	26.6	2.2	361
24	28.7	0.3		25.1	1.0	0.3	2.6			1.0			56.1	13.9	310

コラム1：試料番号 コラム2：1/4-1/16mmの砂分の割合（重量%）コラム3：1/4-1/16mmの重鉱物の割合（重量%）コラム4：重鉱物組成（粒度%）OL：カンラン石 OPX：斜方輝石 CPX：单斜輝石 G-HO：緑色普通角閃石 B-HO：褐色普通角閃石 O-HO：酸化角閃石 AM：その他の角閃石族 EP：緑レンズ石 ZR：ジルコン G：ザクロ石 OPQ：不透明鉱物 ETC：その他 コラム5：重鉱物同定総数

4. 考察

今回の分析の目的は重鉱物組成によって、土器がどのように特徴づけられるかを調べることであった。以下、今回の結果から考えられることを若干述べる。

一般に須恵器は不透明鉱物が多く、土師器や瓦類等に余り見られないゴツゴツした不透明鉱物を含有することが特徴である。このゴツゴツした形態は土器を焼くときの条件と深い関係があるかも知れない。更に、No.17で見られるように輝石や角閃石が不透明物質に被覆されていることも関連性が考えられる。焼くことによって、本来含有されていた鉱物が変質しているようである。緑山・立野・接山の各遺跡の須恵器間には差はない。

土師器には不透明鉱物は比較的少なく、角閃石族が多産することが特徴となっている。緑山・立野遺跡間では余り差がない。幾つかの種類の角閃石、あるいは緑レンズ石の産出傾向から、更に細分される可能性もある。表の中で普通角閃石を緑色と褐色に分けてあるが、No.22でも述べたように、

両者が原料中の姿をそのまま反映しているのか、或いは焼成によって生じた変化なのか今後検討する必要がある。

瓦や瓦塊等は、鉱物組成上須恵器と土師器の中間的な特徴を持っている。

No.15の粘土には、不透明鉱物が比較的少なく、角閃石族が多産すること等、土師器に類似した性質を示す。

さて今回の分析試料中には、火山ガラスが付着していて明らかにテフラ（火山灰）に由来すると考えられる鉱物粒子と、淡緑～青緑色角閃石や緑レン石等のように変成岩地域に多い粒子とが混在している場合が幾つか見られた。このことは、土器を構成している粘土中に含まれる鉱物粒子が、単一の岩体に由来するものではなくて、様々な岩種に由来していることを示している。然し、このことは自然に堆積した粘土では一般的であると考えられる。故に、このことだけを持って土器作成の際の混和材の添加の有無は論じられない。

今回の分析において須恵器、土師器の違いが、不透明鉱物、角閃石等の鉱物組成に明瞭に見られた。今後は須恵器（あるいは土師器）における地域性がどのように鉱物組成に反映されているのか検討する必要があろう。また、同一土器の各部位によっても組成がどの程度バラつくかも課題となる。

B 硅藻分析

1. 試料

重鉱物分析に供した粘土試料（No.15）1点に珪藻分析を行った。

2. 分析方法

原試料（5g）—H₂O₂処理—ビロリン酸ナトリウムにて粘土分散—粘土分除法—封入（ブリュウラックス）一同定

3. 分析結果

珪藻は検出されなかった。

C 粘土試料重鉱物分析

1. 試料

今回の分析は、粘土を焼成することによって、得られる重鉱物組成がどのように変化するかを調査する目的で、縄文遺跡内で出土した粘土試料を用いて行った。

2. 分析方法

粘土試料に水を加えてよくこねた後、直径が約5cmの円盤状のものを2つ作製した。片方の厚さは約3mm、他方は約5mmであり、前者をA、後者をBと呼ぶことにする。それぞれ、成形後1週間風乾した。電気炉の中で1200°Cに達してから2時間焼成し、電源を切って自然放冷させた。

重鉱物分析については前回と同様である。試料秤量—鉄乳鉢で粉碎—Machenzie法にて脱鉄処理—超音波装置にて分散—乾燥後、分析筒にて1/4—1/16mmの粒度の砂分を抽出—秤量—重液分離

(テトラブロモエタン、SG \dagger 2.96) 一重鉱物秤量—プレバート作製—偏光顕微鏡下で重鉱物約300個を同定。

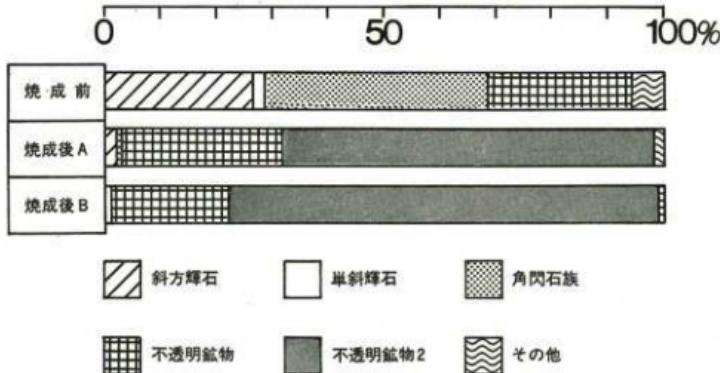
3. 分析結果

分析結果は、表1、図1にそれぞれ示す。焼成前の試料は、鈍い黄褐色であったが、焼成後は赤～赤褐色に変化した。これは、空気の出入りが比較的自由な酸化的条件下で焼成された為と考えられる。

粘土試料に比べ砂分量は多くなっているが、重鉱物量は減少している。斜方輝石・普通角閃石・半斜輝石等の透明鉱物の産出量が焼成後は極めて少なくなっている。不透明鉱物は焼成後、極めて多くなっている。

斜めからの落射光下での色を基準にして、不透明鉱物を便宜的に2つのタイプに分けてみた。落射光下で光沢のある黒色を示す不透明鉱物を「不透明鉱物1」とし、それ以外の赤黒～赤褐、黒褐～褐色等の色調を呈するものを「不透明鉱物2」とした。

今回の試料では不透明鉱物1が20%台、不透明鉱物2は70%前後であった。前回の粘土試料中に



第138図 重鉱物組成図

粘土試料重鉱物組成

1 Na	2 SAND %	3	4										5 TO- TAL		
			HM%	OL	ORX	CPX	G-HO	B-HO	AM	E P	Z I	G	OPQ 1	OPQ 2	ETC
焼成前	7.3	8.1	20	26.7	2.0	39.1	0.6	0.3	1.2	0.3	+	25.8	2.0	345	
焼成後 A	43.4	0.8		2.2	0.3	0.6						28.8	67.0	1.6	321
焼成後 B	36.4	1.7		0.3	1.0						0.3	20.6	77.5	0.3	316

コラム2: 乾燥試料中における粒径 $\frac{1}{4}$ — $\frac{1}{16}$ mmの砂分量(重量%) コラム3: $\frac{1}{16}$ — $\frac{1}{64}$ mm砂分中の重鉱物量(重量%) コラム4: 重鉱物組成(粒数%) OL: カンラン石 OPX: 斜方輝石 CPX: 単斜輝石 G-HO: 緑色普通角閃石 B-HO: 褐色普通角閃石 AM: その他の角閃石族 ZI: ジルコン G: チクロ石 OPQ 1: 不透明鉱物1 OPQ 2: 不透明鉱物2 ETC: その他 コラム5: 同定量鉱物総数

含まれていた不透明鉱物（25.8%）は、今回の不透明鉱物1に相当することから、不透明鉱物1に関する変化がほとんどないことがわかった。ただ焼成後では、自形～半自形の新鮮な不透明鉱物が多くかったのに対し、焼成後には不規則な形態のものが多くなっている。

今回観察された斜方輝石や、普通角閃石は一部が不透明な物質で被覆されている場合が多かった。また不透明鉱物2の中には、斜方輝石や普通角閃石等の形態的特徴を備えているものもいくつか見られた。焼成前の粘土中に不透明鉱物2は見られなかったことと、焼成後に斜方輝石・普通角閃石等が極めて僅かしか検出されないこと等を考え合わせると、斜方輝石・普通角閃石等の透明鉱物の大部分が焼成されることによって、不透明な物質に変質してしまったものと考えられる。

今回の分析では粘土を焼成することによって、透明鉱物が変質して全体の重鉱物組成が大きく変化することがわかった。重鉱物組成の特徴から、土器の地域性を調べる場合、焼成温度による鉱物の変化を考慮する必要があるだろう。形態的変化はあるものの、不透明鉱物1のように、焼成によって量的変化の少ないものは、土器胎土の特徴を表わす指標となるかもしれない。

（河西 学 パリノ・サーヴェイ株式会社）